

2023 年度総合研究報告書

ウェルビーイング

～新たな都市の評価に関する研究II～



U R C

Fukuoka Asian
Urban Research Center

公益財団法人 福岡アジア都市研究所

2023 年度総合研究報告書

ウェルビーイング

～新たな都市の評価に関する研究 II～

公益財団法人 福岡アジア都市研究所

2024 年 3 月

はじめに

公益財団法人福岡アジア都市研究所（URC）では、2022年度より、新たな都市の指標という研究テーマを受け、都市の指標の変遷や指標の背景にあるものを探りつつ、これからの都市に求められる指標を検討してきた。日本を含む多くの先進国では、社会の機能的な面や物質的な面での充足を追い求める時代がいったん落ち着き、生活の質（QoL）という言葉で表す良好な生活環境や暮らし方へ視点が移行してきた。その視点はさらに人々の内面にも広がり、客観的に良い状態というだけでなく、個々人が自分にとっての良い状態とは何かを探ることが世界的な兆候となっていることが分かった。模索されているのは、「ウェルビーイング」という言葉で表されている概念である。

2024年度、福岡市において、今後10年間の長期計画となる第10次基本計画が策定される。新たなマスタープランに現代の人々が重視する概念をどのように取り入れることができるのか、その可能性を軸に探求を行った。

ウェルビーイングは個々人の価値観や環境・経験によってその定義が変化し、時を経てなお不変なものでもない。人によって異なるということは地域によっても異なる。我々は、地域の人々のウェルビーイングを理解するために、アンケートを設計し、調査を実施した。本報告書では、調査の結果から見えてきたことと、ウェルビーイングを政策に取り入れる際の考え方とその手法を提言する。

目次

第1章	ウェルビーイングと政策	7
1.1.	ウェルビーイングとは何か	8
1.2.	価値観と政策の変遷	9
1.3.	主観的指標と客観的指標	11
1.4.	本研究の位置付け	15
第2章	ウェルビーイングを政策に取り入れる意義と手法	17
2.1.	政策に取り入れる意義	18
2.2.	政策的フレームワーク	21
コラム 1	WB 指標を取り入れる際の注意点（信頼性・妥当性）	24
第3章	アンケート調査	27
3.1.	アンケート設計	28
3.2.	基本属性	30
3.3.	ウェルビーイング評価	32
3.4.	自由記述のテキスト分析	35
3.5.	統計分析による影響要因の把握	43
3.6.	まとめ	47
コラム 2	介護業界におけるウェルビーイング～事例に基づく評価項目の検討～	49
第4章	政策形成に向けた考察	53
4.1.	フレームワークの適用	54
4.2.	主観的評価の分野とレベル	56
4.3.	都市と個人のウェルビーイング	57
コラム 3	福岡市職員研修（政策的フレームワークを用いたワークショップ）の報告	59
第5章	おわりに	63
	アンケート調査結果資料編	65
	参考文献	83

第1章 ウェルビーイングと政策

1.1. ウェルビーイングとは何か

ウェルビーイングは、善き生、快適、健康、幸福、福祉など多様な定義がなされ、文脈によって使い分けられてきた^(1,2)。公益財団法人福岡アジア都市研究所（URC）では、過去の報告において、これらを対象別に整理し（表1）、個人の健康、生活（快適、福祉）、精神（善き生、短期的・長期的幸福）に加え、近年の研究で指摘されるようになった社会・場（他者とのつながりの中にある互恵的な幸福⁽³⁾）における良好な状態と定義した⁽⁴⁾。なお、本報告書において、参照する文献や事業等によっては、幸福度という言葉を用いることがあるが、ここで言うウェルビーイングとほぼ同義として議論を進める。

表1 ウェルビーイングの構成要素

対象	要素	
個人	身体	健康状態
	生活	物質的 経済状況、住環境、医療、移動・交通など ポジティブな感情の多さと不快な状態の回避（ヘドニズム）
	精神	
社会・場	脱物質的	人生の意味や意義につながる持続的な幸福（ユーダイモニズム）
		社会的つながりなど、自分と周囲の互恵的な幸せ

出所：菊澤（2023）⁽⁴⁾をもとに URC 作成

まず、個人のウェルビーイングの構成要素の一つとして、健康状態の良好さを示す身体的ウェルビーイングが挙げられる。次に、経済状況、住環境、医療、移動・交通などの要素からなる生活の満足度に関連する分野がある。公共交通の整備や汚染対策など生活を支えるインフラ関連指標を中心とする。多くは、主観と客観の両方で計測が可能である。広辞苑によれば、主観とは、「自分ひとりの考えや感じ方」であり、主観的とは、「主観による価値を第一に重んずるさま」をいう。これに対し客観とは、「主観の作用とは独立に存在すると考えられたもの」であり、客観的とは、「特定の個人的主観の考えや評価か

ら独立して、普遍性をもっていること」をいう^(5,6)。例えば、駅やバス停から特定の距離以上離れた地域（公共交通空白地域）の状況は客観的指標において評価し、交通の利便性に対する住民の満足度は主観的に評価できる。

精神的ウェルビーイングには、比較的短期的な「嬉しい」「楽しい」などのポジティブな感情（ヘドニズムと呼ばれる）と、人生の意義につながる持続的な幸福（ユーダイモニズムと呼ばれる）がある。ヘドニズムは、美味しいものを食べる、飲む、音楽を聴くなどを通して得られる感覚的な快楽を指し⁽⁷⁾、ユーダイモニズムは、働き方や人生の岐路における選択肢の有無、多様性への寛容さ、自己実現などによって説明される。さらに、没頭や挑戦、自己実現など競争の中で得られる「獲得系」の幸福に対して、他者との関係性の中に育まれる「協調系」の幸福の存在が近年論じられるようになってきている⁽³⁾。ここでは、自己と他者や社会との相互の関係性の中に生まれる幸福を、社会・場の要素として加えている。

なお、「生活満足」をウェルビーイングと同一と捉える調査が見られるが、本研究では、上記のような整理から、従来の「生活満足」は、ウェルビーイングの一部の構成要素であると捉えている。

また、これらの要素は、物質的と脱物質的の2つの分類が可能と考えられる。完全に切り分けられるわけではないが、住環境や交通など生活満足度は、物質的な環境整備によって向上できる。ヘドニズムに分類される食事などの欲求への対応もまた物質的な側面が強い。一方、精神的なウェルビーイング、特に持続的な幸福や、他者とのつながりなどは脱物質的な側面を持つ。

以上のように、ウェルビーイングは多様な側面から理解されることから、何をもってウェルビーイングと捉えるかは人それぞれであり、個々人の考えや経験、環境等によって形成された価値観が影響する。よって、健康寿命や収入など客観的に測定できるものとは異なり、その定義も含め、個々人が主観的に評価するという特性を持つ。

1.2. 価値観と政策の変遷

現在、私たちは大きな価値観の変化の中に身を置いている。世界の価値観に関する研究を主導してきたイングルハートによれば、過去 30-40 年の間に、経済的な成功や物質的な満足よりも、自己表現や自由な選択に価値を置く「脱物質主義的」な考え方が台頭しているとのことである⁽⁸⁾。

都市の指標は、単なる経済や人口の規模だけでなく、環境や社会的な側面を重視する方向に変化し、また、指標自体の多様化も進んでいる。社会的指標においても、評価の対象は、国レベル（統計データ）の生活の豊かさから、個人の生涯にわたる豊かさ（国民視点の価値観）へと焦点が移ってきた。

これらの変化の背景には、時代ごとの理想的な都市像が存在する（図 1）。理想の都市像は、都市や機能配置の構成美という視点から、効率的土地利用・利便性に関心が移り、そこからさらに環境汚染や災害への抵抗力・回復力を都市に求めるようになってきた。そして、産業の

発展とともに自動化・機械化が進む中で、改めて都市を、構造物や技術から「人」に戻そうという動きが見られるようになる。

これらの都市像は、周囲の環境や社会的な状況、そして人々の価値観によって形作られている。気候変動や生物多様性の喪失など、環境問題が長期的なグローバルリスクとして認識され、さらには、感染症の勃発により生活破綻など社会的課題が浮上するなど、都市が克服しなければならない課題は多い。こうした時代背景は、目指す都市像に強く影響を与える。さらに現在、私たちは人類史的に観測される一つの大きな転換点に立っている。一方では、産業化社会という人類史的な大きな 1 つのサイクルのピークに差し掛かっているという指摘があり、もう一方では、物質主義的な価値観から脱物質主義的な価値観への移行が確認される。これらが重なって起きていることは偶然ではないだろう。

産業化社会の成熟化・定常化と脱物質的・精神的豊かさを求める価値観への変化は、社会的変化とともに都市像に影響を与える。2000 年以降、異常気象やそれに伴う災害への抵抗力・回復力を持つ都市、あるいは技術の急速な進展に飲み込まれない「人」を基点とする都市像が生まれてきた。このように、いくつもの背景・条件・リスクが重なり合った現在の状況は、都市に新たな指標が必要であることを示唆している。

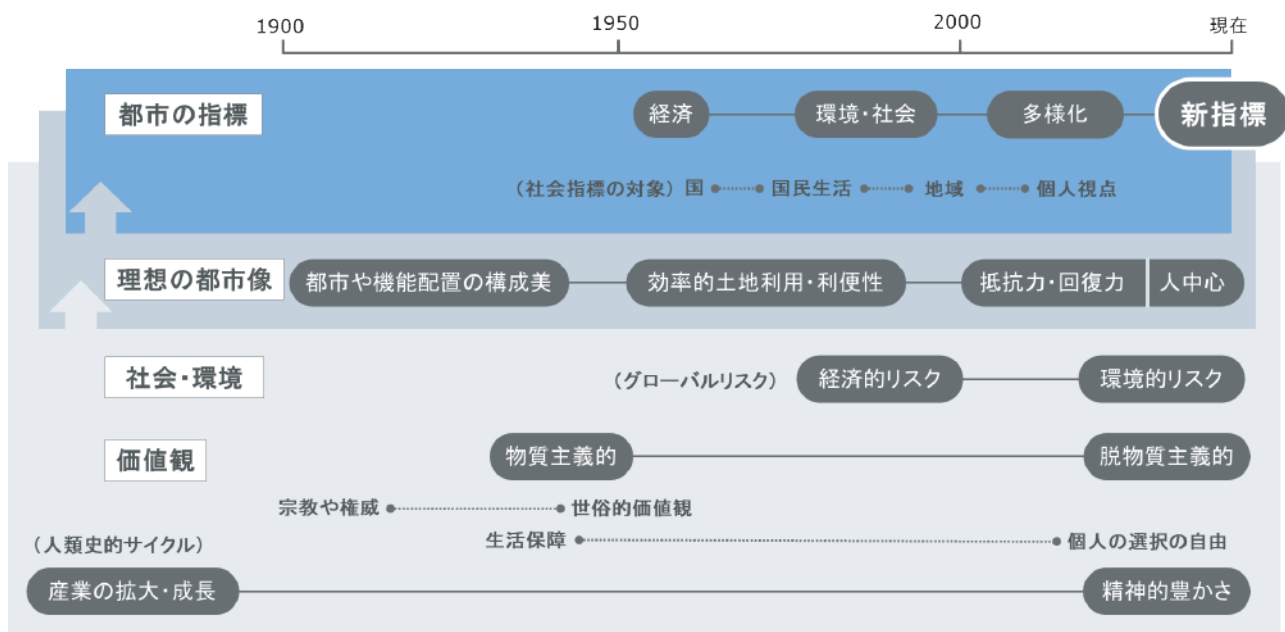


図 1 価値観と都市像の変遷

出所：URC 作成

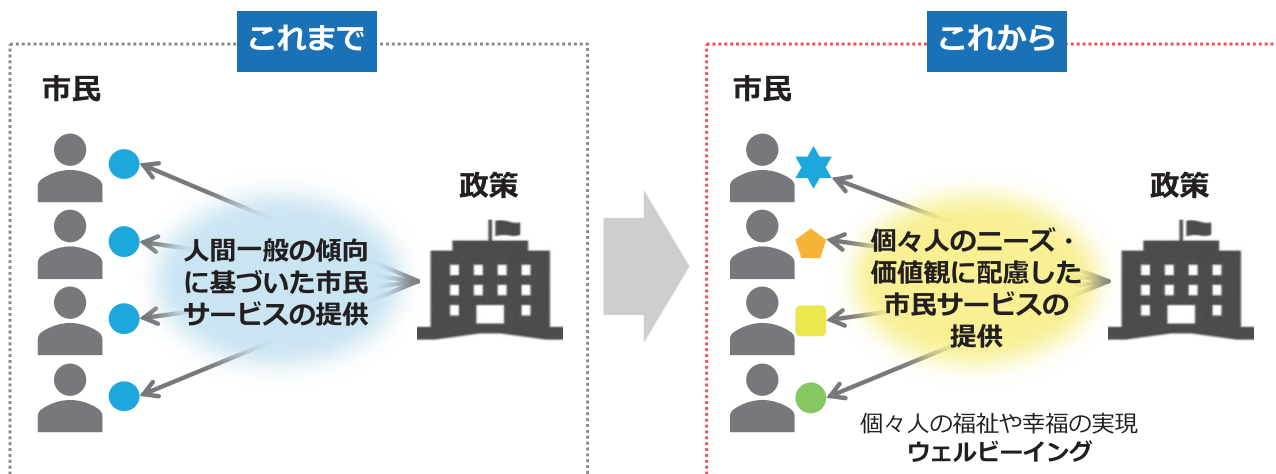


図2 政策形成のあり方の変化

出所：URC 作成

以上のような背景から、URC では、2022 年度より、価値観や都市に求めるもの（都市像）の変化を踏まえ、都市を測る新たな指標を模索してきた。

さて、新たな指標を模索する過程で、政策形成における「市民」と「政策」の関係性の変化に触れておく。これまで、「一般化した」市民を対象とする政策形成が主流であったが、最近では、個々の実在する市民を対象とした政策形成へのシフトが起きている。従来、政策立案・形成のプロセスでは、統計データなどの社会全体のトレンドを捉える指標が主に使用されてきた。社会を表す統計データによって、人々の幸福度を測定し、“人間一般”の傾向を把握することが行われてきた⁽⁹⁾。しかし、社会指標の対象が国から地域、さらには個人へと、よりマイクロな視点へと変化してきたことに加えて、理想の都市像においても、都市全体の機能配置の構成美や効率的な土地利用から、人中心の社会形成が重視されるようになってきた。このような変化を考慮すると、これまでの人間一般・社会一般の傾向を示す指標では、人々のニーズや課題に十分に対応することが難しくなってきたと言える。そのため、個々の実在する人々に焦点を当て、主観的な視点から人々の課題やニーズに対応する政策形成が必要とされている（図2）。

この動きは、2021年に岸田文雄首相が提唱したデジタル田園都市国家構想とも一致する。これは、デジタル技術を活用して、「供給が需要に合わせる経済」⁽¹⁰⁾の実現を目指すものである。人口増加局面では需要が供給に合わせ、乗客が時刻表に合わせてバス停でバスを待っていたが、

人口減少局面では、乗客の都合に合わせて車が迎えに行くことが求められ、また需給のリアルタイム把握などの技術の発展によりこうしたサービスが可能になる。こうした発想は、単なるデジタル技術の進歩にとどまらず、多様な生活ニーズや価値観に柔軟に対応する時代の要請に基づいていると言える。こうした中で注目されるのが、本報告のテーマであるウェルビーイングという概念である。ウェルビーイングは、個々人の“心”を起点とした新しい指標とも言われ、多様性や個々の価値観などの主観的評価を重視する。既存の「ものさし」に代わる、人それぞれの新しい「コンパス」として⁽⁹⁾、人間一般ではなく個々人の福祉や幸福の実現にフォーカスを当てる考え方である。経済的・規模的成長だけでなく、個々人の精神的な充実を追求する時代において、ウェルビーイングは都市の新たな指標として重要な役割を果たす可能性がある。

1.3. 主観的指標と客観的指標

1.3.1. 主観と客観

主観的評価について論じるにあたり、まずは、主観と客観の定義から始めたい。先述の通り、「自分ひとりの考えや感じ方」である主観と「主観の作用とは独立に存在すると考えられたもの」である客観では^(5,6)、同じ対象物を評価するにしても、視点が異なる可能性がある。

ウェルビーイングの測定における主観的指標と客観的指標についても述べると、主観的ウェルビーイングの指標には、主観的幸福度や生活満足度など個々人の感じ方を反映する指標が存在する。対して、客観的ウェルビーイング指標には、GDP や平均寿命など統計や社会的指標で表されるものがあてはまる（表 2）。従来は、GDP などの客観的指標が人々の幸福を反映する指標として認識されてきた。しかし、GDP の上昇が幸福感や生活満足度に結びついていないことが認識されるようになり、客観データで捉えきれない側面を主観的指標が表しているとの指摘が強まってきた（図 3）⁽¹¹⁾。こうした流れから、主観的評価の重要性が高まってきている。

本論では、特にことわりのない限り、主観的ウェルビーイングをウェルビーイングと呼ぶ。

表 2 主観的・客観的ウェルビーイングの違い

	指標	値
主観的ウェルビーイング	主観的幸福度、生活満足度など個々人の感じ方を反映する指標（何を基準とするかは個々人に委ねられる）	例えば、0 から 10 までの 11 段階評価を用いて主観的に評価した値（何をもちて良いと判断するかは個々人に委ねられる）
客観的ウェルビーイング	GDP、平均寿命など統計や社会的指標	GDP、平均寿命などの値

出所：菊澤・山田（2023）をもとに URC 整理

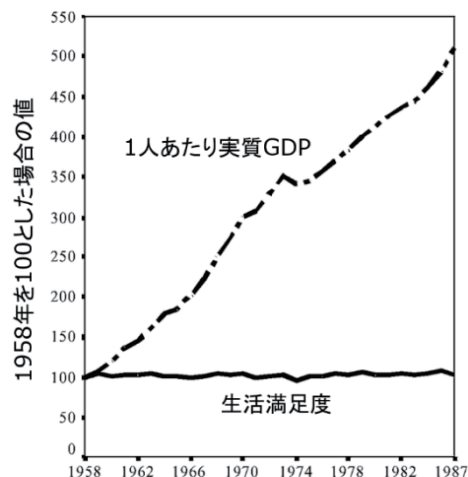


図 3 日本における生活満足度と GDP の推移

出所：Diener ほか（2002）を URC 翻訳

1.3.2. 主観的指標の現状（主要都市の指標比較）

ウェルビーイングという主観的評価が重視される政策では、主観的指標を政策の主要な指標として取り入れることが模索される。ここでは、国内の主要な都市の基本計画における主観的指標と客観的指標の位置付けについて概観する。図4は、主要都市19都市の基本計画および指標の設定数を主観的指標と客観的指標に分類し示したものである。政令指定都市20都市のうち、北九州市においては総合計画には指標の設定はなく、施策ごと・局ごとに事業単位の成果指標を定め、年度の行政評価にて進行管理を行っていることから、その他19都市を対象に指標をカウ

ントした。指標数を見ると、川崎市の300から浜松市の26まで非常に幅がある。主観的指標と客観的指標の割合を見ると、主観的指標の割合が最も高いさいたま市の63.6%から最も低い千葉市の2.9%までこちらも幅が広い。さいたま市と新潟市を除いては、主観的指標の方が客観的指標より多いことから、客観的指標が評価指標としてより利用されてきたことがわかる。しかし、指標の数にしても主観的指標と客観的指標の割合にしても、全体的な傾向というものは見えずらい。

都市名	基本計画（年）	指標内訳（合計指標数）
札幌市	札幌市まちづくり戦略ビジョン（2013-2023）	19 28 (47)
仙台市	仙台市実施計画2021-2023	11 201 (212)
さいたま市	さいたま市総合振興計画 基本計画2021-2030	49 28 (77)
千葉市	千葉市基本計画第1次実施計画令和5-7年度（2023-2025年度）	4 132 (136)
横浜市	横浜市中期計画2022-2025	15 189 (204)
川崎市	川崎市総合計画第3期実施計画（基本政策1-5）2022-2025	101 199 (300)
相模原市	未来へつなぐ さがみはらプラン-相模原市総合計画-（令和2年度-）施策分野別基本計画	48 81 (129)
新潟市	新潟市総合計画2030	38 30 (68)
静岡市	第4次静岡市総合計画 前期実施計画（令和5（2023）年度-令和8（2026）年度）	26 38 (64)
浜松市	浜松市基本計画（2014-2024）	12 14 (26)
名古屋市	名古屋市総合計画2023	57 81 (138)
京都市	後期実施計画（2016-2020）	8 26 (34)
大阪市	第2期大阪市まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和4年9月改訂版）	15 58 (73)
堺市	堺市基本計画2025-2030	6 29 (35)
神戸市	神戸2025ビジョン	11 110 (121)
岡山市	岡山市後期中期計画2021-2025	17 62 (79)
広島市	広島市実施計画(2020-2024)2023改訂版	11 32 (43)
北九州市	基本計画・改定版（2013-2020）	指標の設定なし
熊本市	熊本市第7次総合計画2020-2023	14 37 (51)
福岡市	福岡市基本計画（2012-2022）	44 120 (164)

■主観 □客観

図4 主観的指標と客観的指標の都市別導入数

出所：各都市ホームページより URC 調査（2023年6月）。

注：施策ごとの KPI だけでなく政策ごとの基本目標（指標）が設定されている場合も指標数に含む

また、図 5 には、19 都市の成果指標を政策分野別に集計したものを示している。「子育て・教育・生活」や「経済・観光・国際」などに比べ、「行政運営・その他」、「文化・スポーツ」、「防災」などは指標数が少ない。主観的指標と客観的指標の割合を見ると、「文化・スポーツ」、「行政運営・その他」、「子育て・教育・生活」、「健康・福祉」の分野において主観的指標の割合が比較的高い。便宜的に指標群を 7 つの分野に分類しているものの、恣意性が多少残ることもあり、分野別の傾向を特定することは難しいが、ハード面での不足がある分野は客観的指標が多く設定され、ハード面が充実しソフト面に課題がある分野に主観的指標が導入されるなどの傾向が示唆される。ハードからソフトへの転換は、一般的に見られることである。例えば、福岡県では建築都市部が主管となり都市計画を進めており、技術系や土木系の職員を擁しつつも、にぎわいや官民連携に加え、ウェルビーイングに関連する施策の立案・実施が求められるようになり、従来ハードを強みとした部局でもソフトに重心を置いた業務が目立つようになってきているという⁽¹²⁾。

主観的指標の例(表 3)を見ると、健康・福祉分野では、「生きがいがあると感じている高齢者の割合」は複数の都市で採用されている一方で、『「自らが望む形で生活できている」と答えた障害者等の割合」や「生活や健康福祉に関して困っていることや相談したいことの相談先がない高齢者の割合」など、独自の指標を設定している例も見られる。他にも、行政運営の分野では、「市政に意見を言える環境が整っていると思う市民の割合」のように、市政への参加度合いを尋ねる質問はよく見られるが、近年の行政サービスの変革を踏まえ、「行政サービスのデジタル化により、利便性が向上したと思う市民の割合」などを指標として設定する自治体もある。また、国際関連では、海外との交流経験などを聞く質問はよく見られるが、福岡市では、「外国語で簡単な日常会話ができると思う生徒の割合」を聞くなど、すでに海外からの来訪者の多い地域ならではの指標を設定している。このように、それぞれの自治体の特徴や課題感に合わせて、主観的指標は自由に設定できるというメリットが感じられる。

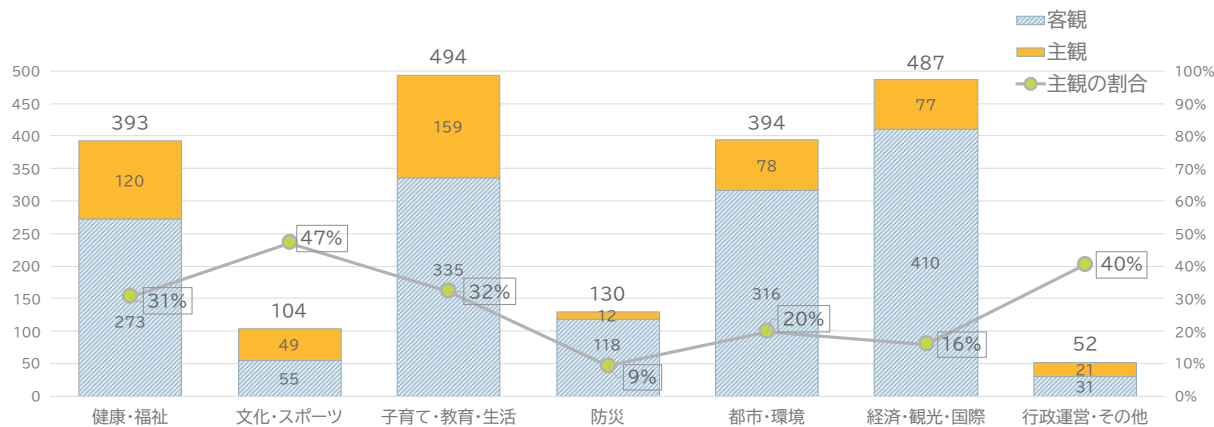


図 5 主観的指標と客観的指標の分野別導入数

出所：各都市ホームページより URC 調査（2023 年 6 月）。

表 3 主観的指標の例

健康・福祉	<ul style="list-style-type: none"> ★「自らが望む形で生活できている」と答えた障害者等の割合（さいたま市） ★生活や健康福祉に関して困っていることや相談したいことの相談先がない高齢者の割合（札幌市） ★孤立死について心配していない市民の割合（札幌市） ★就労支援を受けた生活困窮者のうち、就労や増収につながった人の割合（新潟市） ★多様な性のあり方を理解している市民の割合（横浜市） ●生きがいがあると感じている高齢者の割合（相模原市、名古屋市）
文化・スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> ★文化芸術に親しめるまちであると感じる市民の割合（さいたま市） ●スポーツボランティア参加率、スポーツを支える活動に年1回以上参加した人の割合（横浜市、川崎市、相模原市） ●文化的な環境に対する満足度（施設の使いやすさ、情報の入手のし易さなど）（仙台市、川崎市、新潟市、神戸市）
子育て・教育・生活	<ul style="list-style-type: none"> ★生涯学習施設や図書館などにより、知的好奇心が満たされていると思う人の割合（浜松市） ●自分にはよいところがあると回答した児童生徒の割合（新潟市、浜松市、堺市、神戸市） ★地域で子どもに関わる活動をしたことがある市民の割合（相模原市）
防災	<ul style="list-style-type: none"> ★避難所を知っている人の割合（川崎市） ●日頃から災害に備えて対策（家庭内備蓄など）を取っている市民の割合（さいたま市、川崎市、相模原市、名古屋市）
都市・環境	<ul style="list-style-type: none"> ★都心部で以前と比べ緑が増えたと思う市民の割合（新潟市） ●環境配慮活動を実践している人の割合（札幌市、さいたま市、横浜市、川崎市、相模原市、名古屋市、広島市） ●自転車利用環境の整備に対する満足度（さいたま市、堺市、岡山市）
経済・観光・国際	<ul style="list-style-type: none"> ★地域で国籍の異なる人と交流がある市民の割合（名古屋市） ●仕事と生活の調和が取れていると思う人の割合（札幌市、浜松市、名古屋市） ●地元の農水産物（または野菜・果物等）を優先的に選ぶ市民の割合（さいたま市、神戸市、岡山市、熊本市） ★外国語で簡単な日常会話ができると思う生徒の割合（福岡市）
行政運営・その他	<ul style="list-style-type: none"> ●市政情報の取得満足度（川崎市、新潟市、浜松市、岡山市） ★職員アンケートにおける「自身のキャリアや強みを理解・意識している」「ある程度理解・意識している」と答えた職員の割合（仙台市） ★行政サービスのデジタル化により、利便性が向上したと思う市民の割合（新潟市） ●市政に意見を言える環境が整っていると思う市民の割合（相模原市、新潟市）

●複数の都市で設定 ★一つの都市で設定

出所：各都市ホームページより URC 調査（2023年6月）。

1.4. 本研究の位置付け

1.1 で論じた通り、ウェルビーイングは多様な側面から理解され、ウェルビーイングの捉え方は人それぞれであることから、測定が難しいとされてきた。

こうした主観的要素の測定は、ポジティブ心理学、健康、経済学等多様な分野で議論されるようになり、科学的な知見が蓄積してきたことで、指標化が進み、政策的展開の可能性も見出されるようになってきた⁽¹³⁾。

回帰分析と呼ばれる手法を用いて、幸福に影響する要因を理解しようとするアプローチが一般的である。回帰分析とは、ある特定の結果（目的変数）に影響を与える要因（説明変数）を見つけるための手法である。例えば、健康寿命を説明する要因、つまり、健康寿命がどのような要因によって影響を受けるのかを調べるのに役立つ方法である。ただし、この方法には制限がある。たとえば、十分なデータがない場合や、データの品質が悪い場合、正確な分析ができなくなる。そのため、実際にこのような分析を行っている自治体は、それほど多くない⁽¹⁴⁾。

さらに、「最終的に形成される状態が定量的に把握することの困難な定性的状態」であったり、「主観的要素が多い場合」は、このようなアプローチは馴染まないともされ、「最上位の価値を実現するために、体系的な評価指標をどのように組み上げて政策に反映させていくか」⁽¹⁴⁾は喫緊の課題となっている。アンケートなどを通して得られるウェルビーイング実感の評価を踏まえ、いかに政策と関連付けて議論していくか、模索する必要がある。

このため、まず、これまで進められてきた研究や政策的な取組みを概観し、本報告の位置付けを示す。

主観的ウェルビーイングに関する研究に、定義や理論に関するもの⁽¹⁵⁻¹⁷⁾、評価尺度に関するもの^(3,18-21)、ウェルビーイング実感の評価に関するもの⁽²²⁻²⁵⁾、ウェルビーイングの影響要因分析に関するもの^(25,26)など多岐に渡る。一方、政策に関しては、実践的な取組みと同時並行で進められているものの、政策の実施と成果との因果関係の不明確さなどから、有効な指標設定や政策の評価が確立されておらず、ウェルビーイング政策に関する先

行研究はまだ限定的と言える⁽¹³⁾。

実践的な取組みとしては、ブータンを始め、フランス、イギリスなど国家単位でウェルビーイングの実現を政策的に推進するものや、OECDのように、そうした政策的展開を支援する枠組みがある⁽⁴⁾。国内においても、熊本県や東京都荒川区など先進的に幸福度を政策の中軸に位置付ける自治体が存在する。さらに、自治体間の幸福度の比較やランキングを行う取組みとして、一般財団法人日本総合研究所「全 47 都道府県幸福度ランキング」⁽²⁷⁾、ウェルビーイング学会「都道府県別国内総充実（GDW）」⁽²⁸⁾、「地方創生のファクター-X 寛容と幸福の地方論」⁽²⁹⁾、「デジタル田園都市における地域幸福度（Well-Being）指標全国調査」⁽³⁰⁾などがある。

学術的な取組みとしては、地方自治体におけるウェルビーイング政策のあり方や意義を模索する研究が存在する。白石ら（2017）は、幸福度指標を政策に取り入れている自治体を事例に、①主観的幸福感の位置づけ、②幸福施策の決定主体、③幸福施策の評価方法の3点に着目し、主観的幸福感、幸福政策（施策）、幸福度指標との関係を明らかにした⁽³¹⁾。また、広井は、個人の自由や効用の極大化などを背景としたリベラリズム的な幸福観と、コミュニティを重視した、利他性や協調性、関係性の中に存在するコミュニタリアニズム的な幸福観という、幸福政策の2つの側面について論じている⁽³²⁾。

さらに踏み込んで、どのようにウェルビーイングの概念や指標を政策に取り込むかを論じるものとして、高野（2021）がある。高野は、地方自治法の文言および都道府県市町村議会の議会議事録を手掛かりに、「ビジョン提示と測定把握」、「政策の優先度決定」、「政策への視点付与」を、自治体のウェルビーイングの実践的枠組みの3層構造として提示している⁽³³⁾。アプローチは異なるが、本研究と同じくウェルビーイングの自治体政策への適用可能性と課題の考察を進めている点が興味深い。他にも、実践を踏まえた研究として、荒川区の荒川区自治総合研究所の一連の報告がある。一例を述べると、区民へのアンケート結果を用いた、分野別重要度の把握、評価の低い項目のボトムアップ、政策の効果向上、幸福実感の構造の解明による政策へのフィードバック等を行っている⁽³⁴⁾。

本報告もまた、ウェルビーイングを政策に適用する際の実践的研究の一つに位置づけられるが、ここでは、以

下の調査・研究を通して、それに対する提案を行う。

第2章では、ウェルビーイングを政策に取り入れる意義と手法について、以下の流れで解説する。

まず、政策的フレームワークに焦点を当て、ウェルビーイングを政策に組み込むことの重要性や、その手法について検討を行う。

第3章では、2022年度にURCが実施したアンケート調査の結果を検証する。これによって、個々人のウェルビーイングの捉え方、それに基づく評価、そして影響要因について理解を深める。

そして、第4章では、調査結果をもとにウェルビーイングを政策に適用する方法について考察する。2022年度の調査結果を活用し、ウェルビーイングの実感や影響要因を特定し、それを政策展開に結びつけるプロセスについて議論を行う。

個々の自治体が生活満足度調査などのアンケート調査を行う一方で、政策との因果関係まで探る例は少ない。限られたリソースの中で調査結果を有効に活用するために、どのような視点や分析プロセスが有益かを明らかにする必要がある。これにより、今後の調査や分析の方針をより具体化し、より効果的な政策展開につなげることを期待している。

第2章 ウェルビーイングを政策に 取り入れる意義と手法

2.1. 政策に取り入れる意義

2.1.1. ウェルビーイングへの政策介入効果

ウェルビーイングを政策的な指針や指標として取り入れるにあたり、主観という人々の心を反映する評価に対して政策が介入する余地はあるのか、主観的評価は統計データ同様の安定性や信頼性を担保できるのか、など疑問は多い。そうした懸念がありつつも、なぜ主観的評価を政策に取り入れるべきなのかについて、理由は複数存在すると考えられるが、ここでは2点紹介する。

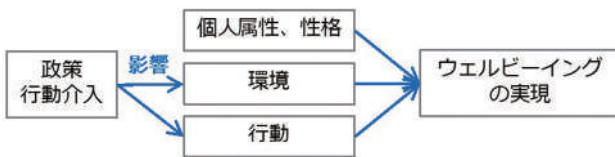


図6 ウェルビーイングへの政策介入効果

出所：URC 作成

まず1点目として、政策には人々を幸せにする力があるということが近年の研究で明らかになってきている（図6）。従来、幸福度は、個人の属性に規定される、すなわち、年齢や性格など変えることのできない要因が個々人の幸せを決定すると言われてきた⁽³⁵⁾。これに対し、高尾らは、個人の属性を統制した上で、地域政策の評価が幸福度に影響するという結果を提示した⁽³⁶⁾。ウェルビーイングの主要な尺度として、日常生活全般に関する評価を示す「生活満足度」(LS)、自らの幸福度を点数で示す「人生満足度」(SWLS)、より長期で見た人生の充実度を含む主観的幸福度 (SWB) などがある。これら3つのウェルビーイング尺度と地域政策の関係性を見ると、LSには、雇用所得政策と環境住宅政策が、SWLSには、雇用所得政策と交流安心政策が、SWBには、雇用所得政策、環境住宅政策、生活利便政策が有意な影響を与えていることが明らかとなった⁽³⁶⁾。これらいずれにおいても、雇

用所得政策が最も強く影響している。雇用所得政策とは、やりがいのある仕事・自分に適した仕事ができること、職場の環境が快適であること、収入や財産の不平等が少ないことなど（所得の向上ではなく所得分配の公平性）であり、こうした要素への政策的介入がウェルビーイングに寄与するということを意味する。

また、Hobbsらは、選択式回答の質問では、個人の属性に類する主観的な心理的特性（外交的な性格であるなど）がウェルビーイングに与える影響を過大評価し、反対に、ウェルビーイングと、健康指標・行動・社会経済状況等との関連性を過小評価する傾向にあるという⁽³⁷⁾。Hobbsらは、自由回答式の質問を用いることで、環境や行動がウェルビーイングに影響することを明らかにしている。健康・行動・社会経済状況等は、より公共政策や行動介入が関与しやすい領域であり、環境や行動をターゲットにした政策の方が、心理学による介入よりも影響規模が大きいと結論づけられている⁽³⁷⁾。

以上のような研究から、ウェルビーイングへの政策介入の寄与度が明らかとなっており、ウェルビーイングに影響を与える因子を明らかにし、政策的に取り組んでいくことの意義が示されている。

2.1.2. 主観的評価による政策評価の質向上

ウェルビーイングを政策的に展開するもう一つの理由として、主観的評価は政策をより正しく評価しうることが挙げられる（図7）。

加藤らは、ウェルビーイングにおけるWE問題に対する主観的評価の重要性を指摘する。WE問題とは、「一人で生きていける人間」という自足的・自立的な個人観の代わりに、「人は一人では何もできない」という非自足的・非自立的な個人観を表し、後者に基づく評価が必要であるという主張である。WEの思想を組み込んだ上で、客観-主観の指標間の関係性を求め、行政課題に関する主

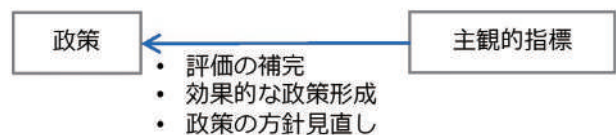


図7 主観的評価による政策評価の質向上

出所：URC 作成

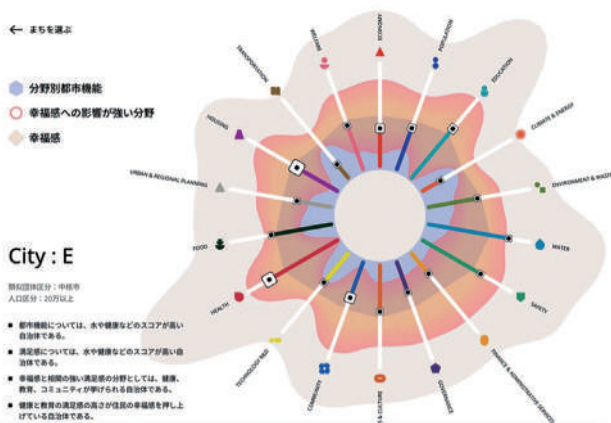


図 8 SUGATAMI のまちのカタチの可視化ツール

出所：サステナブル・スマートシティ・パートナー・プログラム
運営事務局（日本電信電話株式会社 新ビジネス推進室）

観的指標と客観的指標は全般的に相関が低いということ
を明らかにした⁽³⁸⁾。従来の客観的指標は、生活の利便性
や自然の体感など特定の分野においては主観と客観の相
関が確認されるものの、地域コミュニティを対象とする
因子に対応する客観的指標がないことが指摘された⁽³⁸⁾。

こうしたことから、「住宅環境」や「移動・交通」など
の客観的指標以上に、「つながりと感謝」「地域の一体感」
などを評価する主観的指標に基づく施策の強化が求めら
れる⁽³⁸⁾。現在の価値観に合わせた新たな客観的指標の設
定（例：ウェルビーイングに影響する客観的指標）や、
客観的指標で取りづらい指標を主観的指標で補うなどの
対応が考えられるだろう。内閣府の「満足度・生活の質
に関する調査報告書」においても、主観的生活満足度を
客観的指標と結びつけることが促されており、主観的評
価と客観的評価の関係性を注視していくことの重要性が
窺える⁽²³⁾。

主観的指標と客観的指標を相互補完的に取り入れる評
価枠組みとして SUGATAMI を紹介する。SUGATAMI
では、幸福感に関しての主観的評価、都市機能に関して
の主観的評価と客観的評価を行うことによって、「都市機
能の充実度合いと満足度のギャップ」と「満足感と幸福
感の相関」を明らかにする^(36,39)。都市機能は、経済、人
口、教育など 18 分野に設定された 100 以上の指標によ
って評価され、E 市においては、水・健康の分野で満足
度が高い、交通分野では客観的評価に比べ主観的評価が
低い、などの傾向を捉えることができる（図 8）。

都市機能を主観と客観で捉えることで、適切な客観的

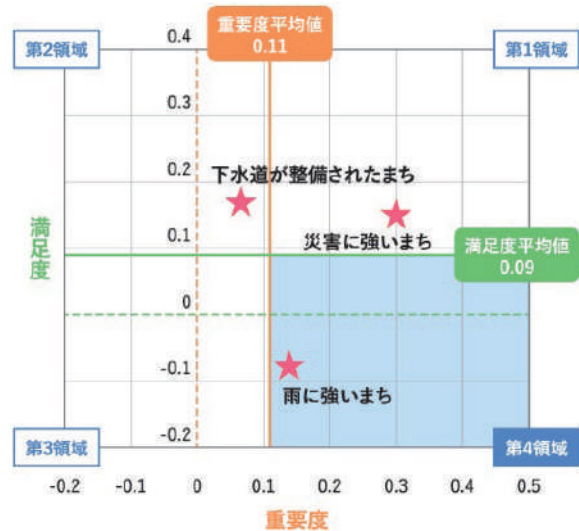


図 9 戸田市の施策の重要性

出所：戸田市第 5 次総合振興計画

指標を見つけれない分野の評価を主観的指標で把握す
るなど、指標間の相互補完や、政策全体の総合評価を把
握することが可能となる。

また、主観的評価を取り入れることにより、政策の優
先度の決定や、特定グループ毎（年齢別・行政区別など）
の政策課題を発見することにも有効とされる⁽⁴⁰⁾。例えば、
施策の満足度と重要度を図示することで優先課題を明ら
かにし、効果的な施策実施へと結びつけようとする試み
がある。埼玉県戸田市では、市の総合計画において、市
民による主観的評価（各施策に対する重要度と満足度）
を、4 つの領域に分けられた図にプロットし、優先課題
の見える化を行なっている（図 9）⁽⁴¹⁾。図 9 においては、
重要度が高く評価されながらも、満足度の低い第 4 領域
にプロットされる「雨に強いまち」に関する施策の優先
度が高いと考えられる。

同様に、本報告書の 3.5 の分析では、縦軸にウェルビ
ーイングの影響要因それぞれに対する満足度、横軸にウ
ェルビーイングへの影響度を表す指標として相関係数を
置くことで、優先課題の特定を試みている⁽⁴²⁾。

さらに、ウェルビーイングにおいて、主観的指標は、
評価だけでなく、目的それ自体の設定にも利用される。
ウェルビーイング評価は、「何を良しとするか」を調査者
ではなく回答者が決定し、評価するという特性を持つ⁽⁴³⁾。
「住民の豊かさとはこうである」と調査者（行政等）が
決めるのではなく、住民自ら幸福な状態を定める。個々
人の求める価値観の変化を捉えることで、都市のビジョ

ン自体の見直しにも有効となるだろう（4.3でも議論）。

このように、主観的指標は、従来の客観的指標が捉えきれない傾向の補完や、より上位の行政評価における包括的な評価により、政策評価の質向上に寄与すると言え、さらには政策の方針自体の見直しにも活用することができる。

2.1.3. 分野別指標とウェルビーイングの関係

2.1.1 および 2.1.2 の議論をもとに、表 4 に主観的指標と客観的指標の相互の関係性およびウェルビーイングとの関係性を整理した。ウェルビーイングを構成する要素である「身体」「生活」「精神」「社会・場」に対し、主観的・客観的指標の有無、主観的指標と客観的指標の相関、ウェルビーイングとの相関を示している。

先行研究から導出された結果等を整理することで、以下のような傾向が確認できる。精神的ウェルビーイング

やつながりに関連する要素に客観的指標が不足し、主観的指標と客観的指標の相関が限定的である。「精神的ウェルビーイング」や「つながり」は、客観的な計測が難しい一方で、ウェルビーイングとの相関が強い。量から質への政策的関心の移行が見られる地域においては特に、主観的指標による、精神的ウェルビーイングやつながりに関連する要素の評価を行っていく必要がある。

表 4 は、特定の文献に基づいた評価ではあるが、さらに精査を加え信頼度を高めるとともに、今後、こうした主観と客観の関係性やウェルビーイングへの影響度などを加味することで、より政策の有効性を高めることが期待される。主観的指標が有効な項目や、客観的指標との組み合わせによって評価の正確性を高められる項目などを明らかにすることで、計測や KPI（重要業績評価指標：Key Performance Indicator）の検討に活用されることも考えられる。

表 4 主観・客観的指標とウェルビーイングの関係

ウェルビーイングの要素	主観的指標	客観的指標	主観的指標と客観的指標の相関	各要素とウェルビーイングの相関
身体	○	○	○	○
生活	○	○	○	○
精神（短期的）	○	△	△	-
精神（持続的）	○	△	△	◎
社会・場	○	△	△	◎
	○… 指標が存在する △… 指標が限定的		◎… 影響が強い ○… 関係性が強い △… 関係性が弱い - … 不明	

出所：URC 作成

2.2. 政策的フレームワーク

2.2.1. ロジックモデル

以上のように、人々のウェルビーイングに政策が寄与していることが明らかになった。次に、行政が人々のウェルビーイングに対し政策的介入を行う際の考え方が重要となる。ここでは、ロジックモデルをもとに、アマルティア・センの「潜在能力アプローチ」⁽⁴⁴⁾という手法における視点を取り入れながら、一つのフレームワークを提示する。

ロジックモデルは、政策やプロジェクト、事業などの取組みが最終的にどのような成果につながるかの因果関係を論理的に示すツールである⁽⁴⁵⁾。具体的な政策の「内容」とそこから得られる「効果」の関係を明確にすることで、その実現可能性や適切さを評価する。ロジックモデルは、(1) インプット（投入資源）、(2) アクティビティ（具体的な活動）、(3) アウトプット（活動によって生

じる産出物）、(4) アウトカム（活動の成果）、そして(5) インパクト（政策の最終的な効果）の5つの段階で構成される（図10）⁽⁴⁵⁾。

一方、アマルティア・センの「潜在能力アプローチ」には、財（インプット）から得られる効用（アウトプット・アウトカム）の間に「潜在能力」の働きがある（図11）。このアプローチでは、福祉水準の豊かさを、客観的評価としての「財・所得」（物質的な豊かさ）で測るのではなく、また、主観的な感覚によって示される「効用」で測るのではない。「効用」を得るために投入する「財・所得」を、様々な「機能」へと変換する潜在的な可能性（これを潜在能力と呼ぶ）を重視する。こうした一連の過程そのものを評価するという考え方である⁽⁴⁶⁾。例えば、教育制度の評価において、学校の施設や授業内容だけでなく、教育が個々の生徒の能力開発や人間的な成長にどれだけ貢献しているかを評価する。

このように、一定の予算や人員を使って政策を実行しても、受け手の能力や社会経済状況によって、得られる成果は異なる。「効用」を生む潜在能力を重視し、行った活動が期待通りの結果につながっているかを確かめることが重要となる。

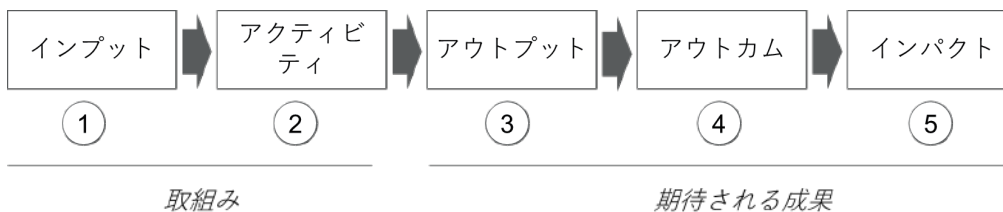


図10 ロジックモデル

出所：W.K. Kellogg Foundation, Logic Model Development Guide を著者翻訳

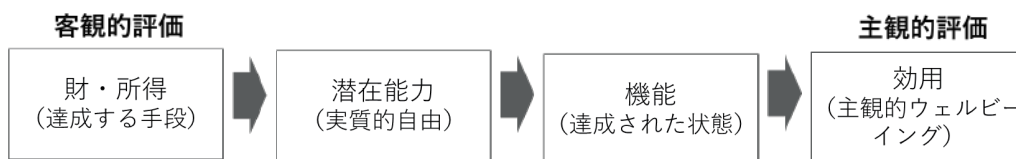


図11 アマルティア・センの潜在能力アプローチ

出所：大塚・諸富（2022）、Thomas Wells⁽⁴⁴⁾をもとに著者作成

2.2.2. 認知と行動の関係

政策介入により人々の特定の行動を促そうとする場合、環境行動モデルや計画行動理論など、いかに人々の態度や行動が形成されるかを理解・予測するための枠組みが利用される。ウェルビーイング実現へのプロセスを検討するにあたり、環境配慮行動の意思決定プロセスを参考に、政策介入の可能性を模索する。ここでは、代表的なモデルとして広く知られる広瀬（1994）の環境配慮行動の影響要因（規定因）モデルを取り上げる。広瀬のモデルは、大きく分けて、「環境認知」「行動評価」「態度」「行動」で構成される（図 12）⁽⁴⁷⁾。環境認知とは、自身の行動等が引き起こす環境リスクを認知している、その行動の責任が自身にあることを認知している、などから構成され、こうした「環境認知」が、環境配慮的な「態度」（例：節電すべきである）を形成する。一方、「行動評価」は、特定の行動を促す環境や条件の整備状況などの「実行可能性評価」や、環境行動を実践することで経済的利益が得られるなどの「便益費用評価」等から成る。そうした「行動評価」ならびに「態度」が、実際の環境配慮行動を促す。

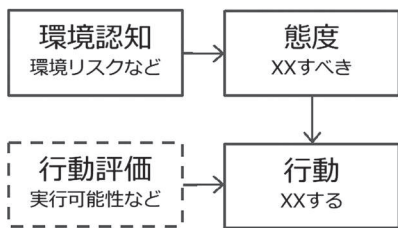


図 12 環境配慮行動の影響要因モデル

出所：広瀬（1994）をもとに URC 作成

つまり「認知」が、何をすべきかの判断基準となる「態度」を形成し、その態度に基づき「行動」が促される。「行動」は、態度だけでなく、外的な環境や条件（図 12 では行動評価）からも影響を受ける。

ウェルビーイングにおいても、こうした構図が応用できるのではないかと。例えば、心身の健康がウェルビーイングに強く影響することを「認知」すると、日々の運動を心がけるようになり（態度）、ウォーキングルートや居

心地の良い緑地空間の整備（環境）が加わることで、行動が促される。ウェルビーイングにおいては、特定の「環境・条件」、「行動」、「個人の属性」などの因子が影響を与えるということがこれまでの研究でわかってきていることから^(37,48)、図 13 の構図を仮定した。本稿では、このモデル全体の評価までは行わないが、今後の検証の土台となりうる。

こうした因子のうち、「認知」および「環境・条件」の領域において政策的な介入が可能と考えられる。行政は、情報の提供、ハード的な環境の整備、ソフト的なしくみの構築などに寄与することが可能であり、そこで提供された情報や条件が人々の意識（態度）や特定の行動に影響を与えることが想定される。さらに、生活の利便性や緑豊かな環境などの条件が直接的にウェルビーイングに影響することもあれば⁽⁴⁹⁾、健康維持のためのウォーキングなど特定の行動がウェルビーイングに影響することもあ

図 13 の因子のうち、認知、環境・条件、行動、属性については主観と客観の両方から計測が可能であるが、感情・態度や状態については、主観的指標に頼るところが大きい。Stiglitz らによる報告書『GDP に代わる指標』で示された 7 つの提案には、「生活の質は、人々の客観的な条件と能力に左右されることから、健康、教育、個人々の活動、環境条件などの測定を向上させる」こと、「生活の質の領域間の関連性を調査し、さまざまな分野の政策形成に活かす」こと、「客観・主観両方の指標によるウェルビーイングの測定が重要である」ことなどが述べられており⁽⁵⁰⁾、図 13 に示された因子の連関を考慮しつつ、評価を行うことが肝要であると考えられる。

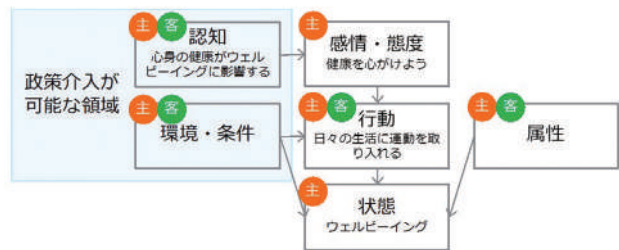


図 13 ウェルビーイングの影響要因モデル

出所：URC 作成

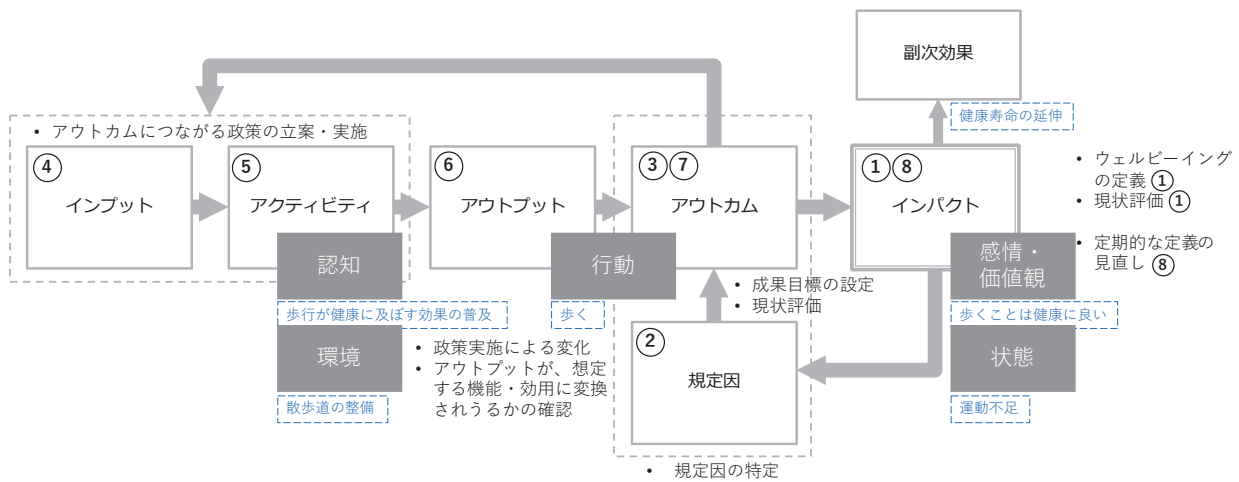


図 14 ウェルビーイングの政策的フレームワーク

出所：URC 作成

2.2.3. ウェルビーイングの政策的フレームワーク

ここでは、ウェルビーイング政策にロジックモデルの考え方を適用したウェルビーイングの政策的フレームワーク（以降、フレームワーク）を提示する。図 14 には、フレームワークのプロセス①から⑧が示されている。

まず、政策の最終目標である「インパクト」を設定する①。次に、インパクトに影響を与える要素・要因（影響要因）を特定する②。アンケート等の主観的評価や統計データを用いて、相関分析や重回帰分析などを行い、統計的な因果関係を見出すことで、インパクトの形成に有効な指標を設定することができる②。ここで得られた影響要因を基に、インパクトを形成する指標群（アウトカム）を設定する③。さらに、現状評価と目標のギャップを考慮して、適切な対策を講じる段階が、政策のインプット・アクティビティとなる④⑤。予算の投入などがインプットに該当し、具体的な施策などのアクティビティ、そしてその結果として得られる成果がアウトプットである⑥。事前評価との比較を通じて、施策の効果把握する。この際、アウトプットがどのようにアウトカムにつながったのか、条件となる「潜在能力」の把握が重要である。特定の対象や期待する成果に対して、各事業が機能や効用を十分に提供できているか、プロセ

スを通して確認する。③から⑦を繰り返し、アウトカムの達成に効果のある事業の展開が重要となる。

先ほどのウェルビーイングの影響要因モデル（図 13）をフレームワークに当てはめると、目指す状態は、「運動不足」が解消された状態となる。そのために、まずどの行動が効果的かを調べるのが②の規定因の特定である。例えば、「歩くことは健康に良い」という価値観の形成が有効であることが特定された場合、「歩く」という行動の増加がアウトカムに設定される③。このアウトカムに向けて、「歩行が健康に及ぼす効果」を周知することで⑤、「歩くことは健康に良い」という感情を促したり、「散歩道の整備」という環境整備により住民の「歩く」行動を後押ししたりすることで、「運動不足」の問題が解消されることが期待される。さらには「健康寿命の延伸」という副次効果も期待される。

最後に、インプット・アクティビティが形成したアウトカムが最終的なインパクトにつながっているかどうかの確認が⑧である。もし⑦と⑧の間にズレが確認される場合は、再度⑧を検証し、影響要因を再評価する必要がある。通常、ロジックモデルでは、インプットから始まりインパクトに向かうため、逆の順番に感じられるかもしれない。しかし、最終的に達成したい状態（インパクト）から始め、そのためのアウトカムを特定し、それを実現するために必要なインプットやアクティビティにつなげることで、政策の意義や有効性を確認することが可能となる（図 14）。

WB 指標を取り入れる際の注意点(信頼性・妥当性)

主観的評価を政策に取り入れるにあたり、その信頼性や妥当性がたびたび指摘される。例えば、幸福の判断は回答時の天候や質問順序、比較対象によって変化するのではないかといったものである⁽⁷³⁾。

こうした疑問に答えるため、再テストにより主観的幸福度評価の信頼性を測る研究が繰り返し行われている。再テストとは、同一の被験者に対し、8週間などの期間を空けて再度実施し、その変化度合いを見るものである。安定性があるとされる人間の知能を測る IQ テストにおける再テストの信頼性は $r = .74$ 、これに対し、Watson ら (1988) が実施したポジティブな気分の評価では $r = .68$ 、Diener らによる人生満足度評価においても再テストの信頼性は $r = .82$ と、知能テストと同等の高い安定性が示されている⁽⁷³⁾。

また、妥当性に関しては、友人・家族等、被験者をよく知る他者からの報告と自己申告の合致度を見る方法で検証されている。同様の検証は、人々の外向性における研究において実施されてきており、高い合致度が報告されているが、ポジティブ感情においても同程度の合致度が確認されている⁽⁷³⁾。

このように、個人の主観的評価の信頼性は、生活環境にほとんど変化がない場合、かなり安定していることが認められている。

感情の評価には一定の安定性が認められている

- 再テストによれば、ポジティブな気分や人生満足度の信頼性は、IQ テストと同等に高い
- 被験者をよく知る他者報告と自己申告の合致度は高い

ただし、こんなことに注意

調査時期や時間の「偏り」に注意！

- ポジティブな感情は正午と夕方頃にピーク
- 月曜日よりも土曜日の方が幸福度が高い

質問順序による印象操作の可能性あり！

- 最初に政治的な質問を置くことが人生満足度評価に影響
- 調査のタイミングや質問順序による恣意的な誘導もありうる

調査の仕方では結果が逆に？

- 主観的指標と客観的統計データを組み合わせた指標と、すべてを主観的指標から評価した指標では、結果が逆になるケースも
- いつも回答する人といつも回答しない人の間で評価が異なる可能性が指摘（いつも回答しない女性は、いつも回答する女性より幸福度評価が高い、など）

ただし、いくつか留意すべき点はある。例えば、ポジティブな感情は正午と夕方頃にピークに達すること、月曜日よりも土曜日の方が幸福度が高いことなどの研究結果も示されており、調査時期や時間の偏りなどによる影響に留意すべきであろう。また、直前の質問によって影響を受ける可能性は否定できない。最初に政治的な質問を置くことが、人生満足度評価に影響を及ぼすことがわかっており、人々の生活領域に大きな影響を与え、普段思い出しづらい領域などは特に影響力が高いと言われている⁽⁷⁴⁾。国家指導者が国民の態度に影響を与える外敵やその他の戦略を作り出すことで幸福度の尺度に大きな影響を及ぼす可能性も指摘されており、恣意的な誘導が行われないよう調査のタイミングや質問順序などの設計には十分な注意を払うべきである。

町野らの調査では、主観的指標と客観的統計データを組み合わせた指標と、すべてを主観的指標から評価した指標を用いて調査を行った結果、比較対象地域の豊かさランキングが逆になるケースも見られ、調査手法による結果の差が確認されている⁽⁷⁵⁾。

さらに、別の調査では、回答を得やすい被験者と回答を得にくい被験者の間で、評価が異なる可能性が指摘される⁽⁷⁶⁾。主観的評価は、人口等の統計データと異なり、回答する人としていない人が存在することから、いつも回答する人といつも回答しない人の間で有意な差が存在するのではないかということである。

以上のように、主観的評価は一定程度の安定性と信頼性が確認されているものの、いくつかの課題への対応策を検討していく必要があるだろう。

対応策として、同一の被験者に対して一定期間中に再テストを行う、固定の母集団と毎回異なる母集団の2グループを比較分析する、調査の頻度を上げる、調査手法を修正しつつ実施する、調査時期の偏りが出ないようにする、などいくつかの方法が考えられる。さらに、被験者の負担感の軽減や集計の自動化を踏まえ、SNS、アプリ、ウェブフォーム等デジタルツールの活用に期待が持てる。

また、今回の我々のアンケート調査では、記述式回答と選択式回答（いずれも主観的評価）を組み合わせることで、記述式回答による顕在意識の把握と、統計分析による潜在的な影響要因の把握を行うことができた（第3章）^(60,77)。これにより、評価の相互補完的な分析が考察の深度や信頼性を高めることにつながると考えられる。

また、主観的評価の信頼性に関しては、従来取得が難しかった客観データの計測により、客観データによる主観的評価の補完作用も期待できる。例えば、心拍数や血圧、血中濃度などの生体データを踏まえて主観的な健康評価を行うことで、天候や気分などその他の要因からの影響を抑制し、より安定性・信頼性の高い主観的評価を得られることも期待される。

調査方法を工夫しよう！

- 同一の被験者に対して一定期間中に再テストを行うことで信頼性アップ
- 固定の母集団と毎回異なる母集団の2グループを比較分析する
- SNS、アプリ、ウェブフォーム等デジタルツールの活用による、調査頻度の引き上げ、集計の自動化など

第3章 アンケート調査

3.1. アンケート設計

前章で提示したフレームワークの通り、政策の形成には、立案から実施、効果の検証までのプロセスを体系的に捉える必要がある。ウェルビーイングの政策への適用においても、インパクトの設定から始まり、それに寄与する要素・要因をアウトカムとして導出するプロセスが求められる。

そのプロセスの一步として、市民らのウェルビーイングの定義とそれに対する現状の把握が重要となる。このため、URCでは、福岡市に住む・関わる人々の「ウェルビーイングの定義（捉え方）」、「ウェルビーイングの現状評価」、「ウェルビーイングの影響要因」の3点を明らかにすることを目的に、質問設計を行い（表5、表6）、2023年2月に福岡市の特定の地区や団体等を対象にアンケート調査を実施した。

表5 アンケートの概要

調査目的	福岡市に住む・関わる人々の <ul style="list-style-type: none"> 価値観やウェルビーイングの定義の把握 上記に対する現状の把握（現状評価） ウェルビーイングを規定する要因の把握
対象	福岡市に住む・関わる人々として、 <ul style="list-style-type: none"> 定住人口（福岡市西区内浜校区を中心に全市） 関係人口（通勤・通学者）
調査手法	定住人口 <ul style="list-style-type: none"> 紙の調査票あるいはWebによる回答 関係人口 <ul style="list-style-type: none"> まちづくり等団体所属会員企業および市内大学への案内を通してWebによる回答
調査期間	2023年2月
配布数・回答数	紙の調査票の配布数 約8,000 有効回答数 918

出所：URC作成

表6 アンケート構造

アンケートの構造		回答方法	想定する成果
1.ウェルビーイングについて			
日々の幸せを感じる時・こと	自由記述（100字以内）	● ウェルビーイングの定義	
上記の問いにおいて最も理想の状態を10とした現状の平均（現状と5年後）	0-10の11段階評価		
今後、人生をより充実させるもの・こと	自由記述（100字以内）		
2.生活における実感			
余暇時間、相談相手、楽観性、健康等	はい、どちらかと言えば「はい」、どちらかと言えば「いいえ」、いいえ、わからないの5つから選択	● ウェルビーイングの現状評価	
3.属性			
性別、年代、世帯構成、子どもの年齢、居住形態、職業、住まいの地域・環境等	それぞれの選択肢から選択	● 価値観、行動、ウェルビーイングの影響要因	

出所：URC作成

表 7 生活に関する実感質問項目

質問	略称
2-1 平日 1 日あたりの余暇時間* (※睡眠、労働、食事、家事等の生活を営む上で必要となる時間を除いた時間)	1 日あたり余暇時間
2-2 1 つ前の問いにおいて回答した余暇時間は、十分だと感じる	余暇時間は十分
2-3 困ったときに相談する相手がいる	相談相手がいる
2-4 自分は楽観的*な性格である (※物事を良い方向に考えて心配しない)	楽観的な性格
2-5 健康である	健康である
2-6 住まいは快適で、安全・安心であると感じる	住まいは快適
2-7 必要な収入を得られている	必要な収入がある
2-8 日常の主な活動*に満足している (※仕事・学業・家事・地域活動ほか)	日常の主活動に満足
2-9 日常の主な活動*の他に関心事やチャレンジしていることがある (※仕事・学業・家事・地域活動ほか)	チャレンジしている
2-10 日々の社会生活および人生の転機において、自分にはさまざまな機会・自由な選択肢がある	機会・選択肢がある
2-11 日々の生活において居場所(心を休められる・いてもいいと思える環境)があると感じる	居場所がある
2-12 お住まいの地域とつながりがあると感じる	地域とつながりがある
2-13 他の人のさまざまな価値観や意見を尊重する	価値観や意見を尊重する
2-14 困っている人がいたら助けようとする	困っている人を助ける

出所：URC 作成

「ウェルビーイングの現状評価」(以降、ウェルビーイング評価)は、国連の世界幸福度レポート(World Happiness Report : WHR) など多くの調査で採用されている、キャントリルのはしご(Cantril Ladder)と呼ばれる 0 から 10 までの 11 段階で評価する手法を用いた。

「ウェルビーイングの影響要因」については、属性に加え、既往研究や過去の調査結果によって明らかとなっている因子を抽出し、「生活に関する実感」として質問項目に加えた(表 7)。生活満足度調査で一般に聞かれる、健康状態や収入、住環境に関する質問に加え、ウェルビーイング特有の因子も含めた。例えば、従来、欧米を中心に研究が進んできた自己実現や自尊心の高さなどがある。また、こうした競争の中で獲得する幸福(獲得系)への偏重傾向が指摘されてきたことから、日本を含むアジア的な考えとして、他者との関係性や他者のための行為など、他者との協調のなかにウェルビーイングが存在するという「協調系」の因子⁽⁵¹⁾も加えている。これを受

け、WHR2022 では、バランス・調和に関する調査として、バランスの取れた人生、安らぎ、平穏さ、他者への思いやりなどの因子が新たに採用された^(52,53)。

また、イングルハートらが実施する、過去 40 年にわたり人々の価値観の変化を捉えてきた世界価値観調査によると、経済発展がウェルビーイングに影響を与える第一のステージと、民主化や社会的寛容のウェルビーイングへの影響が強まる第 2 のステージがあるという⁽⁵⁴⁾。近代化による経済発展が一定のポイントに到達すると、ウェルビーイングへの影響は限定的となり、非経済的な側面(社会的寛容や個人の選択の自由など)の影響が強まる。言い換えれば、物質的な価値観から脱物質的な価値観への転換が見られると言える。

こうした流れを受け、当該調査においても、「チャレンジしている」などの獲得系の項目に加え、協調系の因子として、「相談相手がいる」、「地域とつながりがある」「困っている人を助ける」などの項目を組み込んでいる。

3.2. 基本属性

表 5 の通り、福岡市に住む・関わる人を対象に、市内在住者および市外から通勤・通学している人々にアンケートを周知し、回答への協力を呼びかけた。有効回答数は 918 であり、福岡市民が 85.6%、市外在住者が 14.3% であった。回答者の属性は、20-40 代が全体の約 6 割を占め、男女比はほぼ同等であった（表 8）。福岡市の昼夜間人口比率（108.8%）から見ると⁽⁵⁵⁾、市外在住者の比率は若干高いが必要数に達しており、男女比・年代比も大きなばらつきは見られない。

なお、今回の調査では回答方法を従来の紙の調査票だけでなく、オンライン上の回答フォーム（Web フォーム・EXCEL ファイル）も作成し、紙の調査票に当該 Web フォームの URL および二次元バーコードを掲載したところ、全体（n=918）のおよそ 7 割の回答者がオンラインで回答を行った（図 15）。また、どのように今回のアンケートのことを知ったかを尋ねた質問（複数回答可）ごとの回答方法をみると、メールやホームページ等オンラインの案内で認知した回答者のほとんどがオンラインで回答したのに対し、紙の調査票のポスティングや広報紙等紙媒体で認知した回答者の約半数が紙の調査票で回答を行っていることが分かった（図 17）。年齢別で見ると、若い世代ほどオンラインでの回答割合が高く、年代が上がるにつれ紙での回答割合が増えた。60 代では紙が若干多いものの紙とオンラインが約半数ずつとなり、70 代では 8 割、80 代以上では 9 割を超える回答者が紙で回答した（図 18）。若者の意見を把握するためには、オンライン上の回答フォームの設置は欠かせないのではないかと考えられる。

図 15 回答方法（全体）

出所：URC 作成

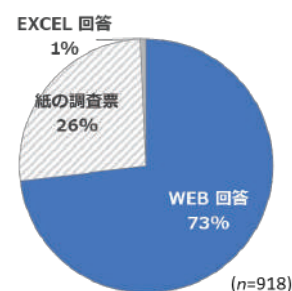


表 8 回答者の属性（年代・性別）

年齢区分	合計	構成比	女性	男性	回答しない	無回答
10代	29	3.2%	19	7	3	0
20代	198	21.6%	123	70	5	0
30代	162	17.6%	93	67	2	0
40代	189	20.6%	103	83	3	0
50代	152	16.6%	74	76	2	0
60代	104	11.3%	37	67	0	0
70代	53	5.8%	24	29	0	0
80代以上	29	3.2%	11	16	1	1
無回答	2	0.2%	0	1	0	1
合計	918		484	416	16	2

出所：URC 作成

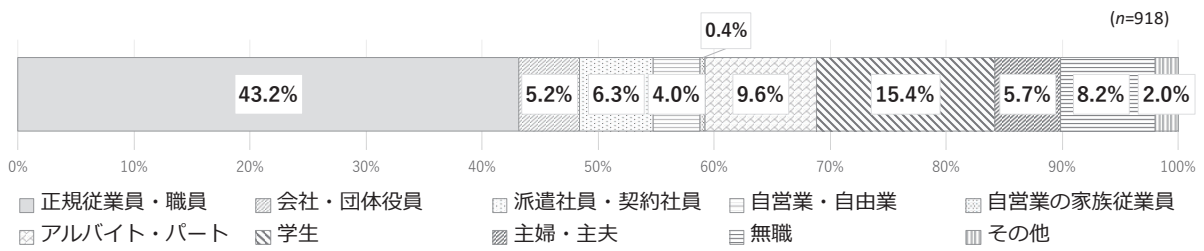


図 16 アンケート調査有効回答数の内訳（職業別）

出所：URC 作成

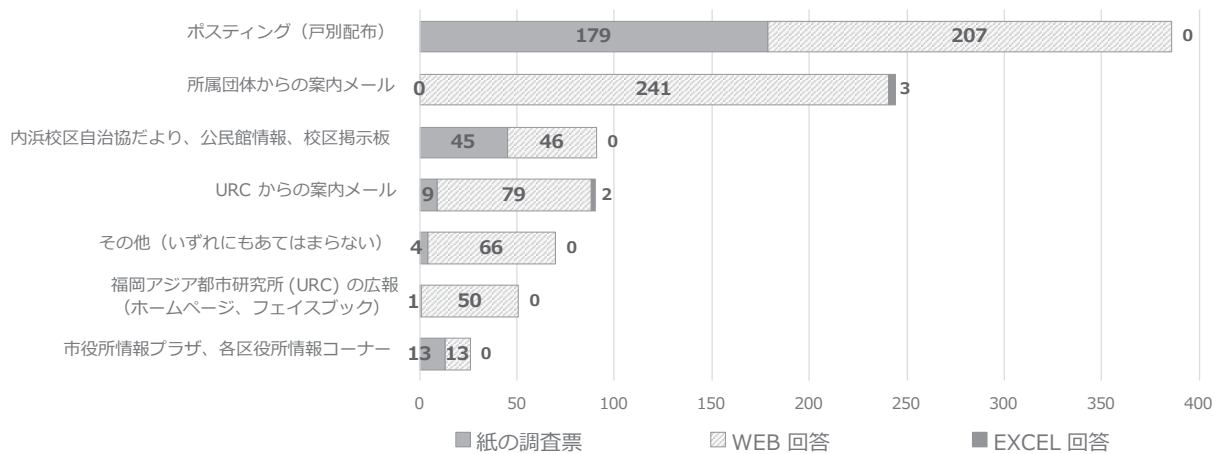


図 17 アンケート調査認知経路別回答方法

出所：URC 作成

注：認知経路の回答は複数選択可

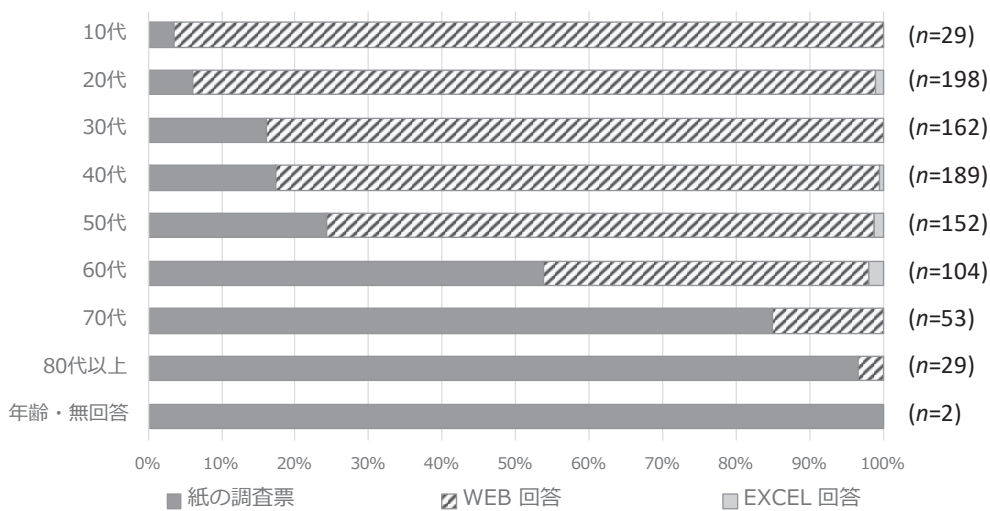


図 18 年齢別回答方法の割合

出所：URC 作成

3.3. ウェルビーイング評価

3.3.1. 全体および男女別評価

ウェルビーイング評価の平均値を見ると、現在値の6.87と比較し、5年後は7.09と上昇し、スコア別分布からも8-10の評価者の割合の増加が確認される(図19)。

一方で、男女別の現在と5年後の平均値を見ると、両者共に上昇傾向にあるものの、女性の上昇割合が小さい(図22)。また、男女別・スコア別の増減率を見ると、

高評価層(ウェルビーイングスコア7-10)が増加し、低評価層(ウェルビーイングスコア0-3)が減少する一方で、一部、女性の低評価層の割合が6.22%から8.32%へと増加している(図21)。

なお、ウェルビーイング評価については、国によって性差が見られることがわかっており、日本は、女性の値が男性の値より高く、その差が世界的に見ても最も大きいという特徴がある⁽⁵⁶⁾。本調査においても、女性の方が、現在・5年後ともに男性より平均値が高い(図20)。しかし、先述の通り、女性の5年後の上昇率が鈍化していることは注視する必要があるだろう。

女性の低評価層はサンプル数が限定的であったことから、全体における高評価層(現在値)と低評価層に分類し、傾向の違いを確認した。その結果、低評価層の「生活における実感」項目の評価を見ると、高評価層の傾向と比べて、「相談相手がいる」、「健康である」、「必要な収

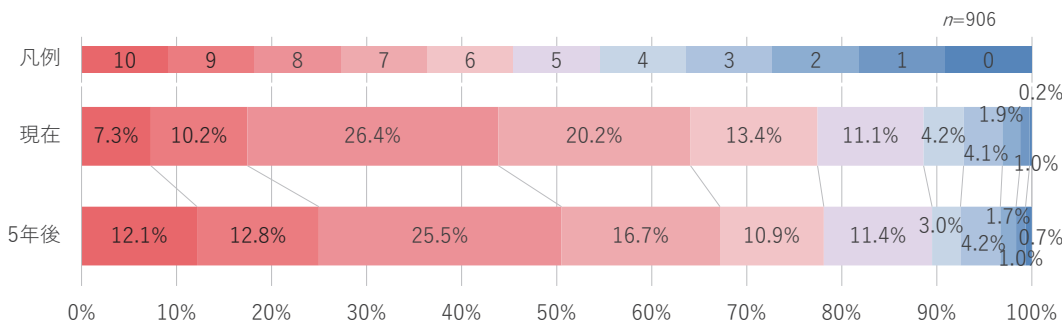


図19 ウェルビーイング評価のスコア別分布

出所：URC 作成

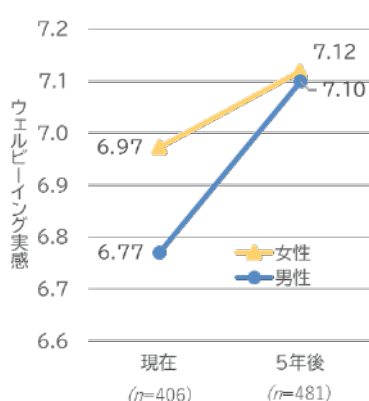


図20 男女別ウェルビーイング評価(平均値) 現在

出所：URC 作成

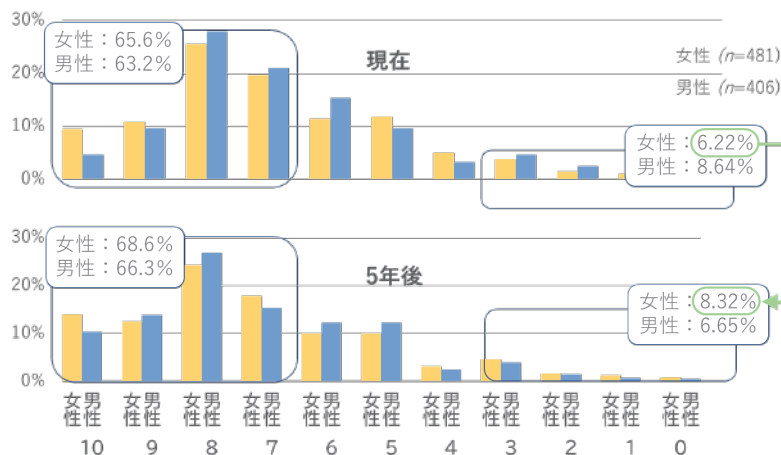


図21 男女別ウェルビーイングスコア別分布

出所：URC 作成

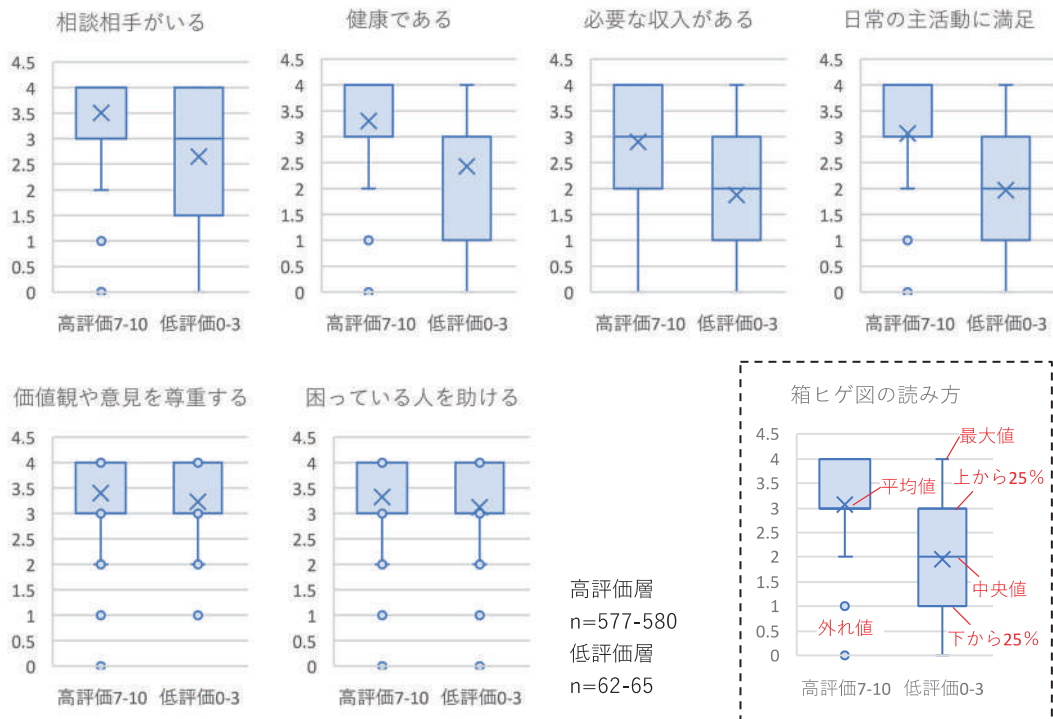


図 22 ウェルビーイングの高評価・低評価層の比較

出所：URC 作成

入がある」、「日常の主活動に満足」等の項目において特に否定的回答が多いことがわかった（図 22）。対して、「価値観や意見を尊重する」、「困っている人を助ける」においては、ほとんど差が見られない。こうしたことから、低評価層の課題が特に、上記 4 項目に顕著に見られることがわかる。全体の傾向としては現在よりも 5 年後評価が高いが、女性の低評価層の増加も確認されるなど、二極化の可能性について検討すべきであろう。

今回の調査では、低評価層のサンプル数が少ないため、より大規模な調査において、低評価層の現状やウェルビーイングに影響を与える要因分析を行い、効果的な政策形成につなげることが必要であろう。

また、分析および図表の表現方法として、平均値以外の提示の重要性が確認できた。平均値では、マジョリティ（多数派）の傾向がわかりやすく示されるが、マイノリティ（少数派）の傾向は把握しづらい。スコア別分析を行うことで、今後の分析手法としても一つのヒントとなりうる。

3.3.2. 年代別評価

男女別に加え、年代別のウェルビーイング評価 (図 23) でも興味深い傾向が見られた。

年代別に、現在と5年後の平均値を取ると、70-80代は現在のウェルビーイングスコアが高く、5年後に大きく下降する。一方で、10-40代は、現在評価が低く、5年後評価で上昇する。特に30代の5年後評価の上昇率が大きい。50-60代は、現在評価が低く、5年後にさらに下降する傾向が見られる。50-60代の傾向については、影響要因と併せて、3.5でさらに考察を加える。

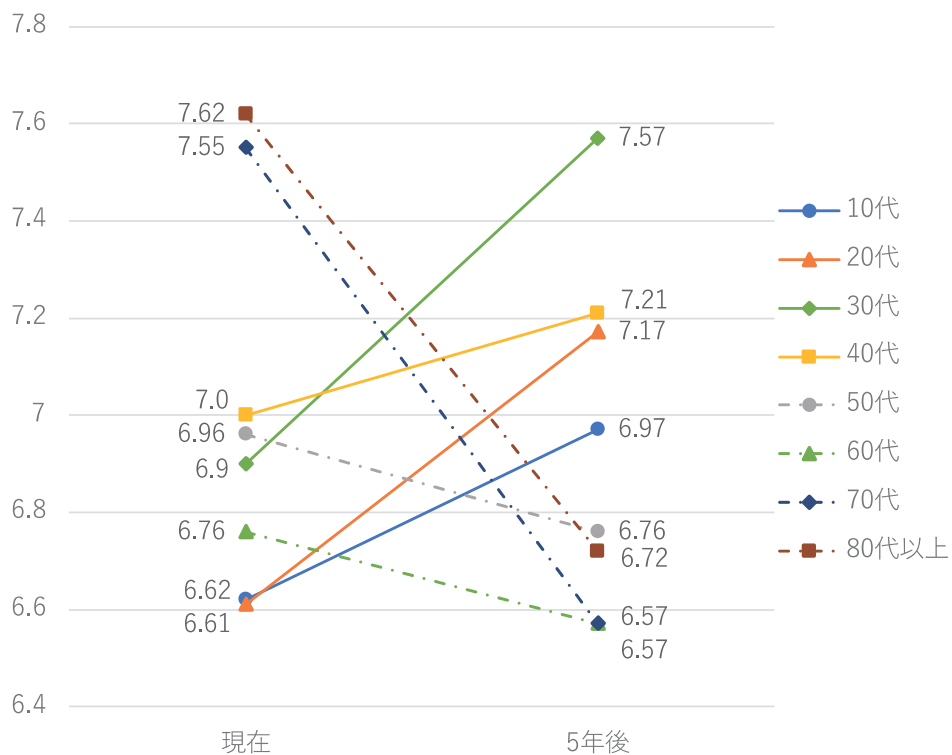


図 23 年代別ウェルビーイング評価 (平均値)

出所：URC 作成

3.4. 自由記述のテキスト分析

ウェルビーイングの捉え方については、表 6 で示したように、「あなたが日々の暮らしにおいて幸せと感じるのはどういうとき（どのようなこと）ですか？100 字以内で自由にお答えください。」（以下、「日々の幸せ」と、「今後、あなたの人生をより充実させるものは何ですか？（もの・こと、機会、環境など）100 字以内で自由にお答えください。」（以下、「より充実させるもの」）の 2 段階の設問を設定し、自由記述による回答を必須項目として求めた。

自由記述データの分析には、計量テキスト分析ツール「KH Coder（Version 3.Beta.07b）」の利用に加え、分析者による内容確認を行った。KH Coder とは、「計量テキスト分析またはテキストマイニングのためのフリーソ

フトウェア（自由ソフトウェア）」⁽⁵⁷⁾であり、アンケートの自由回答データやインタビュー記録といった社会調査データや、マス・メディアの報道内容、ソーシャルメディアでの発信内容、会議録の分析などに活用されている⁽⁵⁸⁾。

本研究では、KH Coder に備わる機能のうち、頻出ワードの一覧を出力できる「抽出語リスト」コマンド、特定の抽出語の前後にどのような語が使われているかを目視できる「KWIC コンコーダンス」やその出現頻度を示す「コロケーション統計」コマンド、特定の語と文内で共に出現する語の関係の強さを示す「共起ネットワーク」コマンドなどを活用した。そして、特定の事柄に言及している回答と言及していない回答を分類し、どのような属性、状況の回答者が言及しているか、またどのような文脈で言及されているかなどの解釈を試みた。なお、自由記述データには、意味が同じで表記や言い方が異なる言葉が含まれていたため、KH Coder を用いる前のデータクリーニング（調査の精度を高める目的で行う誤字脱字の修正など）の段階で表 9、表 10 のように改変した。

まず、KH Coder の「抽出語リスト」コマンドを用いて、「日々の幸せ」と「より充実させるもの」の自由記述

表 9 「日々の幸せ」の回答データで改変した言葉

改変前	改変後
おいしい、美味い	美味しい
すごす、すごし	過ごす、過ごし
ご飯、食べ物、ごはん	食事
友達、友だち	友人
子供、こども、息子、娘	子ども
(天気が、仲が) いい、(心地、より) よい	(天気が、仲が、心地、より) 良い
金銭、資金、生活資金、金	お金
あったかい、温かい、暖かい	あたたかい
つながり	繋がり
つながる	繋がる
つながって	繋がって
ねこ	猫
ねがお	寝顔
たべ	食べ
ふれ	触れ
ふとん	布団
私生活	プライベート
休みの日、休み	休日
ねる	寝る

出所：URC 作成

表 10 「より充実させるもの」の回答データで改変した言葉

改変前	改変後
おいしい	美味しい
すごす、すごし	過ごす、過ごし
ご飯、食べ物	食事
友達	友人
子供、こども、息子、娘	子ども
(天気が、仲が) いい、(心地、より) よい	(天気が、仲が、心地、より) 良い
金銭、資金、生活資金、財力、金	お金
つながり	繋がり
つながる	繋がる
つながって	繋がって
ライフワークバランス	ワークライフバランス
私生活	プライベート
休みの日、休み	休日

出所：URC 作成

データの頻出語のうち上位 30 語とその出現頻度（回答の数）をそれぞれ表 11 と表 12 に示す。「日々の幸せ」として、「家族」「美味しいもの」「食事」「時間」などが頻出する名詞の上位に挙がった。「より充実させるもの」では、「仕事」「家族」「健康」「お金」などが上位に挙がった。

次に、KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを用いて、出現パターンの似ている語（文内で一緒に出現する語）のうち頻度の強い語同士を線で結んだネットワーク図を、「日々の幸せ」を図 24 に、「より充実させるもの」を図 25 に示す。丸いバブルのサイズは出現頻度の多さを示している。

「日々の幸せ」として、家族（や友人、子ども）と楽しく過ごすとき、美味しいものを食べているとき、家族の健康の記述が多くみられた。「より充実させるもの」として、「日々の幸せ」と同様に、家族との時間や家族の健康の記述が多くみられた。また、仕事の機会ややりがい、金銭的な余裕、子どもの成長の記述も多くみられた。

「日々の幸せ」と「より充実させるもの」の頻出語を年齢グループ別にみると、年代ごとに変化していることが分かる（図 26）。「日々の幸せ」と「より充実させるもの」の上位頻出語の頻度（回答数）を合計し、頻度上位 3 つの頻出する名詞（同位の場合は 4 つ）を下線付き赤字で示している。10-20 代は、他の年代にはみられない「友人」「自分」「人」という言葉が上位にランクインしている。これは、青年期の自己形成に友人関係が大きな意味を持つという特徴⁽⁵⁹⁾と類似する。30-40 代は、子育て期間中の人が多いことが考えられ、「家族」「子ども」「仕事」が多く言及されている。50-60 代では、子どもが巣立つ時期と考えられ、「家族」「仕事」「健康」が多く言及されている。70-80 代以上になると、「健康」「生活」「孫」が多く言及されている。

表 11 「日々の幸せ」に関する自由記述における頻出語

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	する	324	11	健康	102	21	生活	60
2	家族	292	12	幸せ	94	22	いる	57
3	食べる	212	13	友人	93	23	見る	47
4	美味しい	188	14	仕事	84	24	ない	46
5	食事	168	15	ない	81	25	趣味	43
6	過ごす	126	16	自分	81	26	過ごせる	42
7	感じる	125	17	人	79	27	楽しい	41
8	時間	112	18	一緒	72	28	日々	41
9	できる	107	19	ある	68	29	笑顔	39
10	子ども	104	20	好き	67	30	寝る	39

出所： KH Coder を利用して URC 作成

表 12 「より充実させるもの」に関する自由記述における頻出語

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	する	292	11	人	102	21	友人	52
2	仕事	145	12	ある	94	22	旅行	51
3	家族	137	13	ない	81	23	社会	41
4	健康	136	14	充実	80	24	収入	40
5	お金	129	15	思う	76	25	安定	38
6	環境	127	16	生活	76	26	好き	37
7	できる	117	17	趣味	73	27	関係	36
8	子ども	114	18	成長	70	28	今	35
9	自分	114	19	なる	68	29	自由	33
10	時間	105	20	ない	53	30	ぬ	32

出所： KH Coder を利用して URC 作成

まず、「仕事」の内容を確認する。回答者毎の「日々の幸せ」の回答と「より充実させるもの」の回答を一つの文書として統合した上で、「仕事」「会社」「組織」に言及している回答および文脈から「仕事」に関連する内容と判断できる回答を対象に、KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを用いて、出現頻度の多い語や、一つの文内で共に出現する語同士の関係を示した(図 28)。「仕事」・「環境」・「充実」・「人生」・「収入」・「安定」・「目標」・「達成」・「経済」・「余裕」・「不安」・「人間」・「関係」などの語が共起している。

次に、KH Coder の「KWIC コンコーダンス」と「コロケーション統計」コマンドを用いて、「仕事」の文脈を確認し、分類を行った(表 13)。文脈は多岐に渡り、「仕事があること」、「仕事ができる状況(環境)であること」がウェルビーイングであると考えられる人がいる一方で、「仕事をしていない時間」や「仕事とプライベートの充実(ワーク・ライフ・バランス)」を重視する人もいる。また、「仕事にやりがいを感じる時」や、「評価された時」、「チャレンジできる環境にある時」など、仕事の中身に意義を感じる人がいることも分かった。さらに、「人間関係」や「雇用条件」などの労働環境への言及も見られた。

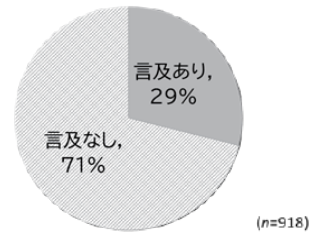


図 27 自由記述で「仕事」に言及した回答者の割合

出所：URC 作成

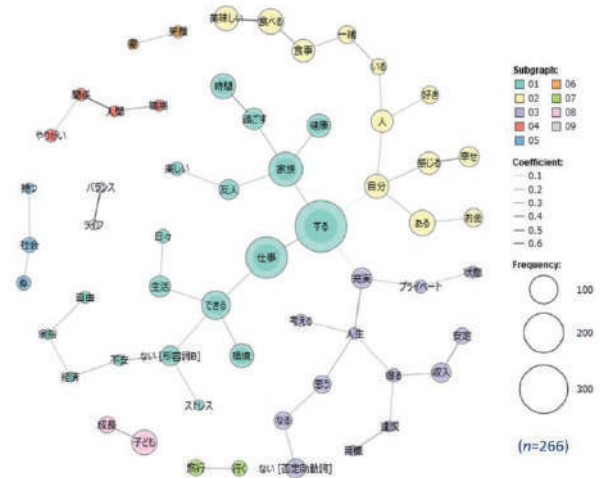


図 28 自由記述で「仕事」に言及している回答の共起ネットワーク

出所：KH Coder を利用して URC 作成

表 13 「仕事」に言及している文脈の分類と回答例

分類	回答例（抜粋、一部要約）
仕事の有無	「仕事があり、お金があり…」
	「健康で仕事ができること」
	「仕事が続けられること」
経済的安心	「仕事が安定し、金銭的な不安がないこと」
	「安定した収入を得られる仕事」
やりがい・充実	「やりがいのある仕事できた時」
	「仕事が充実している時」
	「仕事に熱中している時」
	「仕事で達成感を得られた時」
評価	「仕事で上司から認められた時」
	「仕事で信頼を得られた時」
社会参加	「仕事で社会の役に立つ」
	「仕事を通して社会との接点を保持し、責任感や自己有用感を持ち続けられること」
チャレンジ	「仕事とプライベートにメリハリを付け、成長できる環境」
	「仕事やプライベートでもチャレンジできる環境」
	「様々な環境での仕事の経験」
	「仕事や趣味を通じた経験」
人間関係・労働環境	「やりがいがあり、人間関係が良好な職場環境」
	「仕事環境が良くなること」
	「人間関係が良好で適切に賃金が支払われる職場環境」
	「自由に働ける環境と身体」
	「育児をしながらも正社員で働ける環境」
	「仕事と育児がストレスなく両立できる環境」
ワーク・ライフ・バランス	「仕事と家庭の充実」
	「仕事とプライベートの時間のバランス」
余暇時間	「仕事終わりに美味しいもの」
	「仕事から解放されている時」

出所： KH Coder を利用して URC 作成

続いて、どのような人が「仕事」に言及しているのかを確認する。図 29 は、自由記述で「仕事」に言及しているのか、職業別、性別の回答者数と、その属性ごとの「仕事」に言及している人の割合を示す。男女ともに、

「正規従業員・職員」は全体の割合と同様に 3 割が、「自営業・自由業」は過半数が、「仕事」に言及している。また、働いていない人も「仕事」に言及しており、「主婦（n=48）」は 21% が言及し、仕事を通じた「社会との接

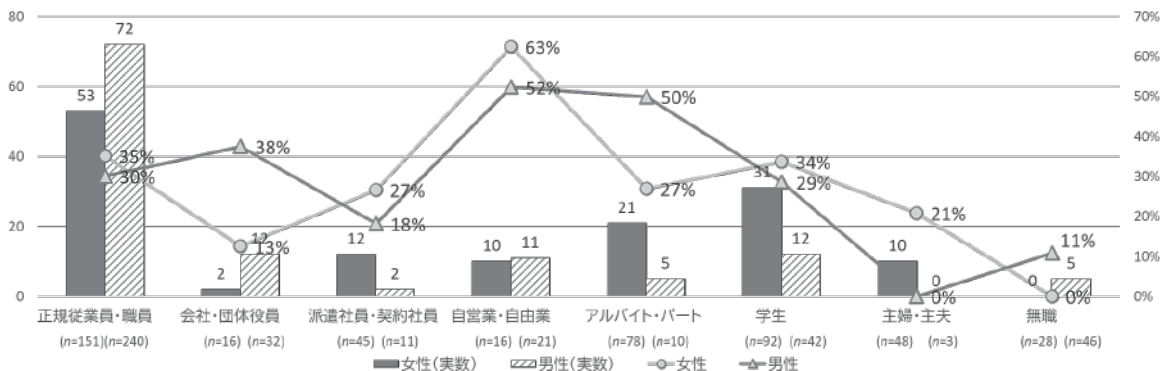


図 29 「仕事」に言及する回答者の職業別性別の回答数と割合

出所： URC 作成

注：「日々の幸せ」と「より充実させるもの」についての自由記述の回答を統合し、「仕事」関係として「仕事」「会社」「組織」への言及に加え、仕事の文脈を含む回答を対象に分析。

点「居場所」「育児との両立」「仕事復帰」といった記述がみられる。「学生」も約3割が「仕事」に言及しており、「アルバイトでの経験」を通じた仕事のやりがいや評価だけでなく、将来的な「就職後の生活」への不安や希望に関する記述がみられた。

また、自由記述「より充実させるもの」の回答には、「お金」への言及も多くみられた(表12)。「お金」は、10-20代の「より充実させるもの」の抽出語リスト(図26)でトップとなった語であり、10-20代(n=227)のうち約6割が学生である。そこで、「仕事」に限らず、「仕事」または「お金」に言及している学生(n=63)の回答を対象に、KH Coderの「KWIC コンコーダンス」と「コロケーション統計」コマンドを用いて文脈を確認し、分類を行った(表14)。好きな仕事、希望の就職先、といった仕事の選択肢があることや、仕事の中身に対し、やりがいや達成感を感じられるかどうか、そして、仕事を通じて評価されることや収入を得ることなどが意識されている。また回答には、「働いても自分のタイミングで…」や「自分の時間は持たなくなっても…」といった、仕事によって時間的制約を受けることになっても、プライベートを大切に「ワーク・ライフ・バランス」を意識した記述がみられた。

次に、0-12歳の子どもを持つ女性(n=124)、0-12歳の子どもを持つ男性(n=115)、子どものいない女性(n=238)、子どものいない男性(n=147)が、自由記述「日々の幸せ」、「より充実させるもの」の回答のいずれかまたは両方において、「仕事」に言及している回答者のそれぞれの属性ごとの割合を比較した(図30)。そして、これら「仕事」に言及する人のうち、「育児」にも言及する回答者のそれぞれの属性ごとの割合を比較したところ(図31)、21%の子どもを持つ女性が「育児」に言及しているのに対し、同じく子どもを持つ男性は2%しか言及しておらず、子育て中の男女間における意識の差が表れた。

「仕事」に言及する女性が「育児」に言及する回答には、正社員で働いていても育児中は無理なく働ける環境、子育てを終え働ける環境、仕事と育児がストレスなく両立できる環境、育児をしながらも仕事を持って自分の社会的な居場所があること、などがみられた。

今回のアンケート調査では、平日1日あたりの余暇時間(睡眠、労働、食事、家事等の生活を営む上で必要となる時間を除く)と、その余暇時間が十分だと感じるか

表14 「仕事」「お金」に言及している学生による自由記述の文脈の分類と回答例

分類	回答例(抜粋、一部要約)
選択肢	「好きな仕事」「自分のしたいお仕事」「目指す職についていること」「希望の就職先につくこと」「自分の人生がはっきり見えたときにもっと幸せになれる」
やりがい・チャレンジ	「やりがいのある仕事をする事ができれば、人生が充実になる」「仕事でのやりがい」「不安なく起業できたり、キャリアアップのための転職ができたりすることそしてそれが保障される環境があること」「福岡に住んでいても、東京や大阪と同じくらいの仕事の機会があること。特にクリエイティブ職や研究・開発職の求人」「仕事や趣味におけるよい巡り合わせ、自分の力を発揮できる機会」「自由な環境で新しいことや誰も取り組んだことのない課題に挑戦できること」「程よい責任感、ストレスを感じる事ができる仕事とその仕事を通して得られる達成感」
評価	「就職先での評価」「ちゃんとした就職先で、自分の実力を発揮して、社会や他者に認めてもらうこと」「自分が社会に必要とされていると感じれる体験や瞬間」
収入	「働くことによってお金を得て、自分の夢である海外へ行く」「人間らしく生きることのできる収入や環境」「お金の環境の面で制約を受けない」「職場で給料をだんだん上げること」
安定	「安定した仕事」「就職して安定を得ること」
人間関係	「精神的負担が少ない環境で好きな仕事をする事」「人間関係に気を使い過ぎずに済む仕事環境」「尊敬できる人に囲まれる環境」
時間	「働いていても自分のタイミングでプライベートを充実させられること」「趣味をより満喫するのに必要なお金と時間」「安定した収入と休日のある仕事」「自分の時間は持たなくなっても収入を得ることができるようになり、欲しい物を買うことで心や人生を満たし充実させる」

出所：KH Coderを利用してURC作成

注：「日々の幸せ」と「より充実させるもの」についての自由記述の回答を統合し、「仕事」に言及は、「仕事」「会社」「組織」への言及に加え、仕事の文脈を含む。「お金」に言及は、「お金」「収入」「給料」「賃金」「昇給」「資産」に言及を含む。

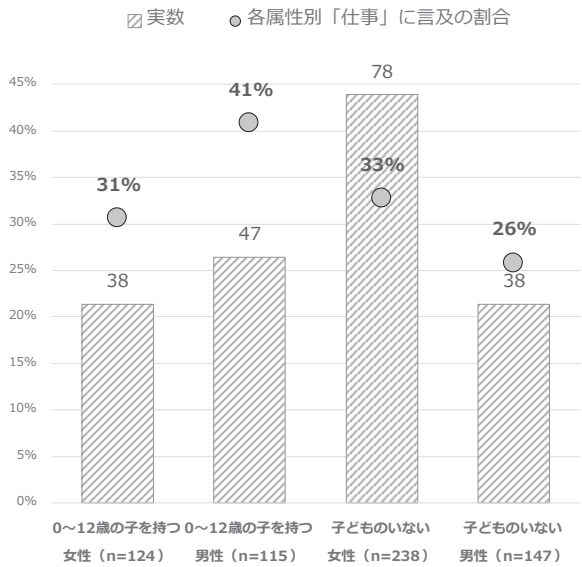


図 30 「仕事」に言及する回答者の傾向（子どもの有無別・性別）

出所：URC 作成

を尋ねた。男女別に余暇時間とその余暇時間への満足度をみると（図 32）、男女とも「2 時間」の余暇時間が最も多いが、満足している人は半数もいない。余暇時間が「2 時間未満」で満足している回答者は 20%を切る。男女ともに 8 割以上が満足するのは余暇時間が「5 時間以上」の回答者であるが、過半数が満足する余暇時間は男女で異なる。女性は「2 時間」で満足する人が 32%と限定的であるが、「3 時間」になると 66%と過半数が満足と感じている。女性の回答には、この 1 時間の余暇時間に

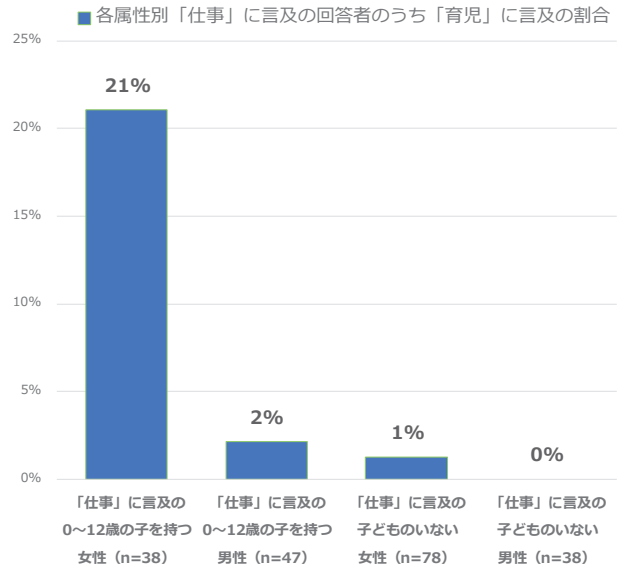


図 31 「仕事」に言及する回答者のうち「育児」に言及する回答者の傾向（子どもの有無別・性別）

出所：URC 作成

差がみられたのに対し、男性は「2 時間」で 45%が満足、「3 時間」で 54%が満足、「4 時間」で 53%が満足と、「4 時間」でも十分だと感じない人が半数近くいることが分かった。

全体的に、余暇時間が十分でないと感じる人が多い一方で、「時間」は「日々の幸せ」および「より充実させるもの」の頻出語の上位 10 語に含まれており（表 11、表 12）、関心の高い回答者が多い。「時間」に言及している「日々の幸せ」の回答例として、家族とゆっくりした時

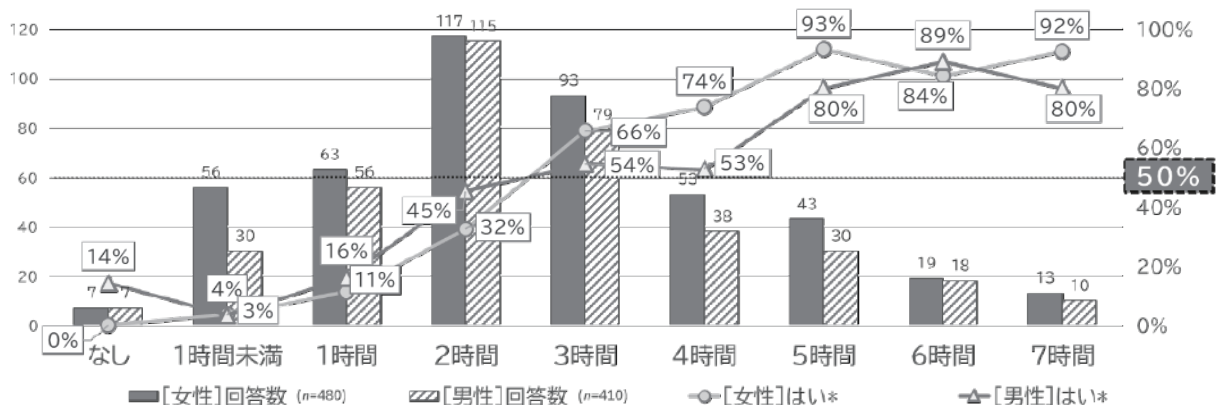


図 32 余暇時間に満足している人の割合（性別）

出所：URC 作成

注：「回答者が答えた『平日 1 日あたりの余暇時間』は十分だと感じるか」の問いに対する回答。「はい」は「どちらかと言えば「はい」」を含む。「いいえ」は「どちらかと言えば「いいえ」」を含む。回答数合計に空白の回答は含まない。

間、穏やかな時間、趣味の時間、仕事とプライベートの時間のバランスが取れている状態、自分の時間、があった。「より充実させるもの」の回答例として、自由な時間、時間の余裕、家族・友人との時間、があった。余暇時間は満たされていないものの、ワーク・ライフ・バランスが重視されていると捉えることができる。

「育児」への言及の男女差（図 31）から、女性は男性同様に「仕事」を意識しながら、男性よりも「育児」を意識する立場にあることが考えられる。周が、これまでの日本の女性について、「妊娠・出産を機にキャリアの主戦場から離れ、子育てがひと段落してから、パートとして再就職する専業主婦型のライフスタイルを選ぶことが多かった」と分析している通り⁽⁶¹⁾、育児や家事の主な担い手が女性となっている状況があり、令和2年度版男女共同参画白書⁽⁶²⁾においても「家事・育児・介護」の負担が女性に偏っていることが改善されていないことが指摘されている。余暇時間への満足度の男女差（図 32）は、女性が短い余暇時間で満足しているというわけではなく、家事や育児に追われる女性が実質的に限られた余暇時間を受け入れざるを得ない状況があるとも考えられる。女性の活躍推進の観点では、子育て中の働く女性の離職防止や専業主婦のフルタイム職場への復帰を推進する必要があり、そのためには、仕事を続けながらストレスなく育児が行える環境の整備が、職場でも家庭でも求められる。

また、自由記述において全体的に「時間」への言及が多くあり、仕事とプライベートの充実や休日の確保など、「ワーク・ライフ・バランス」は、働く人に限らず学生も意識していることが分かった。次代を担う学生が「仕事」に対して抱く期待や不安は、学生の地域定着を促進する上でも理解を深める必要があり、「ワーク・ライフ・バランス」の実現は方策の一つであると考えられる。

3.5. 統計分析による影響要因の把握

ここからはウェルビーイングに影響を与える因子（以降、ウェルビーイングの影響要因）について行った分析を報告する。なお、分析には、IBM SPSS Statistics 29.0.1.0を用いた。

全体を対象とした結果では、「生活における実感」として提示した全ての項目とウェルビーイングに有意な相関があることがわかった（ただし、「1日あたり余暇時間」と「余暇時間は十分」の2つの説明変数間の相関が強いことから前者を削除）（表15）。これは、アンケートの設計時に、過去の研究でウェルビーイングへの影響が証明されている項目を網羅的に選出しているため必然とも言えるが、後述する通り、属性別やウェルビーイングのスコア別に見ると、有意に出る項目が限定されたり、影響度が異なったりすることがわかる。

表 15 ウェルビーイング評価と生活における実感の相関

項目	現在 WB	5年後 WB
余暇時間は十分	.174**	.107**
相談相手がいる	.343**	.308**
楽観的な性格	.218**	.246**
健康である	.301**	.292**
住まいは快適	.278**	.244**
必要な収入がある	.314**	.245**
日常の主活動に満足	.435**	.317**
チャレンジしている	.191**	.184**
機会・選択肢がある	.240**	.276**
居場所がある	.365**	.305**
地域とつながりがある	.206**	.115**
価値観や意見を尊重する	.126**	.141**
困っている人を助ける	.099**	.115**

現在 $p < .005$, 5年後 $p < .001$

出所：URC作成

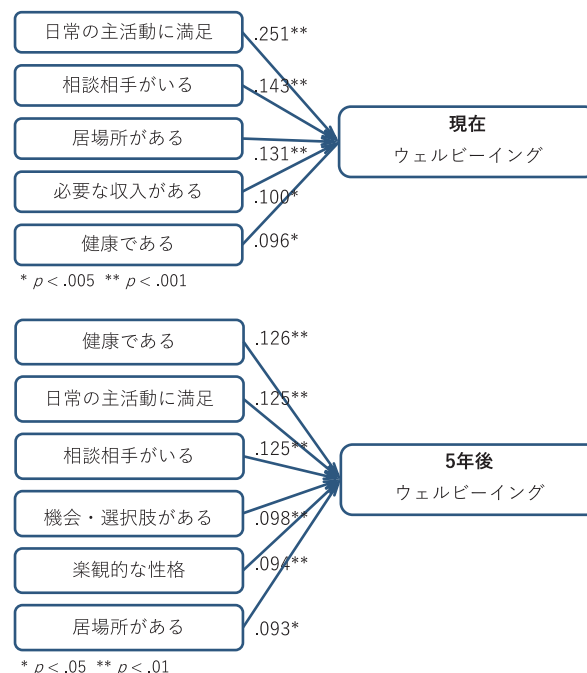


図 33 ウェルビーイングの影響要因（現在と5年後）

出所：URC作成

重回帰分析の結果を見ると、「日常の主活動に満足」(.251)、「相談相手がいる」(.143)、「居場所がある」(.131)などが現在のウェルビーイングに影響することがわかる（図33）。5年後のウェルビーイングに対しては、「健康である」(.126)、「日常の主活動に満足」(.125)、「相談相手がいる」(.125)が同程度の影響度を持つ。「日常の主活動の満足」は、現在・5年後いずれにおいても重要な因子となっている。

「必要な収入がある」は、現在の因子として含まれるが、5年後には見られない。「住まいは快適」は、現在・5年後のいずれにも見られない。これまで生活満足度評価で用いられてきたこれらの因子が、ウェルビーイングの影響要因として弱まりを見せていると言える。これに加え、5年後評価に対して「機会・選択肢がある」の影響が見られる。こうした結果は、第1章で述べた、物質的価値観から脱物質的価値観への転換が、今回のサンプルにおいても示唆されているのではないだろうか。年代別に見ると、20-60代までの幅広い世代で、「日常の主活動に満足」が最も影響度の高い変数となっていることがわかる（表16）。ここで言う日常の主活動は、属性等から「仕事」が主な活動であることが推測される。

表 16 年代別ウェルビーイングの影響要因

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
余暇時間は十分						0.257		
相談相手がいる	0.355	0.233		0.147		0.267		
健康である			0.176		0.251			
住まいは快適				-0.24			0.443	
必要な収入がある		0.177						
日常の主活動に満足		0.254	0.263	0.382	0.287	0.326		
チャレンジしている							0.383	
居場所がある	0.458		0.219	0.283				0.513
地域とつながりがある						0.250		
価値観や意見を尊重する								0.560

p < 0.05

出所：URC 作成

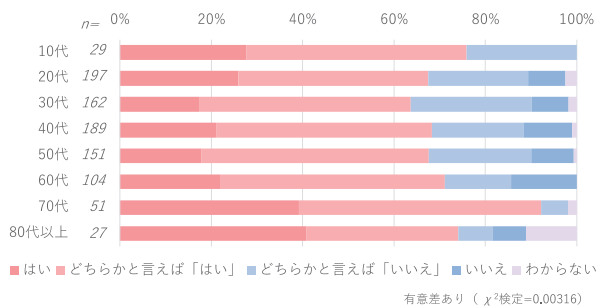


図 34 年代別日常の主活動への満足度

出所：URC 作成

しかし、これら 20-60 代の現役世代の主活動への満足度を見ると他の年代に比べてやや低い (図 34)。

3.3 で述べた通り、一般的に現在より 5 年後のウェルビーイング評価は高まる傾向が確認できるが、一方で低評価層の一部が 5 年後に増加していることがわかった。このことから、ウェルビーイングスコアを 0-3、4-6、7-10 の 3 段階に分け、それぞれのウェルビーイングの影響要因を重回帰分析により確認した (表 17)。

スコア 7-10 の高評価層は、全体の傾向と同じく、日常の主活動への満足がウェルビーイングに影響を与えてい

る。ウェルビーイングスコアの高い層が全体の傾向を牽引している可能性が推測される。

一方で、ウェルビーイングスコア 4-6、0-3 の層では異なる傾向が見られた。スコアの最も低い 0-3 の層は、楽観的な性格であるかどうか現在のウェルビーイングに影響し、5 年後の状況には、相談相手の有無、多様な機会・選択肢の有無が影響を与える。

4-6 の層は、現在評価では、主活動以外にチャレンジしていることがあるかどうかの影響し、困っている人がいたら助けるが負の影響を与えることがわかった。負の影響を正しく解釈することは難しいが、自己犠牲的な一面が表面化していることが一つとして考えられるのではないか。同じく 4-6 の層の 5 年後評価に対しては、健康、主活動以外にチャレンジしていることがある、住まいの快適性などが影響を与えることが示された。現在・5 年後の両評価において、主活動以外のチャレンジしていることが挙げたことは、家と職場以外のサードプレイスとなる活動や居場所の有無が、この層には影響を与えると言えるのではないか。

いずれの層にも、余暇時間、収入、地域とのつながり、価値観の尊重は影響していない。

表 17 スコア別ウェルビーイングの影響要因

ウェルビーイングスコア	0-3		4-6		7-10	
	現在	5年後	現在	5年後	現在	5年後
WB（幸福度）						
相談相手がいる		0.328				0.092
楽観的な性格	0.294					0.124
健康である				0.165		
住まいは快適				0.144		
主活動に満足					0.205	0.095
チャレンジしている			0.191	0.156		
機会・選択肢がある		0.291				
居場所がある					0.159	0.113
困っている人を助ける			-0.16			

p=0.05*

出所： URC 作成

政策の優先順位を見極めるために、満足度と重要度の2軸で測る方法がある。例えば、熊本県の県民総幸福量（AKH：Aggregate Kumamoto Happiness）では、縦軸に施策の重視する順位、横軸に施策への満足度を置き、満足度、順位ともに平均より高い〔領域Ⅰ〕、満足度は平均より低いが、順位は平均より高い〔領域Ⅱ〕、満足度、順位ともに平均より低い〔領域Ⅲ〕、満足度は平均より高いが、順位は平均より低い〔領域Ⅳ〕の4領域を設定し、施策のウェイト付けを行っている。満足度が県の平均値より低くなる領域Ⅱと領域Ⅲにあたる地域や年齢階層に着目し、これらの満足度を高めるための施策を実施していくことが意識される。

ここでは、同様のウェイト付けを本調査の結果に応用し、よりウェルビーイングの実現に効果のある施策の抽出を試みた。

縦軸にウェルビーイングの影響要因それぞれに対する満足度、横軸にウェルビーイングへの影響度として相関係数を置き、相対的な位置付けを見る閾値（の点線部分）として前者は満足度の平均値、後者はウェルビーイングへの相関係数の平均値を置いた（図35）。満足度は、問「生活における実感」の各項目の回答の「はい=2」「どちらかと言えば「はい」=1」「わからない=0」「どちらかと言えば「いいえ」=-1」「いいえ=-2」に置き換えて、全回答者の平均値を算出した。横軸のウェルビーイングへの

影響度は、すべて有意な影響が見られる項目のみを抽出しているため、平均値を取ることが必ずしも正しいわけではないが、より影響度が強い項目（＝政策的な効果が高い項目）を可視化する方法として便宜上平均値をとつ

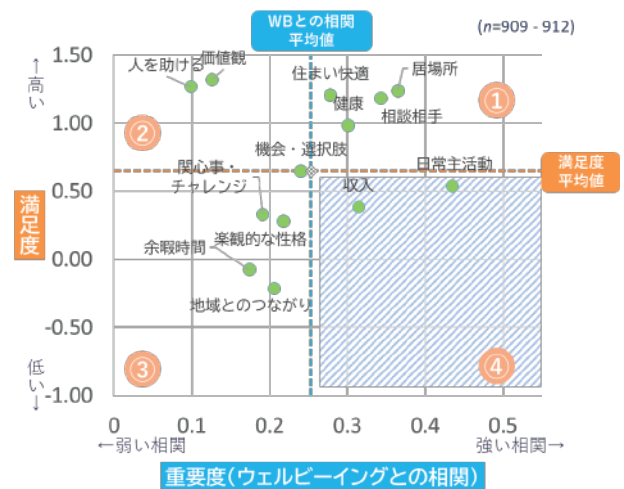


図 35 生活実感の満足度と重要度（ウェルビーイング相関）

出所： URC 作成

た。これは、重要度と満足度の両方を主観的に評価してもらうよりも、回帰分析の結果としてウェルビーイングに対する影響度が科学的に導出された数値を置くことで、客観性を強化するはたらきがある。例えば「地域の安全性」が被験者にとって重要度が低いとしても、被験者はすでに現状の地域の安全性に満足していることで重要性を低く評価している可能性もあり、統計的に見れば「地域の安全性」が担保されていない一部の地域の住民にとっては重要な因子であることも考えられ、単に重要度の平均値を軸に評価するよりも、信頼性が担保できると考えられる。

図 35 の通り、政策のウェイト付けを 4 つの象限で表すことができる。第 1 象限は、ウェルビーイングへの影響が強く、かつ満足度の高い項目群、第 2 象限は、ウェルビーイングへの影響は弱く、満足度が高い項目群、第 3 象限はウェルビーイングへの影響が弱く、満足度が低い項目群、第 4 象限は、ウェルビーイングへの影響が強く、満足度が低い項目群を表す。第 4 象限に位置づけられる項目に関連する施策に、より優先的に取り組むことで、人々のウェルビーイング実現効果が高まると考えられる。

全体の結果を見ると、日常の主活動ならびに収入への満足度がキーとなることがわかる。先述の通り、日常の主活動は幅広い年代層にとってウェルビーイングへの影響度が強いことがわかっているが、特に働く世代の満足度が低いことが明らかとなっていた。つまり、仕事の充実度を高めることでウェルビーイングの実現可能性が高まることを意味する。

3.3 にて、50-60 代は現在のウェルビーイング評価が比較的 low、5 年後評価でさらに下降傾向があることを述べた。この層に対するウェルビーイング政策として何が有効であるかを明らかにするため、先の 4 象限グラフに 50-60 代の特性をプロットした (図 36)。この結果、優先度の高い分野として、日常の主活動、収入への満足度、機会・選択肢の有無、主活動以外の関心事・チャレンジの有無が浮かび上がった。

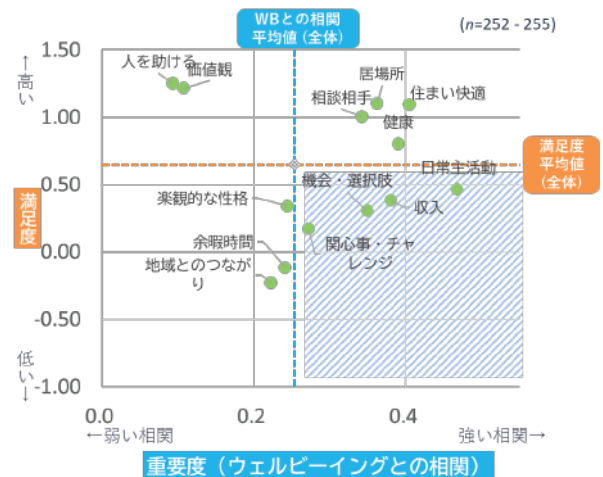


図 36 50-60 代の生活実感の満足度と重要度 (ウェルビーイング相関)

出所：URC 作成

3.6. まとめ

3.6.1. 政策的アプローチ

表 7 で示した生活実感に関する評価のうち、「日常の主活動に満足」がウェルビーイングの影響要因となることが幅広い年代層で確認された。なかでも、現役世代の「日常の主活動」への満足度が特に低い傾向にあり、仕事を中心とする活動の満足度を上げることが重要となる。ただし、政策的手段に落とし込むには、日常の主活動に満足した状態がどのような状態であるかを明らかにする必要がある。

つまり、仕事の満足が一体何を指すのか、必要な因子を模索することが求められる。例えば、「得意なこと」、「好きなこと」、「社会から必要とされていること」、「報酬・収入を得られること」を行うことが生きがいの定義として示されたり⁽⁶³⁾、本調査の自由記述を分析した別の報告では、仕事の有無、経済的安定、自分の仕事が評価されることなどの要素が確認できる⁽⁶⁴⁾。これら因子となりうる項目を体系立てて整理し、今後、関連指標を充実させていくことが有効と考えられる。

また、生活実感に関する評価結果およびウェルビーイングとの相関の結果を 4 象限のグラフで可視化することで、優先的に取り組むべき課題が見えてきた。ウェルビーイング評価が相対的に低い 50-60 代では、「日常の主活動」「収入」「機会・選択肢」「チャレンジ」が、ウェルビーイングと相関が高いが満足度が低いことが明らかとなり、優先的に取り組む必要のある領域として提示した。

局・部・課等の行政的な組織編成のもとに政策形成が行われることを考慮すると、子育て世代の女性、アラカン世代（60 歳前後）、介護従事者など、対象を特定することで、より政策実施の可能性が高まることが考えられる。もちろん、政策形成において、部局を超えた協力体制も必須であるが、特定の対象グループを念頭に、アンケート項目に属性や生活環境条件を組み入れることは、より特定の課題に効果のある政策立案につながると考え

られる。

さらに、ウェルビーイングの現状評価では、評価が 8-10 の回答者が全体の 4 割を占め、5 年後評価で高評価層がさらに増える一方で、女性の低評価層の増加が確認され、二極化の可能性が示唆された。女性のウェルビーイングは、現在・5 年後ともに男性よりも高いが、5 年後の上昇率が限定的であり、中でも女性の低評価層は、生活実感に関する質問の全ての項目で高評価層と比較し否定的回答が多い。とりわけ、相談相手の有無、健康、収入への満足度、日常の主活動への満足度等の項目において差が大きいことが明らかとなった。

以上の結果を総合的に捉えると、追加すべき「指標」の設定、「対象」の想定と絞り込み、「優先課題」の把握を行うことで、より効果的な政策実施に繋げることが可能と考えられる。

今回の調査では、サンプル数が限定的であることから、特に少数派の傾向が捉えづらい。このため、今後の調査においては、ウェルビーイング低評価層など、少数でありつつも注視すべき層を意識したサンプルの獲得が望まれる。

3.6.2. 価値観の現在地

価値観の変化について、日本は合理的価値観が高く、自己実現などの価値観は限定的であったが、今回のサンプルでは、収入や利便性、生活環境とウェルビーイングの相関は一部で確認できるものの、仕事のやりがいや他者とのつながりがより強く出た。このことは、我々が価値観の大きな変動の中にある中、今回のサンプルにおいては、物質的（経済的合理性を重視する）価値観以上に、脱物質的（個人の選択の自由など非経済的な）価値観がウェルビーイングに影響を与えていることを示唆しており、経済的合理性がある程度満たされている、あるいはそうした特性よりも自身の価値観を軸にしたウェルビーイングが重要性を持つということが言えるのではないかと。

本報告では、ウェルビーイング評価ならびにウェルビーイングの影響要因を明らかにし、政策形成に向けた分析過程を提示した。これにより、調査結果をウェルビーイングの影響要因に関連する「指標」の設定、具体的な「対象」の特定、政策形成における「優先順位」の設定に活かすことが有効であることを明らかにした。

主観的ウェルビーイングは、これまで、非科学的であり政策への適用が困難であるとされてきた。しかし、今回の検証でわかるとおり、ウェルビーイングの実感を定量化し、属性や生活環境等の主観評価と掛け合わせて見ること、ウェルビーイングに、より影響を与える要因の特定や政策実施における優先順位付けが科学的に証明できることがわかる。

また、平均値を元にした分析では、多数派の傾向を捉えがちであるが、少数派でも例えばウェルビーイングの低評価層の可視化など、データの表し方によって、見えてくるものが異なる。

今回の調査では、ウェルビーイングに影響を与えるであろう因子を抽出しアンケート調査を行った。こうした手法に加え、行政職員等が肌感覚で認識する社会課題を、因子として想定し、対象別・課題別に詳細分析を行うことで、データに基づき、特定のニーズに応える政策設計が可能となると考えられる。

介護業界におけるウェルビーイング ～事例に基づく評価項目の検討～

福岡市では、2023 年度より「介護業界で働く人のウェルビーイング向上」を促す啓発イベントを実施している。例えば、週休 3 日制度の導入支援の紹介や、認知症患者・ケア従事者の視点を演ずる体験型ワークショップの開催、子どもも集う「小規模多機能型居宅介護・駄菓子屋」の見学、介護現場における心の健康について考える機会の創出などである⁽⁷⁸⁾。ウェルビーイングを政策に適用する際に、特定の行政分野においてどのようにウェルビーイングを捉え、測定することが考えられるか、介護業界を例に検討を試みた。

現在、国や地方自治体は、「介護人材を量と質の両面から確保する」ことを目指し、新規人材の「参入促進」、介護人材の「資質の向上」、業界の「労働環境・処遇の改善」に資する取組みを進めている^(78,79)。背景には、全国的な介護業界の人手不足という課題がある。厚生労働省は、2040 年に全国で約 69 万人、福岡県で約 2.8 万人の介護職員が不足する見込みであると発表した⁽⁷⁹⁾。

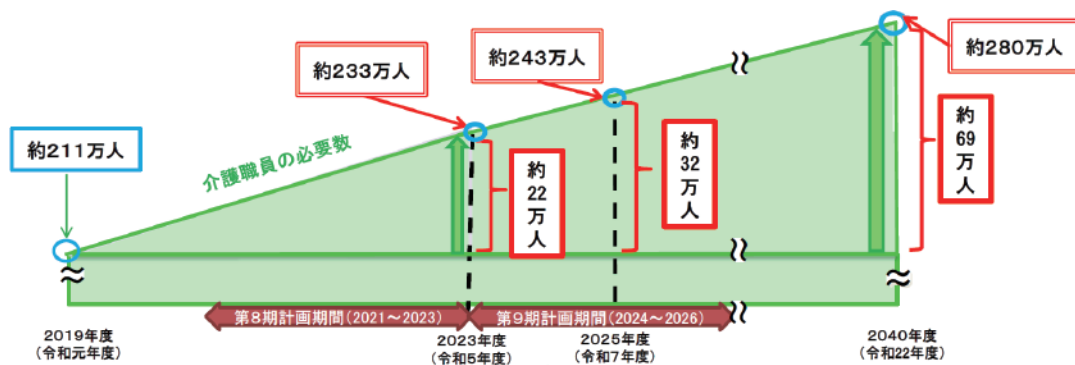


図 37 第 8 期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数

出所：厚生労働省「第 8 期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数について」(2021) より抜粋

また 2023 年に公表された厚生労働省の「雇用動向調査」によって、2022 年に介護分野などの就労者数が初めて減少に転じたことが確認されたと日本経済新聞が報じている⁽⁸⁰⁾。介護業界を離職した人が新たに職に就いた人よりも多かったためであり、介護業界の離職率は相対的に高い。2022 年度介護労働実態調査によると、およそ 3 割が勤務年数 3 年未満で離職しており、1 年間の離職率 (14.3%) は全産業の平均離職率 (13.9% : 2021 年雇用動向調査結果) よりも 0.4 ポイント高くなっている。

人手不足が深刻な介護業界だが、介護サービスの利用者から直接的に感謝される機会の多さから、「介護業界はウェルビーイングを実感しやすい職場」と言われている※。風間らが 2010 年に実施した高齢者介護施設に勤務する介護専門職へのインタビュー調査においても、「利用者の笑顔」や「利用者・家族からの感謝・信頼」が、主観的ウェルビーイングの向上に関わる要因として調査対象者らから共通して語られた⁽⁸¹⁾。

※2023 年 8 月 22 日に開催された令和 5 年度福岡市主催介護業界のウェルビーイング向上事業第 1 弾での合同会社福岡福祉向上委員会代表 大庭庭欣二氏の発言

前述の2022年度介護労働実態調査では、介護の仕事を選んだ理由として働きがいのある仕事だと思ったことと回答した人が多く、ウェルビーイング実感に関わるやりがいや充実感を感じることができると期待されている。筆者らが参加した介護業界の展示会・セミナー「CareTex 福岡 2023」（2023年10月4、5日開催）の出展者らからも、「介護業界で働く人は他者貢献感の強い人が多い」という声が多く聞かれた。一方、介護の職場の離職理由としては、人間関係の問題が最も多い⁽⁸²⁾。介護サービスの利用者の主観がサービスの満足度に影響するため、多様な利用者のニーズに合わせてサービスを提供することが求められ、それに伴う人間関係が職場での大きな問題となることが前述の介護業界の方々から聞かれた。これは、情報共有や介護方針の選択・決定など人とのコミュニケーションが、業務遂行において重要な役割を持つことが影響していると考えられる。

下記は、2022年度介護労働実態調査の「介護労働者の就業実態と就業意識調査」の結果報告書より、職場での悩みに関する回答（複数回答可）で最も多い5つの項目である。

労働条件等に関して、人手不足を半数の人が感じ、それが労働者に過度な負担を与えていることが伺える。前述のように利用者やその家族から感謝される喜びはあれども、負担に見合った賃金や社会的な評価を得られていないと感じている。職場での人間関係等については、特に悩み等を感じていない人が約3割と最も多いが、他の項目の悩みはほぼ同程度（2割前後）の人が抱えており、悩みの多様化が伺える。利用者及びその家族についての悩みは、利用者に適切なケアができていないかの不安が最も多く（約4割）、正解がないと言われる対人援助職ならではの悩みと理解できる。一方、利用者は何をやっても当然だと思っていると感じる人が約2割いる。総務省「日本標準産業分類」において、介護は「医療・福祉」に分類され、提供するサービスに応じて対価をもらうサービス業であるが、労働条件等の悩みに挙げられている社会的評価の低さが、介護職員を軽んじる利用者の言動に影響を与えていることも考えられる⁽⁸³⁾。また、介護保険制度の下で事業所をビジネスとして経営する視点と、利用者の人権にかかわる領域でケアというサービスに従事する視点の違い⁽⁸⁴⁾も、働く人の状況を理解する上で重要である。

表 18 働く上での悩み、不安、不満等について最も多い5つの回答

労働条件等の悩み、不安、不満等	(n=19,890)
1. 「人手が足りない」	52.1%
2. 「仕事内容のわりに賃金が低い」	41.4%
3. 「身体的負担が大きい」	29.8%
4. 「健康面(新型コロナウイルス等の感染症、怪我)の不安がある」	29.0%
5. 「業務に対する社会的評価が低い」	27.7%
職場での人間関係等についての悩み、不安、不満等	(n=19,890)
1. 「職場での人間関係について特に悩み、不安、不満等は感じていない」	32.8%
2. 「部下の指導が難しい」	20.3%
3. 「自分と合わない上司や同僚がいる」	20.2%
4. 「経営層や管理職等の管理能力が低い、業務の指示が不明確、不十分である」	19.7%
5. 「ケアの方法等について意見交換が不十分である」	18.6%
利用者及びその家族についての悩み、不安、不満等	(n=19,890)
1. 「利用者に適切なケアができていないか不安がある」	39.3%
2. 「介護事故(転倒、誤嚥その他)で利用者に怪我をおわせてしまう不安がある」	24.1%
3. 「利用者と家族の希望が一致しない」	22.2%
4. 「利用者及びその家族について特に悩み、不安、不満等は感じていない」	21.7%
5. 「利用者は何をやっても当然だと思っている」	19.7%

出所：公益財団法人介護労働安全センター「令和4年度介護労働実態調査 介護労働者の就業実態と就業意識調査結果報告書」（2023）をもとに URC 整理

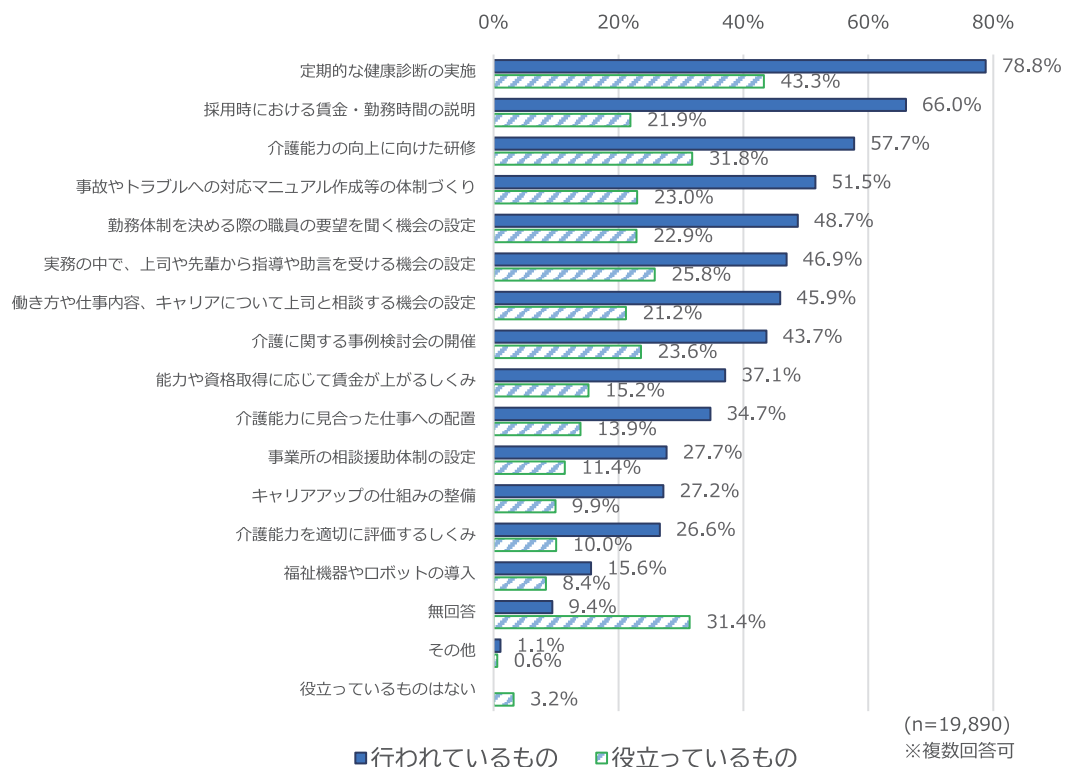


図 38 職場で行われている取組みと職場での悩み解消に役立っていること

出所：公益財団法人介護労働安全センター「令和4年度介護労働実態調査 介護労働者の就業実態と就業意識調査結果報告書」（2023）をもとに URC 整理

介護業界で働く人の様々な悩みに対し、職場では多様な取組みが行われている（図 38）。定期的な健康診断が最も多く、8 割近くの人々が職場で行われていると回答しているが、それが悩みの解消に役立っていると捉える人は 4 割しかいない。健康診断は病気やその兆候を発見することで早期治療や疾患予防に役立つが、悩みや不安を抱え続けた結果生じる病気や症状もある。働く人にとってはもっと上流での解決策が必要なのではないかと。また、役立っているものを答える質問に対し「無回答」が 3 割あることに注目したい。介護労働実態調査は、介護労働者を対象とした介護労働者調査と介護事業所を対象とした事業所調査の二つで構成されている。労働者調査は、事業所調査の対象事業所へ調査票を送付する際に同封する「労働者調査票」を、事業所管理者が任意で選任した最大 3 名の労働者に配布し回答を依頼する仕組みとなっている。回答票は回答者が直接郵送して提出するため、内容が事業所に知られることはないが、管理者から選任されたという認識が回答内容に影響している可能性は否定できないのではないかと。

介護労働実態調査を中心に介護業界におけるウェルビーイング評価の検討を試みた。介護業界は利用者のニーズが多様なだけでなく、施設、訪問、デイサービスなどのサービス種別や、ケアマネジャー、訪問介護員、介護職員、サービス提供責任者など職種や雇用形態も多様であり、何か一つの項目で測れるというものではない。しかし、非定型的業務の比重が高く、働く人にとっての働きがいともいえるワーク・エンゲージメント（「仕事に関連するポジティブで充実した心理状態」⁽⁸⁵⁾）を感じることでできる職場であることは共通している。職場における選択肢や裁量権がどの程度あるか、またそのニーズがあるかは働く人のウェルビーイングを測る項目の一つになり得るだろう。調査にあたっては、事業所の経営を担う管理者と利用者が一番近い労働者の意識のギャップにも留意が必要である。

第4章 政策形成に向けた考察

4.1. フレームワークの適用

本章では、2.2で論じたフレームワークに、第3章のアンケートの結果を適用することで、ウェルビーイングを政策に取り入れる際のプロセスを実際になぞってみる。

このアンケートでは、「ウェルビーイングの実現」を政策の最終目標と位置づけ、最終目標であるウェルビーイングの定義について問い、それに基づき現在と5年後の自己評価（主観的評価）を尋ねた。その上で、その他の質問項目に含まれる属性や生活に関する実感を説明変数として重回帰分析を行い、影響要因を特定した。

フレームワークの最初の工程は、「インパクト」の設定であることから、「インパクト」には、政策の最終目標である「ウェルビーイングの実現」を置く。前述の通り、ウェルビーイングには多様な定義があり、地域や価値観の違いによって目指される状態が変わってくる。このため、最終ゴールは、対象となる地域や組織などによってそれぞれで定義する必要がある。平凡でも穏やかな日々

を送ることをウェルビーイングと捉える人に対して、興奮を伴う新しい挑戦をしているかどうかを尋ねても適切に評価することはできないように、何をもってウェルビーイングと捉えるかは様々であり、目指すウェルビーイングを定義し、それに対応する指標と個々の指標の重要性（重み付け）を明らかにする必要がある。自由記述の結果として、家族や友達との時間、趣味の時間や社会貢献などを含むいきがいなどが抽出された。

次に、「ウェルビーイングの実現」（インパクト）を形成する指標群（アウトカム）を特定するため、ウェルビーイングの実現に影響を与えうる要因を特定するステップとなる（②）。第3章のアンケート結果では、働く世代にとって、「日常の主活動に満足」、つまり仕事への満足度がウェルビーイングに強く影響することが明らかとなった。こうした影響要因を元に、アウトカムの設定を行うのが3つ目の工程となる（③）。例えば、目指す成果を、「人々が仕事にやりがいを感じる人の増加」や「就労条件に満足している人の増加」などと設定し、仕事に対する満足度などの現状評価を行う。

これを受け、インプットにおいては、政策の最終目標に対する政策の有効性を立証することで財源を確保し（インプット）、アクティビティにつなげる。アクティビティには、仕事に対する満足度や待遇の向上につながるスキルアップやそれを支援する人材育成事業の立ち上げ

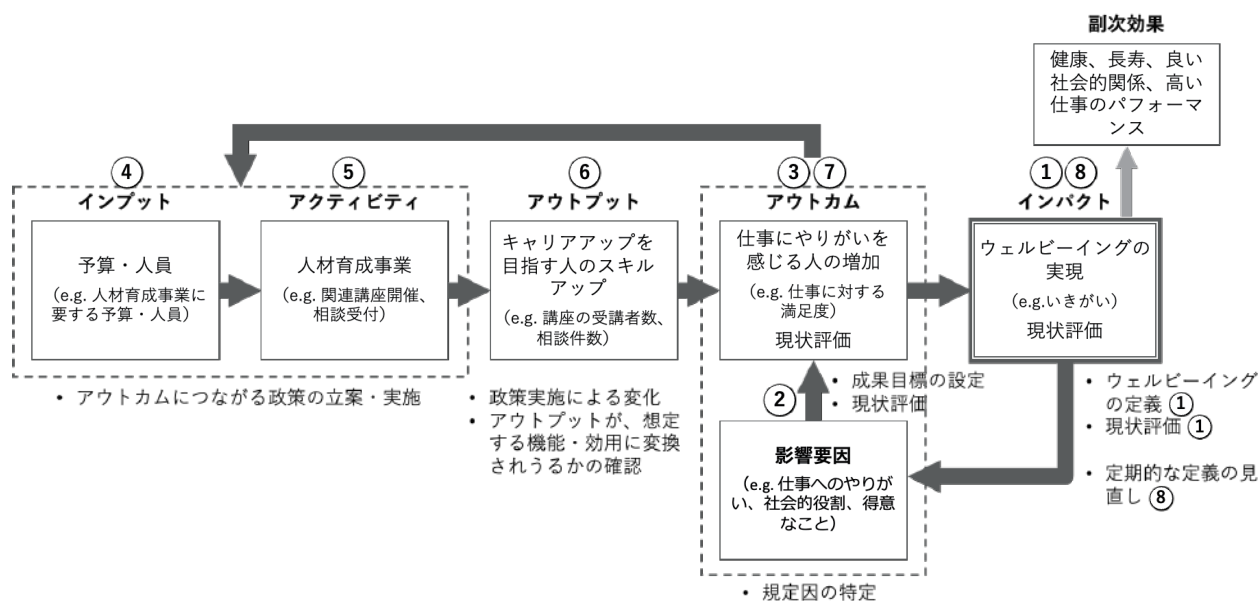


図 39 ウェルビーイングの政策的フレームワーク

出所：URC 作成

などが想定される。アクティビティによって得られるアウトプットを⑥で確認し、アウトプットが想定するアウトカムにつながっているかどうか検証を行う(⑦)。

さらに、仕事へのやりがいを感じる人の増加がウェルビーイングの実現につながっているかどうかについても確認が必要である(⑧)。プロセスの②で、ウェルビーイングに影響を与える要因を特定した上で、アウトカムを設定しているものの、アウトカムの設定が適切でなかったり、ウェルビーイング自体の定義が時代や個々人の成長とともに変化する可能性も否定できず、定義自体の見直しや影響要因の継続的な調査によるアウトカムの改善も定期的に行うことが必要と考えられる。

4.2. 主観的評価の分野とレベル

行政政策においては、目標を達成するための取組の進捗・状況を定量的に測定するための指標として KPI（重要業績評価指標：Key Performance Indicator）を設定し、PDCA サイクルを用いて取り組みの状況や効果を評価することが求められる。

主観的評価を政策に取り入れる際の問いとして、KPI を行政評価のどのレベルで用いるかという議論がある。行政評価は、「政策評価」「施策評価」「事務事業評価」に分類され、政策評価が上位評価、事務事業評価が下位評価となる⁽⁴⁵⁾。地球環境の保全という分野目標を例に見ると、「政策評価」には、地域の二酸化炭素の排出量、「施策評価」には環境問題への理解が深い市民の割合、「事務事業評価」には、環境啓発事業の開催回数や参加人数などがあてはまる。こうした分類別に、全国の自治体における行政評価数を調査した結果によれば、事務事業評価偏重の傾向が見られるという⁽⁴⁵⁾。しかし、事務事業評価の限界として、事務事業間の相対評価が行われず、個別の事務事業の縮小・廃止の検討に終始しがちであることや、事務事業が膨大となり、市民が全体像を把握できないことなどが指摘される。

また、評価の対象分野によって、評価レベルが異なることが指摘される。中西ら（2005）は、イギリスの政策評価において、効率性が重視された 80-90 年代から、生活の質（QoL）重視へと大きく転換する中で、評価対象の変化に注目した。中西らは、イギリスの評価システムを、アウトプット、中間アウトカム、エンドアウトカムと区分し、それらは、国内の区分で言えば、事務事業評価、施策評価、政策評価に近いものと言える（表 19）。従来の効率性重視の評価では、中間アウトカムにあたる市民が享受するサービスの量や水準が評価されるのに対し、QoL 重視の評価では、社会資本ストックの充実度など、生活者の主観に頼らざるを得ない指標が増える。それに伴い、評価レベルも中間アウトカム（施策評価）からエンドアウトカム（政策評価）が中心になってきた（表 20）⁽⁶⁵⁾。

つまり、都市の目指す方向が、規模から質へと移り変

わることに伴い、主観的指標が重視され、またそれと同時に、より上位の施策や政策の評価が求められるようになってきている。

表 19 イギリスの政策評価レベルの分類

エンド アウトカム (政策評価)	生活・活動機会の数や選択の幅、環境および社会資本ストックの質、治安・福祉・教育・育児支援および高齢者の社会活動支援システム等の見えざる社会資本ストックへの充実度
中間 アウトカム (施策評価)	市民が享受するサービスの量と水準、サービスへのアクセス容易性、サービスの利用者数、生産・投資・雇用の変化
アウトプット (事務事業評価)	行政側が供給するサービスの量と水準、社会資本や公共施設の整備量や整備率

出所：中西（2005）をもとに URC 作成

表 20 QoL 指標の分類

分野	エンド アウトカム	中間 アウトカム	アウトプット
環境	58	9	1
経済	4	9	0
社会	58	13	3
計	120	31	4

出所：中西（2005）をもとに URC 作成

4.3. 都市と個人のウェルビーイング

第1章にて、表1にウェルビーイングの構成要素として(A)個人を対象とするものと、(B)社会・場など他者との関係性を対象とするものがあることを示した。ここでの議論は、個人を主体として考えた場合の、(A)自分自身の幸福と、(B)家族や友人等とのつながりや地域におけるボランティアへの参加など利他性によって得られるウェルビーイングを想定している。

一方で、個人とは別に、「都市」が主体となるウェルビーイングも想定しなければならない。自治体のビジョンなど都市全体が主体となるウェルビーイングである。この個人と都市のウェルビーイングの関係を表21に示した。政策的にウェルビーイングを考える際には、都市のウェルビーイングには、個人の主観的ウェルビーイングに直接的に影響を与える事業(施策)もあれば、都市が全体として対処する、あるいは長期的に取り組む事業などもある。表21では、横軸に都市のウェルビーイングの例として、第9次福岡市基本計画の8分野を挿入し、縦軸に個人のウェルビーイングとして、表21で示した構成要素を置いた。

政策形成においては、これら縦軸と横軸が重なるところに個別の事業が落とし込まれる。必ずしも一つの事業が一つの政策分野や個人のウェルビーイングの要素に紐づけられるわけではなく、複数にまたがって寄与するものもある。例えば、IT人材育成事業によって、個人が特定のスキルを身につけることにより、個人としては収入の増加による生活満足度の向上と自分の強みを活かした仕事への挑戦(自己実現に通ずるもの)など持続的なウェルビーイングにつながる。また、そうした人材の活躍が社会にとっては経済活動や創造的活動の活発化に寄与する。

4.2で論じた通り、従来、これら個々の事業に対してより多くのKPIが設定されてきた。しかし、4.2の議論を踏まえると、都市の目指す方向が規模から質へと転換するにつれ、評価対象を個別の事業から、より上位の政策

へと引き上げていくことが不可欠である。

また、近年、政府の行政改革で議論されている「アジャイル型政策形成」では、刻々と変化する社会情勢に対し、「スピーディーに政策サイクルを回し、モニタリング・効果検証をしながら、柔軟に政策の見直し・改善を行っていく」機動性が求められている⁽⁶⁶⁾。ここでは、手法を固定するのではなく、目的を明確に定め、拠り所とする指標を定め(KPI)、達成のための方法を明示し(ロジックモデル)、頻繁に航路修正を行うことが重要となる⁽⁶⁷⁾。

こうしたことから、表21の点線で囲まれた領域、つまり、個人を主体とするウェルビーイング(縦軸)では、個人の総合的なウェルビーイング(例えばキャントリルのはしごⁱ等の主観的幸福度を測る尺度で計測されるもの)と個人のウェルビーイングを構成する要素(健康状態や経済状況など)のレベルでKPIを設定し、都市を主体とするウェルビーイング(横軸)では、都市のビジョン・政策分野などのレベルでKPIを設定することが望ましいと考えられる。ただし、佐藤が指摘するように、評価指標の定義についての検討が重要となる。例えば、「高齢者が活躍できる場の確保」という指標において、高齢者が活躍できる場が確保されている状態がどのような状態であるかという水準が明示される必要がある⁽⁶⁸⁾。評価レベルを上位に設定することにより、定義がぼやける可能性も想定され、KPIの具体化が求められる。

また、個人のウェルビーイングと都市のウェルビーイングは相互に影響を与えると考えるが、その両者が相反する可能性も考慮しておきたい。都市のウェルビーイングは、直接的・間接的に個人のウェルビーイングの実現に寄与することが期待されるが、もし両者に齟齬が生じた場合には、都市のビジョン自体の見直し、あるいは個々人の目指す姿の見直し(例えば、個人化の行き過ぎを是正し公共性に注力する)など、調整の手が必要となるのかもしれない。個人と都市のウェルビーイングの関係についてはまだ議論が十分になされているとは言えず、今後も引き続き検討が必要であろう。

ⁱ 参考文献43を参照のこと

表 21 ウェルビーイングの政策マトリックス

評価のレベル		都市のウェルビーイング							
		1人1人が心豊かに	様々な支え合いと繋がり	安全安心	人と地球にやさしい	磨かれた魅力	経済活動活発	創造的活動	国際競争力
個人のウェルビーイング	身体（健康状態）	物質的	高齢者の健康（遊歩道の整備）				市民スポーツの活発化		
	生活：経済状況、住環境、医療、移動・交通など		地域福祉の推進（子育て環境）	河川の氾濫防止（監視センサー）	公共交通の充実		IT人材の育成		ユニバーサルデザイン
	精神（短期的）：ポジティブな感情の多さと不快な状態の回避					市民スポーツの活発化			
	精神（持続的）：人生の意味や意義につながる持続的な幸福	脱物質的	ユニバーサルデザイン				ユニバーサルデザイン	IT人材の育成	多様な人材の活躍・文化交流
	社会・場：社会的つながりなど、自分と周囲の互恵的な幸せ		高齢者の健康（遊歩道の整備）	地域福祉の推進（子育て環境）					

出所：菊澤・山田（2023）をもとに URC 作成

福岡市職員研修 (政策的フレームワークを用いたワークショップ)の報告

2023年10月17日、ウェルビーイング調査の一環として、福岡市職員（入庁11年目まで）を対象に「次期基本計画策定に向けた市職員ワークショップ」を開催した。ワークショップの冒頭に、総務企画局より「福岡市の総合計画～市がめざす将来の姿～」、URCより「新たな都市評価の潮流とウェルビーイング～今求められている都市～」について情報提供を行い、その後、LOCAL&DESIGN株式会社代表取締役福田忠昭氏をファシリテーターとしてお招きし、「わたしたちが考える福岡市の未来予想図」と題したワークショップを実施した。当初、企画段階では、1グループ5名、10グループの合計50人程度を想定していた。しかし、申し込みが予想以上に多く、最終的には83名に達した。参加者の所属部局を見ると、総務企画局、福祉局、経済観光文化局など12部局に加え、全7区役所からの参加もあり、横断的な構成となった。

ワークショップは、1テーブル5-6人、全15グループに分かれ、3段階でグループワークを行った。ワークショップの目的は、住む・働く一人の市民の立場で、どのようなまちで暮らすことがそれぞれのウェルビーイングを豊かにするかをイメージし、福岡市の将来について意見を出し合うこととした。グループ作業1として、「あなたが、「幸せだな～」と感ずるのは、どんなことですか？」という質問に対し、これまで一番感動したこと、最近すごくうれしかったこと、将来こういうふうになると幸せ、などをイメージして、時間内で思いつく限りを付箋に書きこんでもらった。意見が書き出された付箋は、グループごとに分類し模造紙に貼り付け、カテゴリーのタイトルを記してもらった。グループ作業2として、各カテゴリーの内容を実現するためには、何が必要か、また課題は何かという質問を投げかけた。各カテゴリーの中の「幸せなこと」を実現するために、必要なこと・もの、解決しないといけない課題などを付箋に書き出し、別の模造紙にカテゴリーごとに貼りつけてもらった。グループ作業3と



各グループでの協議の様子

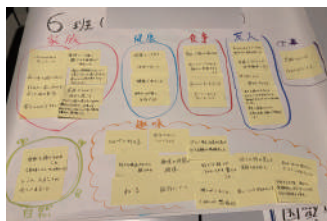
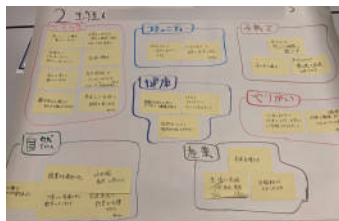
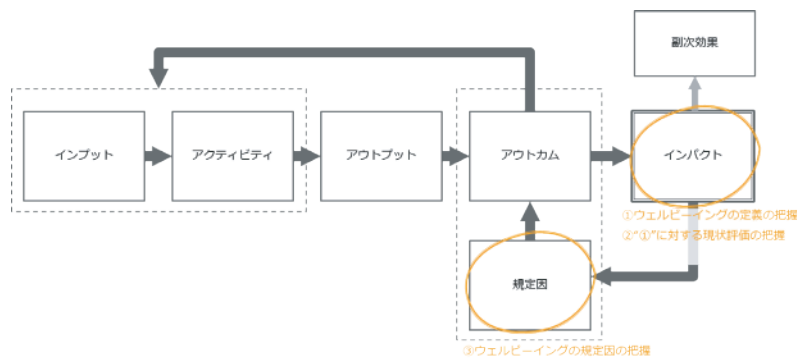


参加者は全員市職員とはいえ、所属部局も異なり、初対面が多い中、アイスブレイキングから徐々に会話がはずむように。

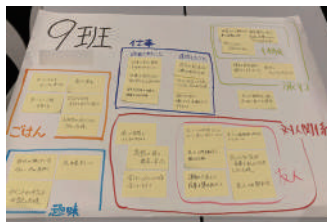
総勢80名を超える参加者が一堂に集まり、話し合いが深まるにつれ、熱気の高まりが感じられた。

して、それらの課題を解決するためにはどうすればいいかについて、具体的な活動や施策をイメージし、必要なこと・ものがどうしたら得られるかなども含め、付箋に書き出し、先ほどの課題の書かれた付箋の横に貼り出してもらった。最後に、これらの成果をまとめ、10年後の福岡市はどのようなまちになってほしいか、スローガンやキャッチコピーなどとともに発表してもらった。

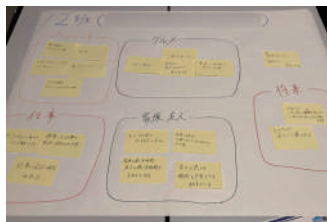
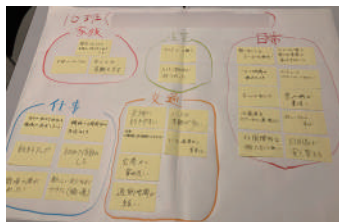
このワークショップの構造は、下の政策的フレームワークにおける、ゴールとなるインパクトの設定（グループ作業1）および現状評価（グループ作業2）、そしてゴールと現状のギャップを埋めるためのアクティビティの提案（グループ作業3）に相当するようにデザインされている。ワークショップを通して、模擬的に、ウェルビーイング政策の形成プロセスの一部を体験する形となっている。実際の政策形成プロセスでは、自治体職員に加え、市内の企業や団体・個人から多様な意見を集め、街の目指すゴール（インパクト）を設定し、EBPMに則りデータを元にした現状評価を行う。そして、ゴール達成に有効なアウトカムを、影響要因分析等を用いて導き、そのアウトカムを形成する施策（アクティビティ）を立案していく。



グループ作業1の「幸せと感
じること」の書き出しとカテ
ゴリー分け



それぞれのグループにおいて「幸せだな〜」と感
じること
をカテ
ゴリー
別に分
類して
もらっ
たところ、
家族や
友人と
の時間
や過ご
し方
に関する
もの、
子育て
に関する
もの、
自身の
健康に
関する
もの、
住環境
や自然
など、
周囲の
環境に
関する
もの、
仕事に
おける
評価や
やりが
いに関
するも
の、
収入や
生活の
安定に
関する
もの、
旅行や
趣味
など
プライベートな
活動に
関する
もの、
などが
共通し
て見ら
れた。



2つ目のグループ作業では、描かれた幸せの絵を前に、もう少しこうなれば良いなという課題をピンクの付箋に書き出し、3つ目のグループ作業で青の付箋に課題の解決策を挙げてもらった。例えば、「家族と過ごす時間」という幸せ像に対し、「時間がない」という課題や「子育てがしやすい環境」などの条件が提示され、それに対し、「職場での残業を減らすための人員配置の見直し」や「子ども家庭への支援・各種サービスの周知・徹底」などの解決策が提案された。

「幸せと感ずること」の抜粋と分類

	幸せと感ずること
家族・友人	家族と過ごす時間がある、「幸せ」と感ず時間を有できる相手がいる、運動して友人と成果を褒め合うこと、こどもの成長を感じたこと、おいつこと時間、など
趣味	自由に好きなものが食べられる、旅行に行く、自分1人の時間を過ごせる、ライブに行ける、バスケットして汗を流す、など。
収入	給料アップ、お金の困ることなく気にせず暮らせたら幸せ、収入の安定、など。
生活	日用品が安く買える、長期休暇が取れる、定時に帰れる、安心して生活できる家がある、通勤時間が短い、専用車椅子で海水浴、など。
社会	子どもが幸せと思える社会、治安が良い、平和な日常が続くといいな、など。
住環境	バスの本数が多い、やっぱ福岡が1番と思えて帰ってこれる環境、より国際的な街になってほしい、自然を感じた時、など。
健康	歳をとっても健康でいられる、よく眠れたとき、筋肉量が増えたこと、など。
仕事	課長から仕事で褒められた、市民の方に感謝された時、運営したイベントの成功、職場の人間関係が良好な時、など。

課題と解決策の分類

効率化とデジタル化:

- ・ 業務の効率化
- ・ デジタル技術
- ・ AIの活用
- ・ デジタルツールの活用

地域への影響と発展:

- ・ 企業誘致と支援

職場環境とキャリア:

- ・ 挑戦的な職場
- ・ 給与とキャリア形成
- ・ スキルアップ
- ・ 仕事の目標

人事・働き方関連:

- ・ 人事評価制度
- ・ 休暇制度の充実
- ・ 採用・人材確保
- ・ 育休・産休制度
- ・ ワークライフバランス

時間とワーク・ライフ・バランス:

- ・ 時間の確保
- ・ 共働きと家族時間
- ・ 休暇取得
- ・ フレックスタイム制度

生活向上とリフレッシュ:

- ・ 美味しいお店の情報
- ・ リフレッシュ施設
- ・ 趣味と休息
- ・ 旅行支援事業

コミュニケーションと交流:

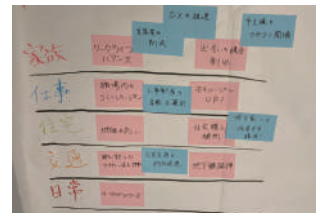
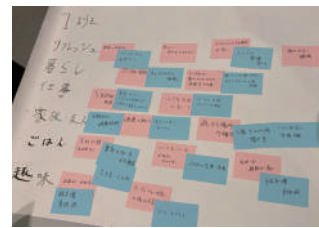
- ・ 会議の効率化
- ・ 地域との交流
- ・ 異業種交流
- ・ イベントの開催

健康と運動:

- ・ 運動環境整備
- ・ 健康診断
- ・ スポーツイベント開催

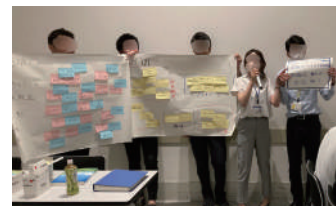
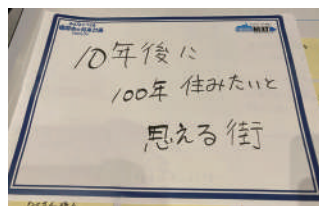
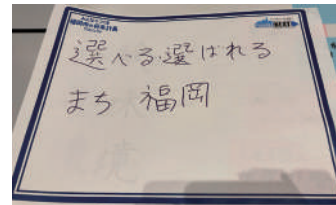
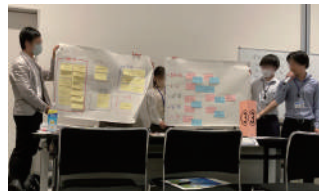
グループ作業 2 および 3 の「課題」と「解決策」の洗い出し

課題と解決策は、個別に議論の時間を設けたが、課題自体に「・・・を増やす」など解決策とも取れるキーワードが並ぶこともあり、必ずしも「課題」と「解決策」に分けられない。「趣味」と「子育て」など、異なる分野でも、「お金」「時間」「柔軟な働き方」など共通した課題・解決策が提示されることも散見され、根幹にある課題感が浮かび上がる結果となった。



最終発表の様子とキャッチコピーの紹介

非常に限られた時間の中で、それぞれの想いを載せたキャッチコピーが並び、聞き応えのある発表となった。



第5章 おわりに

2023年9月に釜山（韓国）で開催された「日韓海峡圏研究機関協議会」ⁱⁱの研究報告会に筆者が参加し、昨年度のウェルビーイング研究の成果を発表した。その際、（財）釜山研究院の研究者から、釜山でもウェルビーイング指標に関する研究を実施していたことを聞いた。後日、釜山市民を対象としたグループインタビュー調査報告書（2018年12月）を見せてもらった。そこには、我々のアンケート調査でも高い関心もたれていた「ワーク・ライフ・バランス」への言及があった。釜山では特に若い世代が「ワーク・ライフ・バランス」を求めているという。一つの都市においても多様なウェルビーイングの捉え方がある一方で、国や文化を超えて共通する部分があることがうかがえた。

ここで、最後に、2022年度から約2年間実施してきた我々の研究成果をまとめたい。

初年度は、なぜ今ウェルビーイングなのか、長期的に観測される価値観の変化や都市像の変化とともに論じ、ウェルビーイングの定義についても、従来の生活満足度との違いなども含め、我々なりの視点を与えてきた。1年目の最後には、ウェルビーイングの評価指標や影響要因に関する既存の研究を基にアンケートを設計し、福岡市でウェルビーイング調査を実施した。調査の分析において、20-50代は、「仕事の充実」、「ワーク・ライフ・バランスの推進」、子どもをもつ女性は、「仕事を続けながらストレスなく育児ができる環境」、50-60代は「社会とかわる活動の継続」につながる施策を行うことが、それぞれのウェルビーイングの実現に寄与することが明らかとなった。また、ウェルビーイングの評価については、現在よりも5年後評価が高くなることが確認できた。ウェルビーイングの現在評価、5年後評価ともに男性よりも女性の方が高いことがわかった一方で、女性の5年後評価の上昇率が男性よりも鈍く、また、女性のウェルビーイング低評価層が、5年後評価において拡大する傾向も見られた。こうしたことから、ウェルビーイング評価の高い人と低い人の二極化の可能性も示唆された。誰一人取り残さない、ウェルビーイングの向上をめざすためには、ウェルビーイング低評価層の特徴を捉え、影響要因の詳細分析を行うことが重要となる。

そして、ウェルビーイングは市民の幸せを再定義する理念として、行政計画の指針・方針・方向性（「Key

Compass Indicator」⁽⁶⁹⁾）に位置付けることが適当であることも示された。取組みの目標達成度や進捗状況を定量的に測定するKPIは、施策単位ではなく分野レベルで設定し、ウェルビーイングを含む主観的指標を適切に取り入れながら評価していくことが、多様な市民のウェルビーイングの実現につながることを明らかにした。

ウェルビーイングを政策的に位置付けるにあたり、従来の客観的指標をKPIに設定してきた自治体にとって、主観的指標を重要指標と位置付けることへの躊躇がある。主観的指標であっても、生活満足度の向上であれば、快適性や福祉環境など、一般に社会インフラに直結する要素が多く、何に取り組むことで評価の向上を期待できるのか予測が付きやすい。しかし、精神的な幸福や社会とのつながりによって得られる幸福となると政策的アプローチが途端に難しく感じられる。

これに対し、2章・4章では、昨年度提示した「ウェルビーイングの政策的フレームワーク」を検証し、ウェルビーイングを政策に取り入れる際の形成プロセスを確認した。アンケート結果を踏まえた具体的な事例とともに、ウェルビーイングの政策的アプローチがより実践的なイメージとして感じていただけたのではないかと思う。

2023年10月、富山県で進められているウェルビーイング指標に関する取組みが総務省の「第8回地方公共団体における統計データ活用表彰」において総務大臣賞を受賞した⁽⁷⁰⁾。富山県では、2022年2月に「富山県成長戦略」にて「幸せ人口1000万～ウェルビーイング先進地域、富山～」というビジョンを掲げ⁽⁷¹⁾、同年9月、県民の主観的なウェルビーイングを把握するために県民意識調査を実施し、その調査結果をもとに県独自のウェルビーイング指標を策定した⁽⁷⁰⁾。県はこれら指標の状況を継続的に把握し、そのデータを課題・ニーズの発見や効果検証、政策立案に活用し、県民一人ひとりのウェルビーイングの向上を目指す^(70,72)。

ウェルビーイングの向上を目標に、住民の主観的な実感を調査・分析し、多様な住民の意識や課題の把握を試みて政策立案につなげるという流れは、「フレームワーク」とも整合し、主観的指標も政策的にアプローチできることを認識させてくれる。上述した我々の研究成果が、ウェルビーイングを政策に適用する意義や捉え方、方法として参考になれば幸いである。

ⁱⁱ1994年に日韓の10の研究機関によって設立された協議会

アンケート調査結果資料編

01 「日々の暮らしの幸せ」と「より充実させるもの」

「日々の暮らしの幸せ」は「家族」が最も多く言及された。「人生をより充実させるもの」として最も多く言及されたのは「仕事」だった。

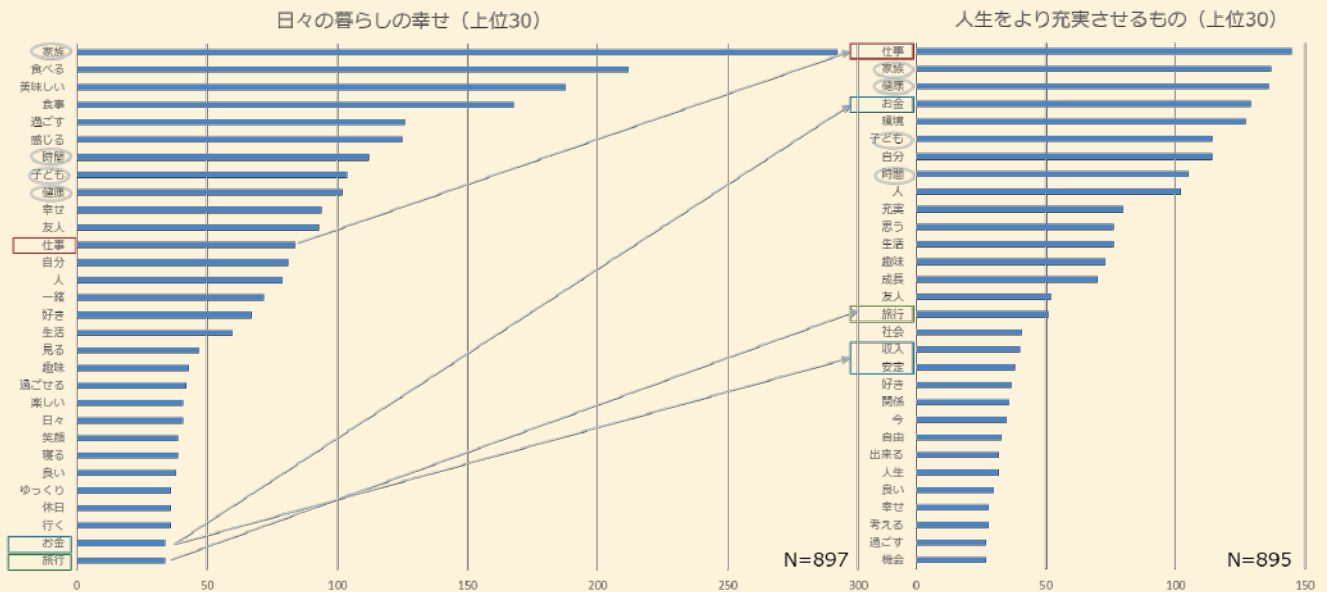


図 1 自由記述抽出語ランキング

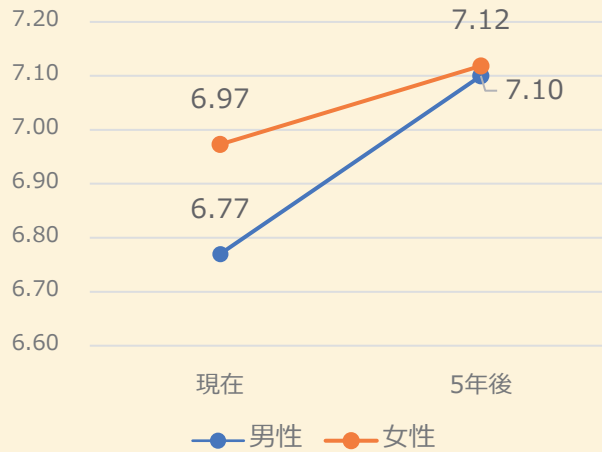
出所： KH Coder を利用して URC 作成

※頻出語ランキングは、ひらがなだけからなる、動詞（「する」「できる」「ある」「なる」「いる」）、形容詞（「ない」）、否定助動詞（「ない」「ぬ」）を除く

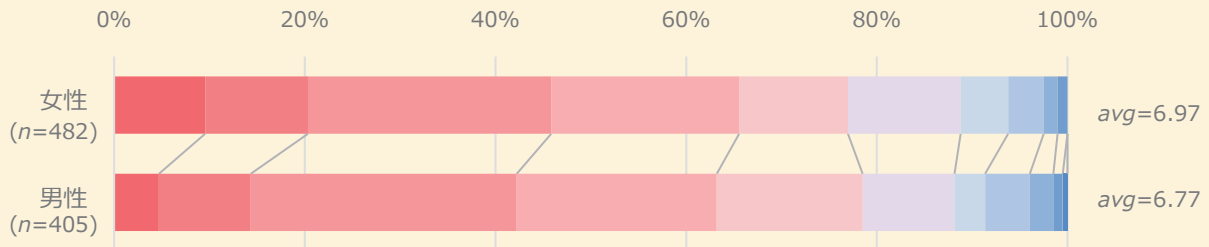
02 男性と女性のウェルビーイングの捉え方

男性女性のウェルビーイング評価を比較すると、現在の評価と5年後の評価の平均値は女性の方が男性よりも高い。一方で、男性の5年後評価が現在評価から上昇しているのに対し、女性の5年後評価の上昇幅は小さい。次頁の頻出語にも差が見られる。

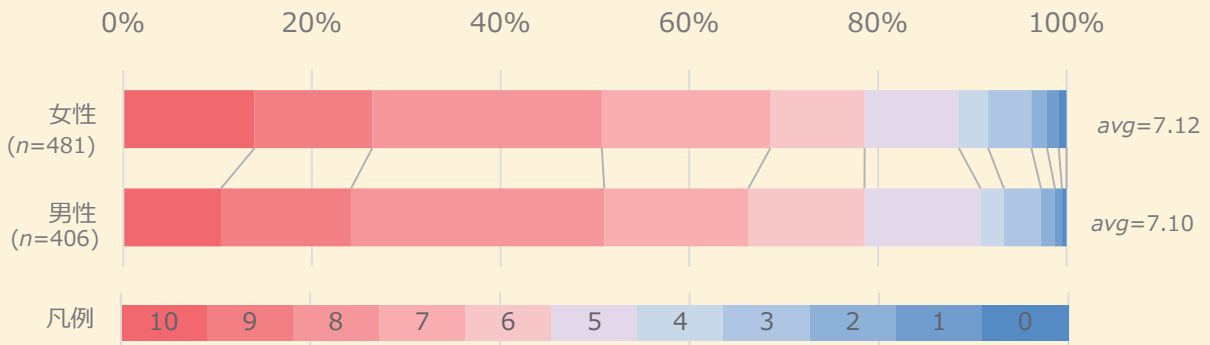
男女別ウェルビーイング評価（平均値）



現在のウェルビーイング評価



5年後のウェルビーイング評価



03 年齢グループによるウェルビーイング

日常の主活動は、20代から70代まで幅広い層のウェルビーイングとの相関が高い一方で、20-60代の働き世代の満足度が低い。

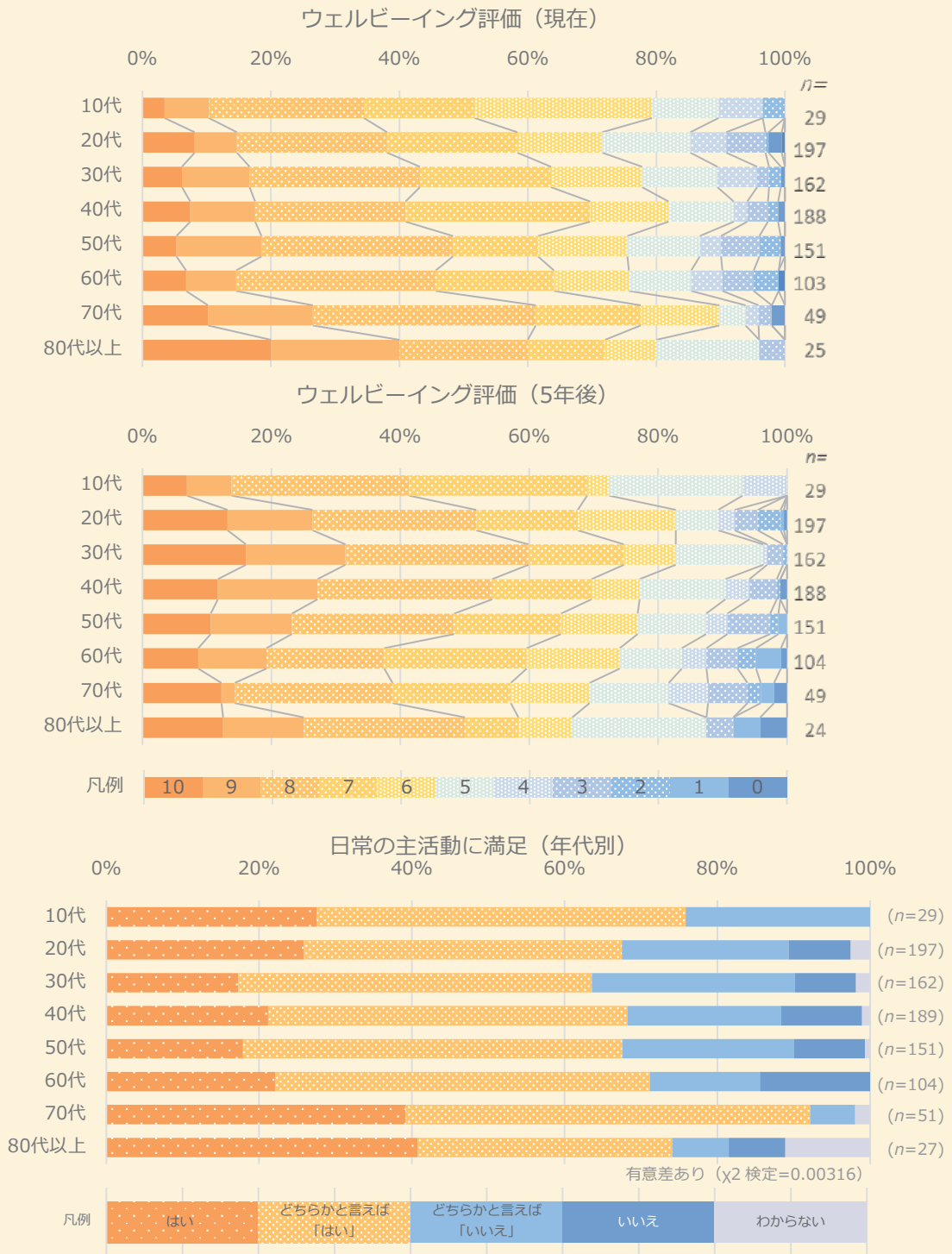


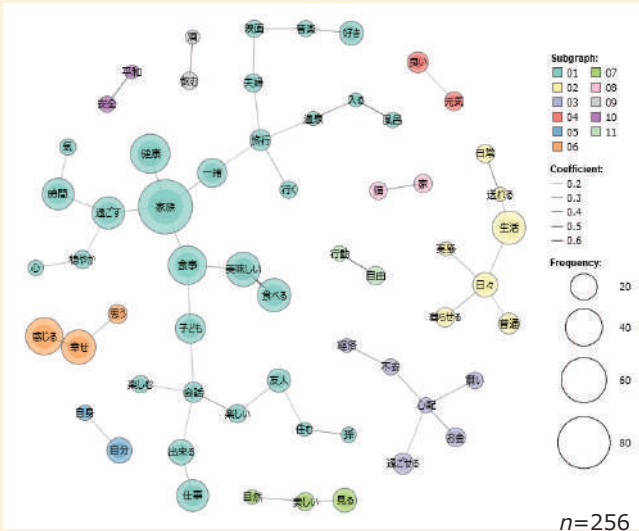
表 1 年代別ウェルビーイング (WB) 評価と生活における実感の相関

	WB	余暇時間は十分だと感じる	困ったときに相談する相手がいる	自分は樂觀的な性格である	健康である	住まいは快適・安全	必要な収入を得ている	日常の主な活動に満足している	関心事やチャレンジしていることがある	さまざまな機会・自由な選択肢がある	居場所があると感じる	地域とつながりがあると感じる	さまざまな価値観や意見を尊重する	困っている人がいたら助けようとする
10代	現在	0.134	.496**	0.112	0.139	0.241	-0.001	0.181	0.235	0.130	.567**	0.275	.448*	0.208
	5年後	0.152	.394*	0.264	0.037	0.272	0.310	.443*	.558**	0.319	0.118	.383*	.572**	0.279
20代	現在	0.125	.362**	.185**	.321**	.244**	.346**	.418**	.280**	.264**	.350**	.199**	.176*	0.117
	5年後	0.125	.335**	.207**	.236**	0.117	.181*	.192**	0.105	.180*	.246**	-0.041	.149*	0.077
30代	現在	.192*	.387**	.159*	.314**	.196*	.211**	.401**	0.023	.167*	.382**	0.126	0.134	0.149
	5年後	0.022	0.093	0.150	0.141	0.142	.161*	.292**	0.132	0.142	.230**	0.044	.171*	.204**
40代	現在	0.124	.339**	.235**	.210**	0.135	.265**	.472**	0.069	.201**	.388**	.215**	0.052	0.059
	5年後	.203**	.402**	.329**	.279**	.233**	.227**	.449**	0.120	.368**	.449**	.250**	0.078	0.090
50代	現在	0.135	.241**	.218**	.366**	.346**	.335**	.387**	.288**	.328**	.326**	0.089	0.075	.194*
	5年後	.208*	.267**	.257**	.386**	.287**	.322**	.446**	.325**	.334**	.337**	.209**	0.009	0.148
60代	現在	.397**	.459**	.285**	.426**	.476**	.445**	.574**	.252*	.376**	.407**	.415**	0.141	-0.064
	5年後	.253**	.420**	.370**	.456**	.419**	.393**	.325**	.204*	.505**	.274**	.247*	0.157	0.016
70代	現在	0.029	0.277	0.219	.347*	.477**	.423**	.497**	.562**	0.272	.328*	0.242	0.208	0.195
	5年後	0.162	.393**	.353*	.480**	.402**	.377**	.448**	.603**	0.257	.405**	.382**	0.195	0.209
80代以上	現在	0.102	0.133	0.272	0.218	.540**	0.372	0.384	0.150	0.278	.447*	-0.026	.495*	0.206
	5年後	0.046	0.078	0.157	0.059	.563**	0.133	0.268	-0.040	0.025	0.206	-0.220	0.301	-0.005

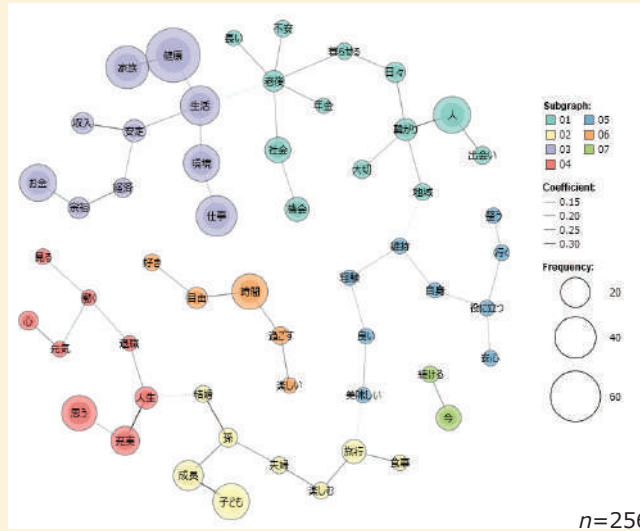
アスタリスク (*) は、2 つの変数間に統計的に有意な関係があるかどうかを示しており、「*」は、P 値が 0.05 未満であり、関係が統計的に有意である可能性が高いことを示す。同様に、「**」は、P 値が 0.01 未満であり、より信頼性が高いことを示す。

50-60代

日々の暮らしにおける幸せ



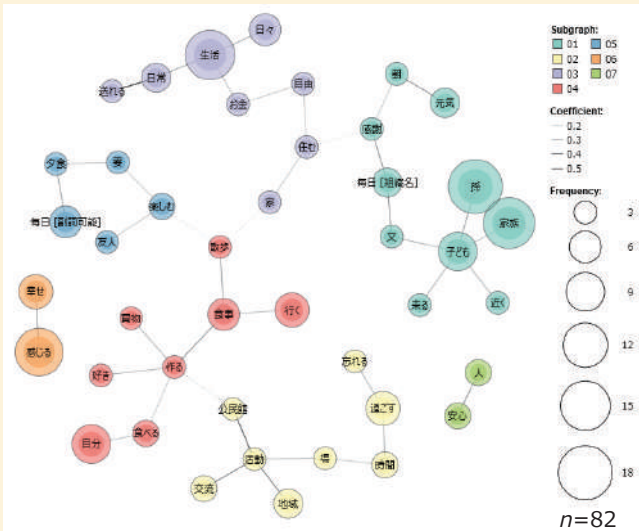
今後、人生をより充実させるもの



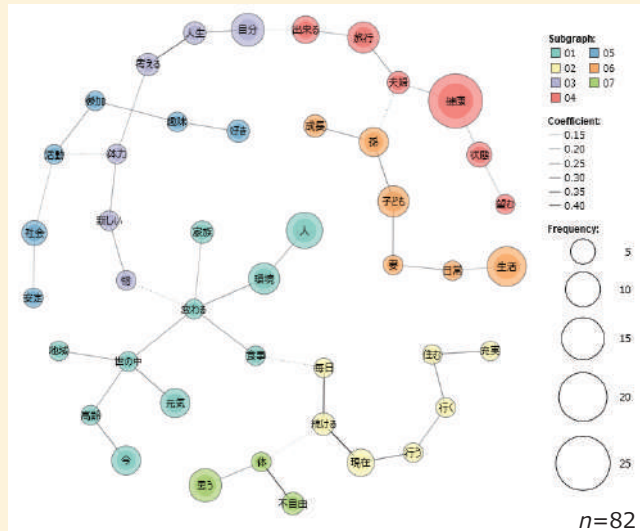
出所： KH Coder を利用して URC 作成

70-80代以上

日々の暮らしにおける幸せ



今後、人生をより充実させるもの

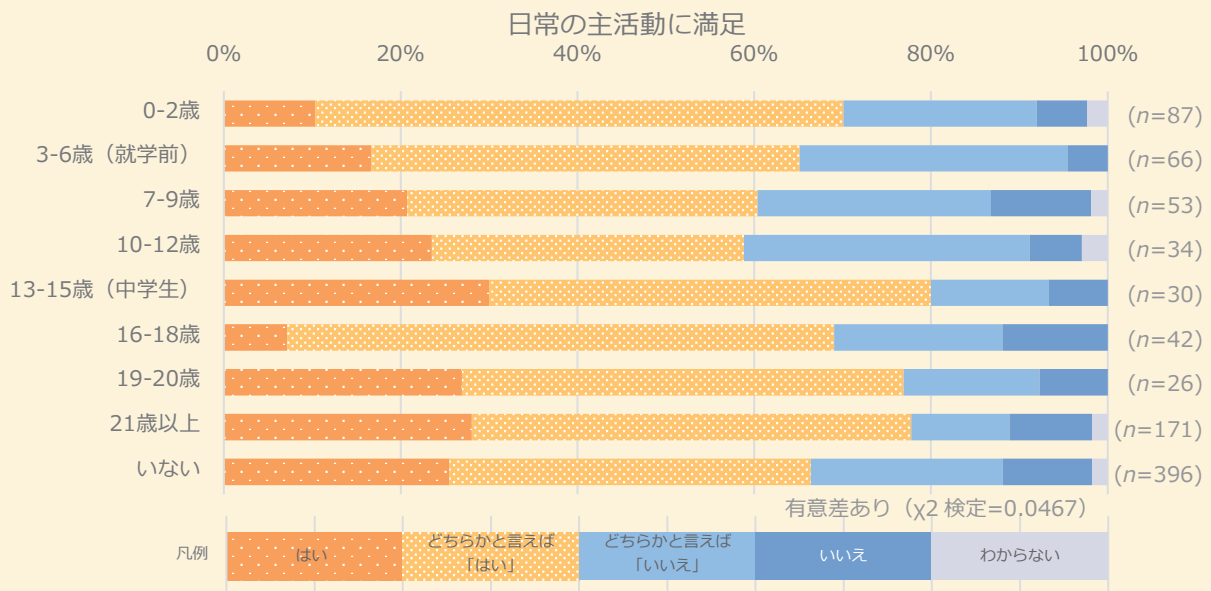
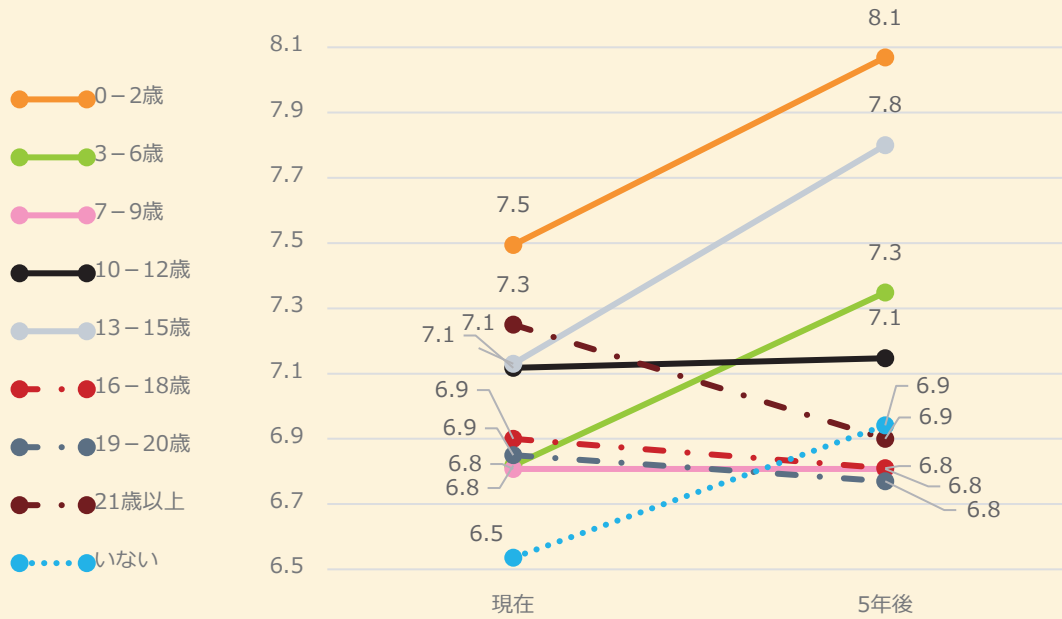


出所： KH Coder を利用して URC 作成

04 子どもの有無、子どもの年齢による差

子どもの有無による違いは見られるものの、大きくは子どもの年齢に伴う回答者の年齢層による違いが反映されているように見える。

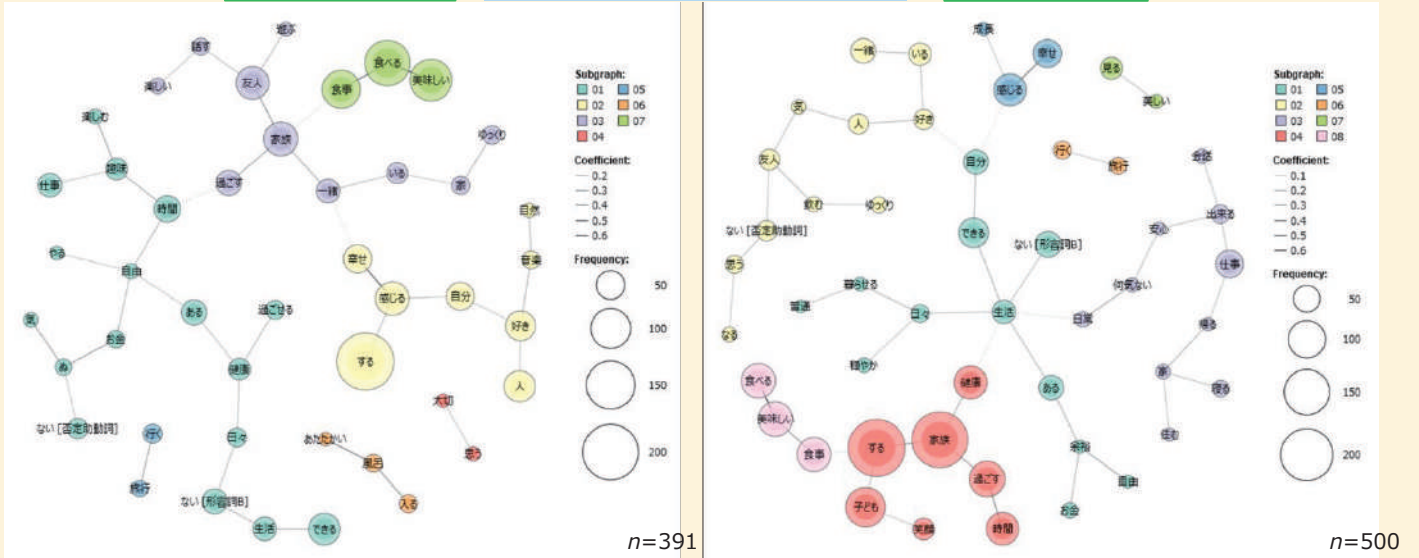
子どもの有無・年齢別ウェルビーイング評価（平均値）



子どもいない

日々の暮らしにおける幸せ

子どもいる



出所： KH Coder を利用して URC 作成

表 2 子どもの年齢グループ別ウェルビーイング (WB) 評価と生活における実感の相関

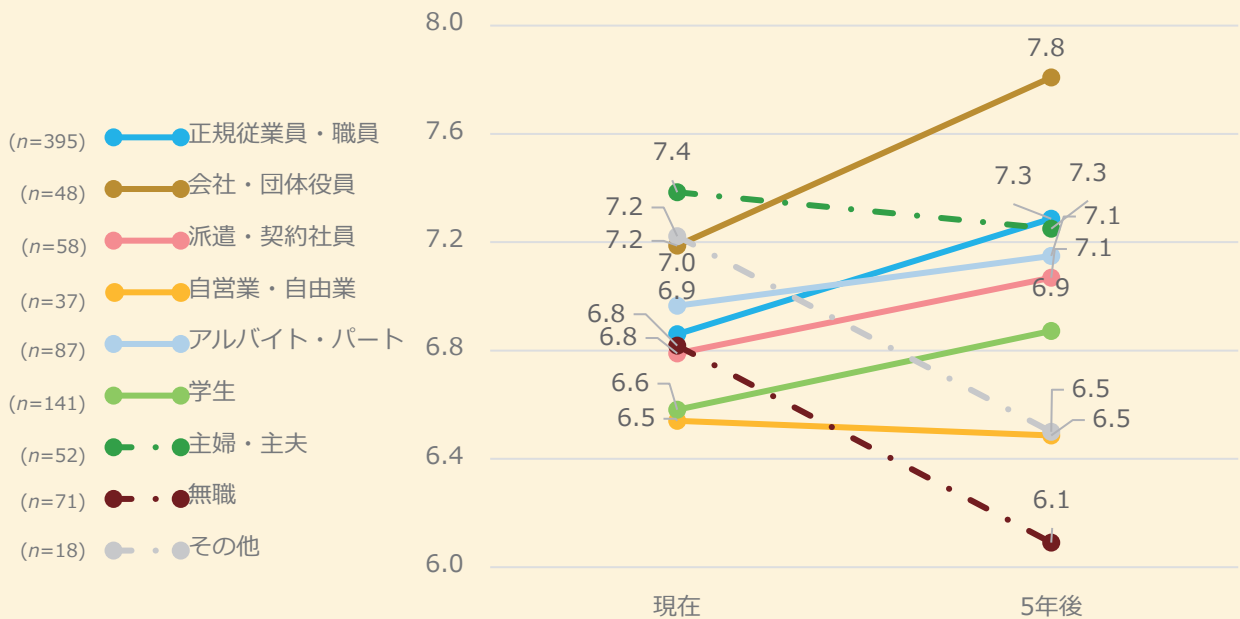
	WB	余暇時間は十分だと感じる	困ったときに相談する相手がいる	自分は楽観的な性格である	健康である	住まいは快適、安全・安心	必要な収入を得ている	日常生活に満足している	関心事やチャレンジしていることがある	さまざまな機会・自由がある	居場所があると感じる	地域つながりがあると感じる	さまざまな価値観や意見を尊重する	困っている人がいたら助けてほしい
子どもが20歳まで	現在	0.091	.346**	.143**	.303**	.175**	.274**	.418**	0.044	.180**	.396**	0.095	0.093	0.091
	5年後	0.036	.266**	.197**	.222**	.176**	.184**	.328**	0.076	.222**	.336**	0.086	.110*	0.091
子どもが21歳以上	現在	.242**	.296**	.287**	.260**	.345**	.332**	.424**	.237**	.338**	.314**	.226**	.174*	0.054
	5年後	0.088	.230**	.305**	.315**	.318**	.270**	.267**	.210**	.298**	.252**	0.065	.157*	0.035

アスタリスク (*) は、2つの変数間に統計的に有意な関係があるかどうかを示しており、「*」は、P値が0.05未満であり、関係が統計的に有意である可能性が高いことを示す。同様に、「**」は、P値が0.01未満であり、より信頼性が高いことを示す。

05 職業ごとのウェルビーイングの評価

正規従業員や会社役員が日常の主な活動に満足し、収入への満足度も高いことに比べ、派遣社員はいずれにおいても満足度が低いこと、自営業においては、活動には満足しつつも収入面では満足できていないという結果であった。

職業別ウェルビーイング評価（平均値）



日常の主活動に満足

必要な収入がある

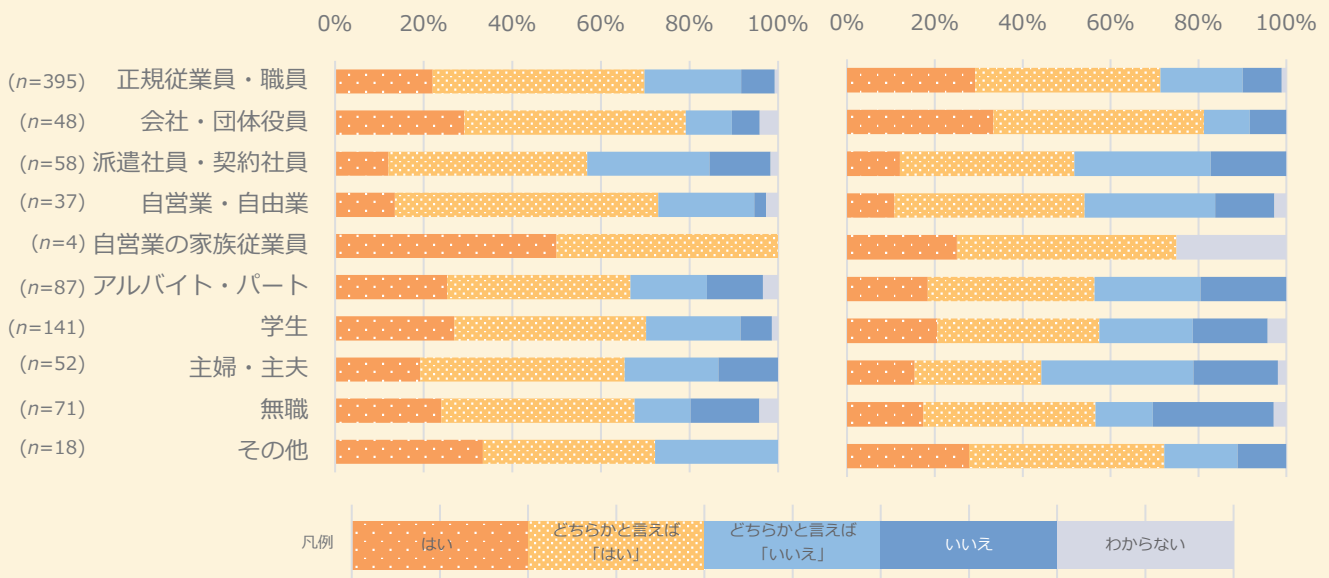


表 3 職業別ウェルビーイング (WB) 評価と生活における実感の相関

	WB	余暇時間は十分だと感じる	困ったときに相談する相手がいる	自分は楽観的な性格である	健康である	住まいは快適、安全・安心	必要な収入を得られている	日常の主な活動に満足している	関心事やチャレンジしていることがある	さまざまな機会・自由な選択がある	居場所があると感	地域とつながりがあると感じる	さまざまな価値観や意見を尊重する	困っている人がいたら助けるようにする
正社員	現在	0.095	.220**	.217**	.225**	.164**	.212**	.396**	0.072	.187**	.295**	0.044	0.092	0.078
	5年後	.159**	.331**	.225**	.242**	.187**	.188**	.322**	.169**	.289**	.353**	.105*	.099*	.129*
団体役員	現在	.321*	.380**	-0.009	0.220	0.035	.448**	0.181	0.145	0.264	.384**	0.264	-0.067	.303*
	5年後	0.089	.333*	0.208	-0.114	.322*	0.143	0.252	0.261	0.226	0.106	.326*	0.050	.436**
派遣社員	現在	0.193	.407**	0.243	.393**	.510**	.301*	.442**	-0.187	.422**	.443**	0.197	0.208	0.090
	5年後	0.105	0.254	.347**	.471**	.309*	0.180	0.235	-0.062	0.180	.311*	0.178	-0.123	-0.194
自営業	現在	0.108	.432**	0.194	0.307	.414*	.560**	0.214	0.175	0.315	.561**	.344*	.447**	.497**
	5年後	0.245	.339*	0.305	0.181	0.316	.485**	0.310	0.165	.657**	.363*	0.066	0.152	.367*
アルバイト	現在	.232*	.499**	0.135	.356**	.325**	.450**	.591**	.408**	.239*	.351**	.466**	-0.024	0.072
	5年後	0.063	.339**	.215*	0.205	0.034	.374**	.328**	.371**	.244*	0.147	.245*	0.150	0.094
学生	現在	.175*	.420**	.238**	.377**	.294**	.306**	.435**	.419**	.245**	.418**	.281**	.281**	0.119
	5年後	0.140	.295**	.207*	.261**	.218**	.179*	.233**	.196*	.197*	.242**	-0.034	.255**	0.127
主婦	現在	.290*	.547**	0.269	.352*	.315*	.301*	.470**	.293*	.457**	.469**	.331*	.349*	.320*
	5年後	0.053	.407**	0.255	.380**	.412**	0.107	.342*	0.115	.308*	.470**	0.195	.390**	.386**
無職	現在	.400**	.454**	.338**	.567**	.594**	.502**	.572**	.516**	.346**	.359**	.269*	0.165	0.086
	5年後	.295*	.392**	.396**	.490**	.489**	.328**	.438**	.349**	.306*	.268*	0.154	0.194	0.089

アスタリスク (*) は、2つの変数間に統計的に有意な関係があるかどうかを示しており、「*」は、P値が0.05未満であり、関係が統計的に有意である可能性が高いことを示す。同様に、「**」は、P値が0.01未満であり、より信頼性が高いことを示す。

06 ケア(介助・介護)を要する家族がいる人いない人

ケアを要する家族がいる人といない人では、いる人のウェルビーイングが少し低いこと、ケアを要する家族がいる人にとって、居場所がキーポイントとなっている様子が見える。

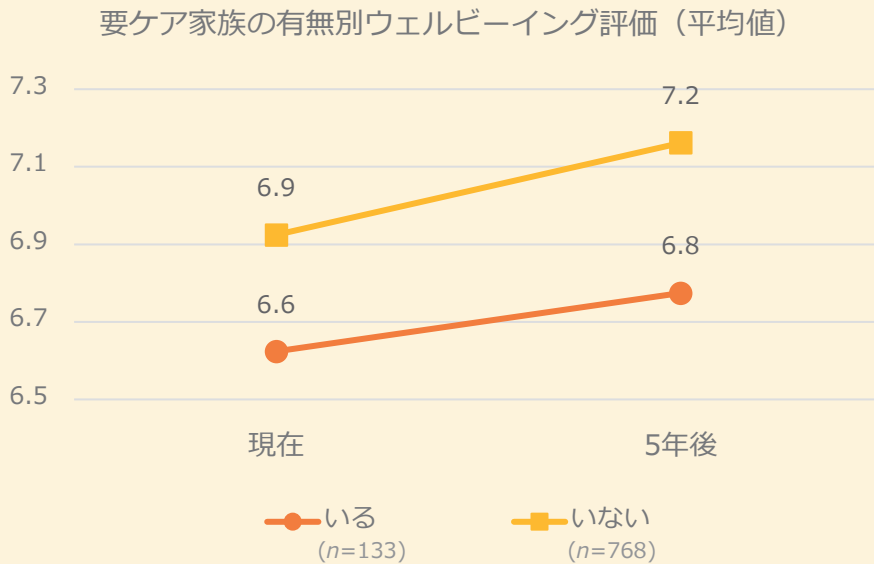


表 4 家族等にケアを要する人の有無別ウェルビーイング (WB) 評価と生活における実感の相関

	WB	余暇は十分感じる	困ったときに相談相手がいる	自分は楽観的な性格である	健康である	住まいは快適・安全・安心	必要な収入を得ている	日常生活に満足している	関心事やチャレンジしていることがある	さまざまな機会・自由がある	居場所があると感じる	地域つながりを感じる	さまざまな価値観を尊重する	困っている人を助けようとする
いる	現在	0.164	.261**	.248**	.335**	.262**	.290**	.440**	.268**	.207*	.466**	.185*	.177*	0.043
	5年後	0.133	.181*	0.140	.220*	.282**	.237**	.273**	0.168	.258**	.233**	0.087	0.004	-0.093
いない	現在	.174**	.357**	.208**	.291**	.277**	.324**	.433**	.173**	.252**	.342**	.218**	.123**	.112**
	5年後	.106**	.338**	.272**	.305**	.234**	.247**	.328**	.179**	.288**	.317**	.125**	.178**	.158**

アスタリスク (*) は、2つの変数間に統計的に有意な関係があるかどうかを示しており、「*」は、P 値が 0.05 未満であり、関係が統計的に有意である可能性が高いことを示す。同様に、「**」は、P 値が 0.01 未満であり、より信頼性が高いことを示す。

07 回答者のタイプ別類型

主成分分析を用いて、傾向別に回答者のグルーピングを行った。主成分分析とは、たくさんの変数（質問項目）を少ない変数に置き換え要約することで、データを理解しやすくする分析手法である。結果、自身の生活や周囲の環境への充足感を中心に考えるタイプが第1成分として抽出され、第2成分として他者配慮や他者への尊重を重んじるタイプが抽出された。

主成分分析結果（全体）

【第1成分】自身の主活動や居場所など総合的に満足

【第2成分】利他性があり他者を尊重する、主活動以外の活動を持つ

	成分	
	1	2
日常の主な活動に満足している	0.702	0.224
住まいは快適で、安全・安心であると感じる	0.661	0.148
日々の生活において居場所があると感じる	0.650	0.252
必要な収入を得られている	0.637	0.054
健康である	0.537	0.233
困ったときに相談する相手がいる	0.517	0.324
自分は楽観的な性格である	0.500	0.112
自分にはさまざまな機会・自由な選択肢がある	0.479	0.479
余暇時間は、十分だと感じる	0.467	-0.062
お住まいの地域とつながりがあると感じる	0.381	0.241
困っている人がいたら助けようとする	-0.089	0.834
他の人のさまざまな価値観や意見を尊重する	0.166	0.694
日常の主な活動の他に关心事やチャレンジしていることがある	0.313	0.512

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

主成分分析結果（女性）

【第1成分】自身の主活動や居場所など総合的に満足

【第2成分】利他性があり他者を尊重する、主活動以外の活動を持つ、機会・選択肢がある

【第3成分】十分な余暇時間を持つ

	成分		
	1	2	3
健康である	0.723	0.080	-0.146
日々の生活において居場所があると感じる	0.613	0.288	0.175
自分は楽観的な性格である	0.595	-0.034	0.081
住まいは快適で、安全・安心であると感じる	0.579	0.238	0.254
困ったときに相談する相手がいる	0.561	0.255	0.094
必要な収入を得られている	0.545	0.120	0.348
日常の主な活動に満足している	0.521	0.248	0.424
お住まいの地域とつながりがあると感じる	0.447	0.078	0.092
困っている人がいたら助けようとする	0.047	0.806	-0.170
他の人のさまざまな価値観や意見を尊重する	0.247	0.686	0.090
日常の主な活動の他に关心事やチャレンジしていることがある	0.089	0.525	0.518
自分にはさまざまな機会・自由な選択肢がある	0.333	0.512	0.381
余暇時間は、十分だと感じる	0.102	-0.107	0.807

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

主成分分析結果（男性）

【第1成分】自身の主活動や居場所など総合的に満足

【第2成分】利他性があり他者を尊重する、主活動以外の活動を持つ、地域とつながりがある

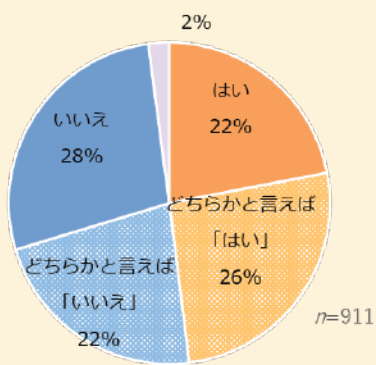
	成分	
	1	2
日常の主な活動に満足している	0.722	0.258
日々の生活において居場所があると感じる	0.719	0.170
住まいは快適で、安全・安心であると感じる	0.684	0.087
必要な収入を得られている	0.652	-0.087
困ったときに相談する相手がいる	0.562	0.289
健康である	0.523	0.331
自分にはさまざまな機会・自由な選択肢がある	0.465	0.442
自分は楽観的な性格である	0.419	0.288
余暇時間は、十分だと感じる	0.397	0.067
困っている人がいたら助けようとする	-0.093	0.798
他の人のさまざまな価値観や意見を尊重する	0.099	0.701
日常の主な活動の他に关心事やチャレンジしていることがある	0.286	0.538
お住まいの地域とつながりがあると感じる	0.315	0.381

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

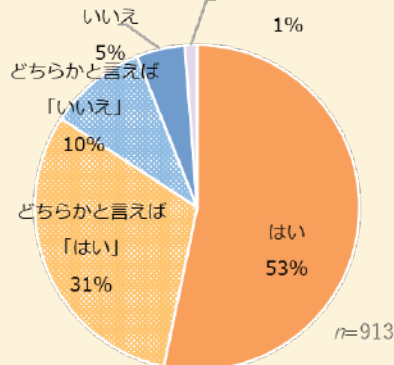
08 生活に関する実感

余暇時間、地域とのつながりに関して、ネガティブな評価が多いことがわかる。

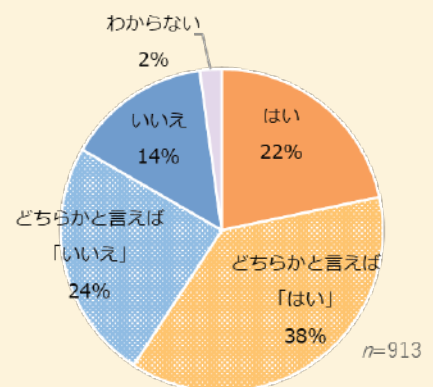
余暇時間は、十分だと感じる
わからない



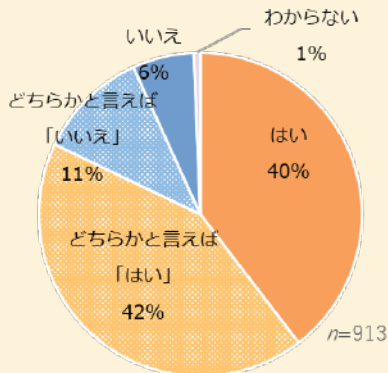
困ったときに相談する相手がいる
わからない



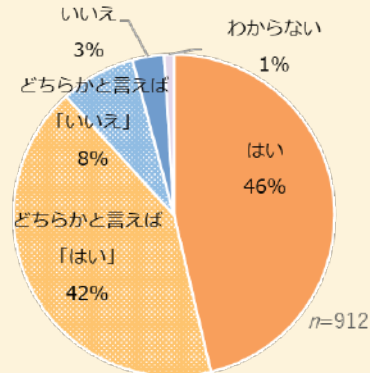
自分は楽観的な性格である
わからない



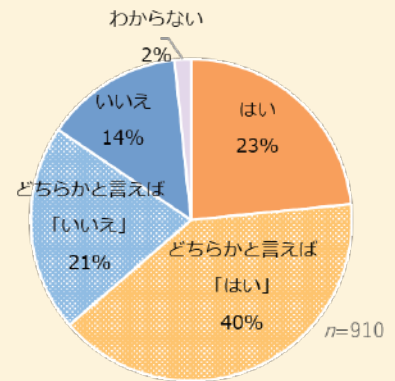
健康である
わからない



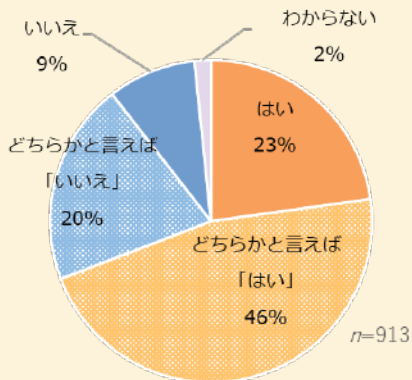
住まいは快適で、安全・安心
であると感じる
わからない



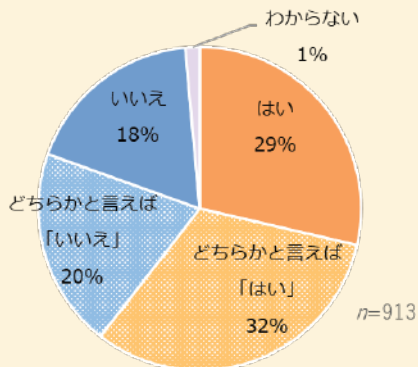
必要な収入を得られている
わからない



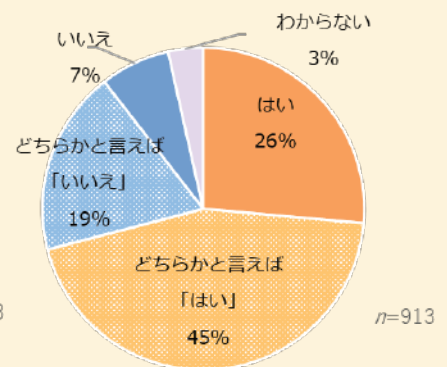
日常の主な活動に満足している



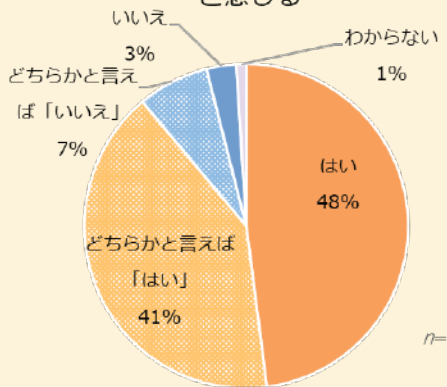
日常の主な活動の他に、関心事やチャレンジしていることがある



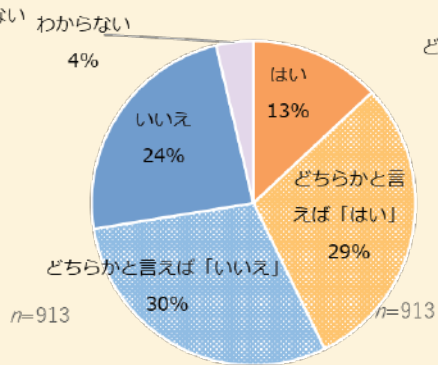
自分にはさまざまな機会・自由な選択肢がある



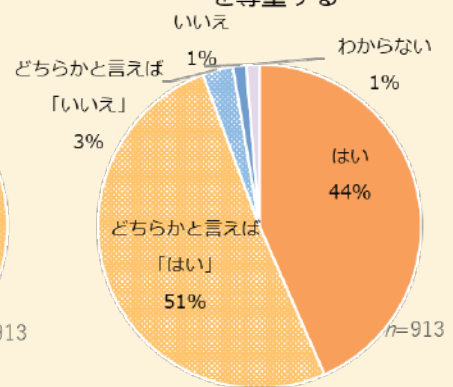
日々の生活において居場所があると感じる



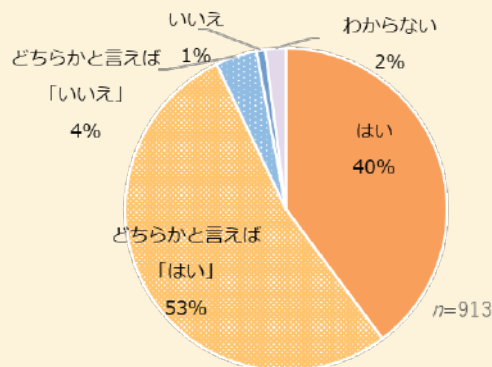
お住まいの地域とつながりがあると感じる



他の人のさまざまな価値観や意見を尊重する



困っている人がいたら助けようとする



参考文献

- (1) 金井雅之. ソーシャル・ウェルビーイング研究の課題. ソーシャル・ウェルビーイング研究論集. 2015; 1: 7-22.
- (2) 前野隆司. ウェルビーイングとは何か. 情報の科学と技術 [Internet]. 2022; 72 (9): 328-30. Available from: <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390856218602617728>
- (3) Hitokoto H, Uchida Y. Interdependent Happiness: Theoretical Importance and Measurement Validity. J Happiness Stud. 2015 Feb 30; 16 (1): 211-39.
- (4) 菊澤育代. ウェルビーイングの政策的構造に関する考察. 都市政策研究. 2023; (24): 47-56.
- (5) 新村出, editor. 「客観」. In: 広辞苑. 第7版. 岩波書店; 2018.
- (6) 新村出, editor. 「主観」. In: 広辞苑. 第7版. 岩波書店; 2018.
- (7) Weijers D. Hedonism. In: Internet Encyclopedia of Philosophy.
- (8) イングルハートロナルド, 山崎聖子訳. 文化的進化論. 勁草書房; 2019.
- (9) 渡邊淳司, Chen D, 安藤英由樹, 坂倉杏介, 村田藍子. わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために: その思想、実践、技術. ビー・エヌ・エヌ新社; 2020.
- (10) 牧島かれん. デジタル田園都市国家構想の実現とWell-Beingについて. 2022 Jun.
- (11) Diener E, Biswas-Diener R. Will money increase subjective well-being? Soc Indic Res. 2002; 57: 119-69.
- (12) 福岡県建築都市部職員. ウェルビーイング施策について福岡県との協議. 2023 Oct 10.
- (13) 森田修康. 自治体における幸福度指標の課題と方向性. 自治体学. 2014; 27 (2): 60-6.
- (14) 株式会社国際社会経済研究所. ウェルビーイングへとつながる まちづくりDXに関する調査研究報告書 【最終報告書】 . 2022 Mar;
- (15) Ryan RM, Deci EL. On Happiness and Human Potentials: A Review of Research on Hedonic and Eudaimonic Well-Being. Annu Rev Psychol. 2001 Feb; 52 (1): 141-66.
- (16) The Trustees of the University of Pennsylvania. PERMA™ THEORY OF WELL-BEING AND PERMA™ WORKSHOPS [Internet]. [cited 2023 Dec 1]. Available from: <https://ppc.sas.upenn.edu/learn-more/perma-theory-well-being-and-perma-workshops>
- (17) Ryff CD, Keyes CLM. The structure of psychological well-being revisited. J Pers Soc Psychol. 1995; 69 (4): 719-27.
- (18) 中坪太一郎, 平野真理, 綾城初穂, 小嶋祐介, Takuro N, Mari H, et al. 幸福感尺度使用の現状と今後の展望. 淑徳大学研究紀要 総合福祉学部・コミュニティ政策学部. 2021; 55: 141-58.
- (19) Lyubomirsky S, Lepper HS. A Measure of Subjective Happiness: Preliminary Reliability and Construct Validation. Soc Indic Res. 1999; 46 (2): 137-55.

- (20) 伊藤裕子, 相良順子, 池田政子, 川浦康至. 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究. 2003; 74 (3): 276-81.
- (21) 島井哲志, 大竹恵子, 宇津木成介, 池見陽. 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討. 日本公衆衛生雑誌. 2004; 51 (10): 845-53.
- (22) 鶴見哲也, 藤井秀道, 馬奈木俊介. 幸福の測定: ウェルビーイングを理解する. 中央経済社, 中央経済グループパブリッシング; 2021.
- (23) 内閣府政策統括官 (経済社会システム担当). 満足度・生活の質に関する調査報告書2023 [Internet]. 2023 Jul [cited 2023 Dec 20]. Available from: <https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/manzoku/index.html>
- (24) Biswas-Diener R, Diener E, Lyubchik N. Wellbeing in Bhutan. International Journal of Wellbeing. 2015 Jun 20; 5 (2): 1-13.
- (25) Diener E. Subjective Well-Being. Psychol Bull. 1984; 95 (3): 542-75.
- (26) 公益財団法人東北活性化研究センター. 「幸福度の定量化に関する調査研究」 報告書. 2013 Mar.
- (27) 一般財団法人日本総合研究所. 全47都道府県幸福度ランキング2022年版. 日総研出版; 2022.
- (28) 鈴木寛. 四半期ごとの日本全体&都道府県別GDW~Well-being (生活の豊かさ) 実感について~. 2022.
- (29) LIFULL HOME'S 総研. 地方創生のファクターX~寛容と幸福の地方論~. 2021.
- (30) デジタル庁. デジタル田園都市における地域幸福度 (Well-Being) 指標令和5年度全国調査結果が公開されました [Internet]. 2023 [cited 2023 Dec 2]. Available from: <https://www.digital.go.jp/news/7c303d33-6727-4a3e-aef7-1165ce104fda>
- (31) 白石賢, 白石小百合. 地方自治体の幸福度政策と幸福度指標の望ましいあり方について. 都市政策研究. 2017; 11: 1-14.
- (32) 広井良典. 幸せはローカルから: 幸福度指標をめぐる課題と展望. 月刊自治研. 2018 Apr; 60 (703): 16-24.
- (33) 高野翔. ウェルビーイングの概念の自治体政策への適用可能性と課題に関する考察: 福井県永平寺町におけるウェルビーイング調査をもとに. ふくい地域経済研究. 2021; (33): 41-59.
- (34) 公益財団法人荒川区自治総合研究所. 荒川区民総幸福度 (GAH) に関する 調査研究報告 —GAHアンケート調査5年分の解析から見えてきた 政策課題とその取り組みの方向性の試案—. 2018.
- (35) 松島みどり, 立福家徳, 伊角彩, 山内直人. 現在の幸福度と将来への希望 ~幸福度指標の政策的活用~. New ESRI Working Paper. 2013; 27.
- (36) 高尾真紀子, 保井俊之, 山崎清, 前野隆司. 地域政策と幸福度の因果関係モデルの構築: 地域の政策評価への幸福度指標の活用可能性. 地域活性研究= Journal of the Japan Association of Regional Development and Vitalization/地域活性学会 編. 2018; 9: 55-64.
- (37) Hobbs WR, Ong AD. For living well, behaviors and circumstances matter just as much as psychological traits. Proceedings of the National Academy of Sciences. 2023 Mar 21; 120 (12).
- (38) 加藤猛, 宮越純一, 大輪美沙. 市町村評価指標における客観-主観指標の相関分析と重回帰分析. 2022.
- (39) サステナブル・スマートシティ・パートナー・プログラム運営事務局 日本電信電話株式会社 新ビジネス推進室. SUGATAMI [Internet]. [cited 2023 Nov 10]. Available from: <https://digital-is-green.jp/sugatami/>
- (40) 町野和夫. 証拠に基づく政策立案 (EBPM) と 「豊かさ指標」. 年報 公共政策学. 2020; 14: 59-75.
- (41) 戸田市. 戸田市第5次総合振興計画. 2021.
- (42) 菊澤育代, 山田美里. 主観的ウェルビーイングの規定因と政策形成に向けた考察. 都市政策研究. 2024; 25.
- (43) 菊澤育代, 山田美里. ウェルビーイング ~新たな都市の評価に関する研究~. (公財) 福岡アジア都市研究所; 2023.
- (44) Wells T. Sen's Capability Approach [Internet]. Internet Encyclopedia of Philosophy. [cited 2023 Dec 21]. Available from: <https://iep.utm.edu/sen-cap/>
- (45) 佐藤徹. エビデンスに基づく自治体政策入門: ロジックモデルの作り方・活かし方. 公職研; 2021.
- (46) 大塚直, 諸富徹. 持続可能性とWell-Being: 世代を超えた人間・社会・生態系の最適な関係を探る. 日本評論社; 2022.

- (47) 広瀬幸雄. 環境配慮的行動の規定因について. 社会心理学研究. 1994; 10 (1): 44-55.
- (48) Diener E, Oishi S, Tay L. Advances in subjective well-being research. Nat Hum Behav. 2018; 2 (4): 253-60.
- (49) Wheeler BW, Lovell R, Higgins SL, White MP, Alcock I, Osborne NJ, et al. Beyond greenspace: an ecological study of population general health and indicators of natural environment type and quality. Int J Health Geogr. 2015; 14 (1): 1-17.
- (50) STIGLITZ JE, SEN A, FITOUSSI J-P. Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress. 2009.
- (51) Hitokoto H, Uchida Y. Interdependent Happiness: Theoretical Importance and Measurement Validity. J Happiness Stud. 2015 Feb 30; 16 (1): 211-39.
- (52) 菊澤育代, 山田美里. ウェルビーイング ～新たな都市の評価に関する研究～. (公財) 福岡アジア都市研究所; 2023.
- (53) Helliwell JF, Layard R, Sachs JD, Neve J-E De, Akinin LB, Wang S. World Happiness Report 2022. 2022;
- (54) イングルハートロナルド, 山崎聖子訳. 文化的進化論. 勁草書房; 2019.
- (55) 統計ダッシュボード. [cited 2023 Feb 8]; Available from: <https://dashboard.e-stat.go.jp/>
- (56) 本川裕. 世界120位「女性がひどく差別される国・日本」で男より女の幸福感が高いというアイロニー. PRESIDENT Online [Internet]. 2021 [cited 2022 Nov 24]; Available from: <https://president.jp/articles/-/44903?page=4>
- (57) 樋口耕一. KH Coder 概要と特長 [Internet]. KH Coder. 2023 [cited 2023 Oct 30]. Available from: <https://khcoder.net/>
- (58) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析【第2版】: 内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版; 2023.
- (59) 中間玲子. 青年期の自己形成における友人関係の意義. 兵庫教育大学研究紀要: 学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育・言語系教育・社会系教育・自然系教育・芸術系教育・生活・健康系教育・総合学習系教育. 2014 Feb; 44: 9-21.
- (60) 菊澤育代, 山田美里. 主観的ウェルビーイングの規定因と政策形成に向けた考察. In: 都市政策研究 第25号. 福岡アジア都市研究所; 2024. p. 45-55.
- (61) 周燕飛. 第9章 コロナ禍の女性雇用. In: 樋口美雄, 労働政策研究・研修機構, editors. コロナ禍における個人と企業の変容: 働き方・生活・格差と支援策. 慶應義塾大学出版会; 2021. p. 213.
- (62) 内閣府. 令和2年版男女共同参画白書. 2020.
- (63) García H, Miralles F. Ikigai: The Japanese secret to a long and happy life. Hutchinson; 2017.
- (64) 山田美里. 自由記述アンケートから読み解く仕事にまつわるウェルビーイング. 都市政策研究. 2024; 25.
- (65) 中西仁美, 土井健司, 柴田久, 杉山郁夫, 寺部慎太郎. イギリスの政策評価におけるQoLインディケータの役割と我が国への示唆. 土木学会論文集. 2005; 793: 73-83.
- (66) アジャイル型政策形成・評価の在り方に関するワーキンググループ [Internet]. 内閣官房行政改革推進本部事務局. [cited 2023 Nov 25]. Available from: <https://www.gyokaku.go.jp/singi/gskaigi/agile.html>
- (67) アジャイル型政策形成のイメージ. 2022 [cited 2023 Nov 25]; Available from: https://www.soumu.go.jp/main_content/000797750.pdf
- (68) 佐藤徹. 施策評価の理論と実際. 評価クォータリー. 2015; 4: 41-56.
- (69) 石川善樹. Interview. 2022 Dec.
- (70) 富山県知事政策局成長戦略室ウェルビーイング推進課. 富山県のウェルビーイング指標に関する取組みが総務大臣賞を受賞しました! [Internet]. 富山県Webサイト「わたしの、みんなのウェルビーイング・アクション!」. 2023 [cited 2024 Feb 26]. Available from: <https://wellbeing.pref.toyama.jp/topics/detail/d4d7834f-633d-4b7c-8467-7a4b2c26d5fb>
- (71) 富山県. 県の取組み [Internet]. 富山県Webサイト. 2023 [cited 2024 Feb 26]. Available from: <https://wellbeing.pref.toyama.jp/prefecture/>
- (72) 富山県. ウェルビーイングの推進 [Internet]. 富山県Webサイト. 2023 [cited 2024 Feb 26]. Available from:

<https://www.pref.toyama.jp/100224/wellbeing-toyama.html>

- (73) 佐伯政男, 大石繁宏. 幸福感研究の最前線. 感情心理学研究. 2014; 21 (2): 92-8.
- (74) Diener E, Oishi S, Tay L. Advances in subjective well-being research. Nat Hum Behav. 2018; 2 (4): 253-60.
- (75) 町野和夫. 主観的「豊かさ指標」とその政策への応用可能性. (一財)北海道開発協会平成25年度研究助成サマリー. 2015; Report 01.
- (76) Heffetz O, Rabin M. Conclusions Regarding Cross-Group Differences in Happiness Depend on Difficulty of Reaching Respondents. American Economic Review [Internet]. 2013 Dec; 103 (7): 3001-21. Available from: <https://www.aeaweb.org/articles?id=10.1257/aer.103.7.3001>
- (77) 山田美里. 自由記述アンケートから読み解く仕事にまつわるウェルビーイング. 都市政策研究. 2024; 25.
- (78) 福岡市福祉局高齢社会部高齢社会政策課. 福祉・介護人材 [Internet]. 福岡市. 2023 [cited 2024 Feb 21]. Available from: <https://www.city.fukuoka.lg.jp/fukushi/shakaisanka/health/00/fukushijinjai.html>
- (79) 厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室. 第8期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数について [Internet]. 厚生労働省. 2021 [cited 2024 Feb 21]. Available from: https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000207323_00005.html
- (80) 日本経済新聞. 介護就労者が初の減少、低賃金で流出 厚生労働省分析. 日本経済新聞 電子版 [Internet]. 2023 Oct 23 [cited 2024 Feb 21]; Available from: <https://www.nikkei.com/article/DGXZQUA205120Q3A021C2000000/>
- (81) 風間雅江, 本間美幸, 八巻貴穂. 高齢者介護施設に勤務する介護専門職の主観的ウェル・ビーイングについての質的研究. 北翔大学『人間福祉研究』. 2011; 14: 23-32.
- (82) 公益財団法人介護労働安定センター. 令和4年度介護労働実態調査. 2023.
- (83) 野中大樹. パワハラ、セクハラ、カスハラにいつまで耐えられるか 介護職員 覆面ホンネ座談会. 週刊東洋経済. 2024 Feb 17; 54-5.
- (84) 井口克郎. 社会保険基礎構造改革・介護保険制度と介護施設の労働問題：人手不足の作出・助長から先端技術導入・科学的介護、介護労働の解体へ. 大原社会問題研究所雑誌. 2023 Jun; 776: 1-20.
- (85) 厚生労働省. 「働きがい」をもって働くことのできる環境の実現に向けて. In: 令和元年版 労働経済の分析：人手不足の下での「働き方」をめぐる課題について. 2019. p. 170-263.

謝辞

本研究で実施したアンケートにご協力くださった皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。また、アンケートに際し、内浜校区自治協議会、内浜公民館、博多駅エリア発展協議会、博多まちづくり推進協議会、We Love 天神協議会、福岡地域戦略推進協議会、福岡未来創造プラットフォーム、の皆様にご多大なるご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

【執筆者と担当章】

(公財) 福岡アジア都市研究所 研究主査 山田 美里 (総括)

はじめに、第1章、第2章、第3章、コラム2、第5章、表紙絵

(一社) Aluten 代表 菊澤 育代

第1章、第2章、コラム1、第3章、第4章、コラム3、第5章

【データ収集等】

(公財) 福岡アジア都市研究所 研究スタッフ 張 睿

(公財) 福岡アジア都市研究所 都市政策資料室 司書 本田 佳奈

2023 年度総合研究報告書

ウェルビーイング

～新たな都市の評価に関する研究 II～

2024 年 3 月 29 日 第 1 版発行

発行 公益財団法人 福岡アジア都市研究所 (URC)

〒812-0011 福岡県福岡市博多区博多駅前 2 丁目 8 - 1

TEL) 092-710-6431 FAX) 092-710-6433

E-mail) info@urc.or.jp WEB) <https://urc.or.jp/>

■ 免責事項

本書は、できる限り正確な情報を掲載しておりますが、その全てを保障するものではありません。本書利用により生じたいかなる損害において一切責任を負いません。

■ 著作権

本書のコンテンツについては、リンク先情報、提供元が記載されている画像等を除き、(公財) 福岡アジア都市研究所が著作権を所有します。本書を引用される際は、出典名を「(公財) 福岡アジア都市研究所 (URC)」と明示してください。なお、当研究所に著作権が帰属しないコンテンツの引用については、別途、提供元の許諾を得る必要があります。

Copyright © 2024 The Fukuoka Asian Urban Research Center. All Rights Reserved.

ISBN 978-4-9911556-5-9



ISBN 978-4-9911556-5-9